
Fate ~ Legend night ~

メロンビスケット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e \ L e g e n d n i g h t \

【Nコード】

N 2 8 0 4 I

【作者名】

メロンビスケット

【あらすじ】

イマジンブレイカーとエースオブエース

魔法使いの従者と自称元ソルジャークラス1st

光坂高校生徒会長と背徳の炎

掃除屋とナイトオブゼロ

借金執事と虚無の担い手

対甲鉄拳と天覇絶槍

アストラルの若社長と最強の魔導書

彼らが出会いそして戦い抜く第六次聖杯戦争

注

F a t e 本編のキャラは一人も出ません

ブローグ

かつて冬木の地で始まりそして終わったはずの戦争が再び始まろうとしていた、それがどのような結果を生み出しそして何が起こるか
は誰にも分かりはしない、しかしそれは確実に起こり始まっていく
誰にとっても魅力的で誰もが願った目標のために静かにそれは始ま
ろうとしていた。

1月25日 契約、新たな戦いの日々なの（前書き）

舞台設定は禁書目録とネギま！？の学園都市を足して魔法と超能力と未来科学が混在する、ご都合主義かつ無理やり設定ですがよろしくお願いします。

1月25日 契約、新たなる戦いの日々なの

「聖杯戦争？」

ここは学園都市にある、上条当麻の自室、ここで当麻は友人である土御門から聖杯戦争についての一通りの説明を受け聞き慣れない、単語に当麻は聞き返した

「そうだぜ」カミヤん、それがこの学園都市で起ころうとしているんぜよ」

「えつと」さつきの説明じゃ参加者は魔力が使えないとダメなんじゃないのか？」

当麻は説明の中にあつた疑問を投げかけながら、ああこうやってじっくり説明されるってことはコレに出なきゃいけないだろうなと漠然に思った。

「大丈夫ぜよ、この第六次聖杯戦争に限って言えば契約やら最低限の魔力供給は大聖杯が行ってくれるから、この天才陰陽師土御門元春が作った、魔法陣に手を置くだけでいいんだぜ」。

「いやあ」専門外の魔術だから苦労したにや」

と言いながら、自慢げに鞆の中から魔法陣の書かれた画用紙を取り出した

「えつと」上条さんは聖杯とかいうのに叶えて欲しいことなんてないんで、そんなトンデモ人間バトルに参加したくないのですが」

ぶつちやけもう外堀埋められてるしやらざるをえないよなあとか思いながら、当麻は最後の抵抗を試みた

「カミヤん、これはそんな問題じゃないんだぜ」大体終わったはずの聖杯戦争が再び行われるだけでもきな臭いの、今回の聖杯戦争はおかしなことが多すぎる、明らかに誰かが意図的に起こそうしている、もしかしたら何か良くないことが起きるかもしれないし、それに他の参加者も学生だから死にはしらないと思うし、と言うわけで頼んだにや」

そう言いながら、土御門は魔法陣と何かのメモを机に置きダッシュで出て言ったのだった、文句を言いそびれ途方にくれながらも土御門の残したメモを見る当麻

「契約が終わったらサーヴァントと一緒にこの地図の高校にいる監督役に接触すること」

当麻はため息を一つついて、諦めたようにどんよりした表情で机の上にある魔法陣を眺めた

「まあ、実際ヤバイ問題であることは間違いないんだけどな……やるしかないか」

そう言って当麻は聖杯戦争に参加する決意を固めた。

そして、魔法陣の上に左手を置いた。

その瞬間、当麻の部屋が桜色の光に包まれた、それは数秒間続きやがて収まった時には長い綺麗な栗色の髪を左側に一纏めにしてサイドポニーテールした、白と紺を基調とした制服のようなものの着て、首から赤い宝石のようなものをかけた二十歳ぐらいの女性がいた

「この度、アーチャーとしてこの聖杯戦争に呼ばれました、時空管理局本局武装隊、航空戦技教導隊所属戦技教導官、高町なのは一等空尉です、よろしくねマイ・マスター」

そんな事を言われながらも当麻は突然現れた、妙齡の女性にどぎまぎしながらも、挨拶を返した

「えっと、上条当麻です。あゝえっとよろしく願います、高町さん」

当麻が慣れない様子で一生懸命敬語で挨拶すると、なのはは、にやははと朗らかに笑い応えた

「なのはでいいよ、当麻君、それに敬語も必要ないよ、当麻君は私のマスターなんだから」

「そうなのか？まあなのはさんがいいならそれでいいけど、改めてよろしく」

「こちらこそよろしくね、当麻君。」

そう言いながら、二人は握手を交わした。

こうして、最後の契約が結ばれ誰にとっても予想外の第六次聖杯戦争は開戦の時を迎えたのだった。

涼宮ハルヒの宣言

ここは、とある高校の元文芸部室、とつくの昔に完全下校時間を過ぎ、外は完全に暗くなつたその部屋にはSOS団を自称する謎の集団が上条当麻なる人物の到着を待っていた。

「おつそーい！一体いつまで私達を待たせるつもりなのよ、もう8時よ8時！キヨンあんた本当にその土御門とか言つものから連絡受けたんでしょね」

「おい、ハルヒそもそもお前が早く7組目に会つて、聖杯戦争を始めたいからつて土御門さんに無理言つたんだろつが、向ここの都合も考えてやれ」

「うつさいわねゝそんな事わかつてるわよ、問題は7時には来るとか言つておきながら無断で1時間も待たせるつてことよ、ね、古泉君」

「そうですね、こちらの都合を押し付けているとはいえ、1時間の遅刻はいたたけませんね」

「ほら、見なさいキヨン……………」

その頃、SOS団の部室の外では5分ほどの間当麻とアーチャー（なのは）が立ち尽くしていた

「あのゝマスター？ここで登録するんですよね？なら早くしたほう

が」

「アーチャー」

当麻はアーチャーの方に向き直って、今までにない真剣な顔をして話し始めた

「えっ、あのな、何んですか？」

今までにない真剣な顔つきで見つめられ、顔が真っ赤になるアーチャー

「聖杯戦争、やめない？」

出てきたのは、まさかのヘタレな台詞、急な展開にずっこけそうになるアーチャー

「あ、あのここまで来て、急にどうしましたか？」

「どうかしましたか？じゃありません——ん！上条さんはこのドアをくぐってSOS団の知り合いだと思われたくありません！」

「えっ、あ、あのとりあえずSOS団ってなんですか？」

唐突な当麻の大声に驚きながらも、SOS団についての説明を求めるアーチャーに当麻は静かに語り始めた

「いいか、SOS団ってのは第七学区にある北高校に存在する、史上最強の愉快犯でな、近隣の学区ではそれなりに有名だったんだけど一氣に有名になったのは去年の文化祭だ。」

この学園都市において、文化祭はかなりの大イベントである。魔法使いや超能力者、果てはサイボーグに至る映画に出てきそうなSFとファンタジーが一緒になった、この街では三日間に日本人だけでなく大勢の外国人が訪れ、様々な企画を行いさながら1つのテーマパークの様相を呈しており、1日で数十億の金が動くこのイベントでSOS団は学園都市内に存在するありとあらゆるTV、パソコン、ラジオ、無線にいたるまで全てをジャックしSOS団が自作した“朝比奈みくるの大冒険”という謎の自主制作映画を約20分に渡り放送したのである。しかし、学園都市側も一学生に電波をジャックされたと発表するわけにもいかず、お咎めなしとなっている、これによりSOS団の名は学園都市内だけでなく世界中に知れ渡ったの

であつた

「これを契機にイベントがあるたびになにかハプニングを起こし、奴らは史上最強の愉快犯の名を欲しいままにしているのだ」

長い説明を聞き終えたアーチャーは私もそんな人達と知り合いだと思われたくないなと思い苦笑した

「にやはは、結局どうやって電波ジャックなんてやったんですか？」

「いや、それがよくわからんらしい、あくまでも噂なんだがSOS団には宇宙人がいるらしくてな、そいつが×？○ @ # ●」

「いい加減しなさい！黙って聞いてれば言いたい放題言ってくれるじゃない」SOS団について語っていた当麻は、勢い良く開いたドアのドアノブで不運にも脇腹を強打し悶絶している最中に黄色いリボンつきのカチューシャをつけた北高の制服を着た少女に、襟を掴まれ激しく上下に揺すぶられた、見かねた北高の制服を着た普通ぼつーい少年が近いずてきた

「ほら、そのへんしといてやれよ、ハルヒ、早くしないと終バス逃しちまうぜ」

ハルヒと呼ばれた少女は当麻の襟から手をはなし今度は少年の方に噛みついた

「ちよつとキョンあんたはSOS団が馬鹿にされたつて言うのに、悔しくないの！」

「馬鹿にするもなにも全部、本当のことだろうが、おい、あんた上条当麻だよな大丈夫か？」

「うう、何故俺がこのような目に」当麻はブツブツ文句を言いながらアーチャーとともに部屋に入って行った、ハルヒは部屋の一番奥にあるデスクに着くと自己紹介を始めた

「一応、自己紹介をするわね、今回の聖杯戦争の監督役になったSOS団の団長の涼宮ハルヒよ」

「副団長の古泉です、よろしくお願いします」

「平団員のキョンだ、よろしくな」

「あ、あの、えつとそのあ、朝比奈みくるです、よろしく願ひし

ます」

「長門有紀」

「で、登録するからあんたの名前とサーヴァントのクラスと真名は？」

ああ、そういえばそんな事しに来たんだよね」と今更思い出す当麻

「ああ、俺の名前が上条当麻でサーヴァントのクラスはアーチャーだ」そう言っただけは隣りにいるアーチャーに目で合図した

「時空管理局本局武装隊、航空戦技教導隊所属戦技教官、高町なのは一等空尉です」

アーチャーは敬礼しながら、自分の真名を告げた「うん、わかったわ。これで聖杯戦争の準備が整ったわ、有紀アレの準備よろしく」

「わかった」

あわただしく、キーボードを叩き始める長門

「えっと、何をするんですか？」

アーチャーはとりあえず横で暇そうしている、キヨンに話しかけた「えっと、文化祭の電波ジャックの話知ってますよね、あれと同じことするんですよ」

そしてハルヒにマイクが渡される、そして聖杯戦争の存在を知る全ての人の携帯電話が鳴り響き、それら全てに高らかに宣言する

「第六次聖杯戦争の監督役、SOS団、团长涼宮ハルヒが宣言するわ、たった今から第六次聖杯戦争……ここに宣戦を布告するわ」

涼宮ハルヒの宣言（後書き）

上条当麻

スキル

幻想殺し（イマジンプレイカー）

ランクス

それが、異能の力であるならば触れるだけで、消滅させることが出来る能力

しかし、効果範囲が右手首から先だけと狭いうえに自分にかかる、治癒呪文も打ち消したり、核を破壊しないと意味のない魔法とは相性が悪かったり、地脈や人間の魂や生命力そのものなどいくつか例外存在するなど弱点が多い、またこの作品におけるサーヴァントは英霊の魂を軸に受肉し地脈によるサポートを受けている設定なので例外に該当する

3時間目 The first cross

北高の屋上には二人の男女が携帯を耳に当てて、ハルヒの宣言を聞いていた

「やっぱり、今日最後の一組が揃ったみたいね」

オレンジ色の長い髪を鈴のついたリボンでツインテールにした勝ち気そうな目をした、麻帆良学園女子中等部の制服を着た少女、神楽坂明日菜がそこにいた

「……………いきなりしかけるのか？」

「当然よ、ただ待つてるだけなんて退屈じゃない」

逆立った金髪に青い瞳に整ったいわゆる美形と呼ばれる顔立ちに黒い服に、左の肩付近には狼のようなレリーフが付き、背中から腰にかけて六本の大剣を装備した、クラウド・ストライフが明日菜と対峙していた。「それに、敵が来るのをわざわざ待つより正面から叩き潰したほうが、楽じゃない」

「……………ハア……………好きにしろ」

自信満々によくわからない理論を展開する明日菜にたいして、どうにでもなれと投げやりに返事をするクラウド。

しばらくそのまま待つと北高の制服ではない学ランを着たツンツン頭の少年と白と紺色の制服らしき物を着た栗色の髪をサイドポニーテールにした女性が正門から出て行こうとするのが見えた

「どうやら、あの二人のようね、行くわよセイバー」

「わかった」

セイバー（クラウド）はそっけない返事をする明日菜を抱えると屋上から、二人の目の前に飛び降りた。

「あんた、聖杯戦争のマスターね、とりあえず此処じゃなんだから運動場の方に行きましょう」

そう、明日菜が言うときセイバーは勿論、飛び降りて来た二人に驚いていた少年と女性も黙ってついてきた。

運動場の真ん中で二組が睨み合う形になった所で、明日菜が一番先に語り始めた

「私は麻帆良学園女子中等部の神楽坂明日菜で、こっちのツンツン頭の金髪がセイバーそっちは？」

明日菜の名乗りにたいして、少年も名乗り始めた

「俺の名前は上条当麻で、サーヴァントのアーチャーだ」

「よろしくね、明日菜ちゃんにセイバー君」

そこそこ緊張しながら名乗る当麻に対し、リラックスした様子で敵に挨拶をする

「明日菜ちゃんって、今から私たち戦うんだけど」

「……セイバー君？」

まさかの、フレンドリーな挨拶に明らかに調子を崩された二人に、何かを思い出したように話し出したように喋り始める当麻

「あ——！思い出した、何か聞いたことあると思ったら麻帆良新聞で読んだ、今話題の10才の子供先生と同棲しているショタコンツンデレ少女だ——！」

夜中の学校の運動場に響き渡る当麻の叫び声

余談になるが、なかなか入って来ない女子校の情報を手に入れるために金を出して買うバカ達があり、そしてそのバカ達に売りに来るパイナップル頭の巨乳女子中学生がいるのである、因みに当麻の親友の青髪ピアスは愛読者であり、当麻はそれを見て騒いでいたのを聞いたのであった

「にやはは……10才の先生と同棲？」

アーチャーの乾いた笑いと呆れが多分に含まれた疑問に明日菜が吠えた

「ネギとは、そんな関係じゃないわよ！大体私はいいんちよみたい

にショタコンでもなければツンデレでもな——い！」

顔を真っ赤にしながら、荒い息を吐き叫んだところで逆効果なのはわかりきっていたが当の本人は気づいていなかった。

「いや、少なくともツンデレはデマじゃないだろ」

そんなこと言われますます顔を赤くして叫ぶ明日菜

「セイバー！マスターが馬鹿にされてんのよ、あんたもなんか言いなさいよ」

「……………興味ないね」セイバーのその言葉に遂に何かが切れる音がした。

「……………アデアッド、ついてらっしやいセイバー」

明日菜はポケットの中から、一枚のカードを取り出しそれをスチール製のハリセン‘ハマノツルギ’に変化させ、更に自身の持つ氣の力により上昇した身体能力を持つて当麻に八つ当たり気味に突進した、そして数瞬遅れてセイバーも腰の大剣を一本抜き放ちアーチャーに切りかかった

しかし、どちらの攻撃も成功することはなかった、明日菜の持つハマノツルギには自身と同じように魔力無効果能力‘マジックキャンセル’を有しておりどんなシールドを持っていようと完全に受けに回れば貫通するはずであった、しかし当麻が明らかに苦し紛れに出した、‘ただの右手’によって弾かれ逆にハマノツルギに輝が入ったのであった。また、セイバーもアーチャーの持つ桜色の膜に弾かれ一時撤退したのであった、自分の自信のあった攻撃を防がれ少し頭が冷えた明日菜は上条当麻という少年の名を思い出したのであった、去年の夏休み頃からつい最近まで水面下で続いた、学園都市とキリスト教最大派閥のローマ清教との戦争に際して流れた都市伝説のような少年、

曰わく、その少年の右手はありとあらゆる異能を殺し尽くす

曰わく、学園都市最強と呼ばれる一方通行‘アクセラレータ’を倒した

曰わく、ローマ清教の艦隊を沈めて来た

曰わく、ローマ清教の幹部神の右席を全員を倒した

曰わく、ローマ清教の戦争の目的は初めから彼を殺すことだった

その少年の名は幻想殺し‘イマジンプレイカー’、上条当麻

噂の真偽はわからないが魔力無効果能力の持つハマノツルギを防ぎ、

更に輝を入れたその力に明日菜は戦慄した

（とんでもないバケモノが参加しているわね、でも）

明日菜もそれなりに修羅場をくぐり抜けた猛者である、すぐに気持ちを切り替え当麻を睨みつけた。

「やっぱり、戦うしかないんだね」

アーチャーは少し悲しそうな声を出した後、決意に満ちた目をして、首から下げていた赤いビー玉くらいの石を持ち、朗々とキーワードを唱えた

「我、使命を受けし者なり

契約のもと、その力を解き放て

風は空に、星は天に、不屈の心はこの胸に、この手に魔法を

レイジングハート・エクセリオン、セットアップ」

そう、唱えるとなのはの周りは光に包まれた、そして光がなくなっただ後にはさっきまでとは違い、白いリボンでツインテールにして、服も、白いロングスカートにいかにも魔法少女らしさを出したバリアジャケットを着こみ、白いバトン状の杖となったレイジングハートを持つアーチャーの姿があった、そして無言でレイジングハートを構えた、それを受け、セイバーももう一本大剣を抜き両手に構えた、そして明日菜もハマノツルギを構え当麻に再度向き直り、当麻も自身の唯一の武器である右手を握り締めた、そして、不気味な静寂が訪れた後、本当の戦いが開始された。

3 時間目 The first cross (後書き)

高町なのは

宝具

レイジングハート・エクセリオン

一応は遠距離からの射撃による援護が得意な典型的な後衛ではあるが、一対一が苦手であるわけではなく、複数の誘導性の魔力弾を使ったり、バインドと呼ばれる拘束魔法からの高威力の砲撃魔法などを使い十二分に戦える

1月25日？ 甘い決着、それから…

初めに動いたのはアーチャーだった

「アクセルシューター」

30近い桜色の魔力弾を展開すると

「シユート」

セイバーに放った。

それは、アーチャーのスキル、マルチタスク（アーチャーの使うミッドチルダ式の魔導師に必須であるスキルで分割された思考によって並列思考を可能とする。

これにより複数の誘導弾を手動で動かせる）によって制御され360°からセイバーに襲いかかった。

それに対しセイバーは両手に持った大剣で時に切り払い時に受け止め、高速で移動しながら、チャンスを待っていたそして魔力弾の数が減り始めた頃に弾幕の中に僅かな隙が生じた

その隙を突きセイバーはアーチャーに突進した、今度は防がれぬように両手に持つ大剣を合体させ一本の大剣にすると

「ハアアアア」

気合いを込めた声と共にアーチャーに大剣を振り下ろした

《Flash move》

レイジングハートから機械的な女性の声が響くと完璧に捉えていたセイバーの大剣を回避し、高速で後退した

「今度は、こっちの番」

《shooting mode》

先端を音叉状の射撃に特化した形に変え

「エクセリオン・バスター」

先端に桜色の魔力を収束させ

「シュート」

極太の砲撃魔法を放った、セイバーはそれを真っ直ぐに見定め大剣を振りかぶって、エクセリオン・バスターを真っ二つに切り裂いた。

当麻は始まってまだ数分しか経っていない戦場で自分には勝ち目が無いことを悟っていた、相手も自分の能力に気づいたらしく自分の腕や武器が掴まれないようにしているらしく攻め倦んでいるようだだったが、それでも明らかに手を抜かれているのだ

（ハリセンが武器って、ナメられ過ぎだろ）

そう、明日菜の武器はハリセン？なのだ、ふざけているにも程があるのであった、

そして、魔法攻撃を使わずに気で強化した身体能力のみで格闘を行う明日菜は苦手なタイプだった、チラリとアーチャーの方に目を向けて見ると複数の桜色の魔力弾でセイバーを牽制しつつ、時折砲撃魔法を放ちセイバーと互角に渡り合っていた

「余所見してんじゃないわよ」

明日菜の攻撃が攻撃をしかけて来るがそれを間一髪でよけつつ、右手で明日菜を掴むべく右手を突き出すが、明日菜の方が早く掴もうとする右手に攻撃を加えてくる

「ええい、シヨタコンツンデレ中学生め、ハリセンを振り回すのは止めなさい、上条さんはあなたをそんな風に育てた覚えはありません」

当麻は明日菜に軽く冗談を言うと、明日菜は青筋を立てて吠えた

「だっからっ私はシヨタコンでも」

今まで以上に鋭い一閃を放つ明日菜

「ツンデレでもない！」

そして、体制の崩れた当麻の腹に明日菜のつま先が突き刺さった、当麻は肺の空気を全て吐き出しふらふらと立っているだけの状態となった

（やつべえ、地雷踏んだ）

「そつれっから」

明日菜はハリセンを大きく振りかぶるって

「あんだに、育てられた覚えもない！」

当麻の頭を横から思い切り殴りつけた、当麻は錐搦み状に一回転しながら、吹っ飛んだ

「マスター」

アーチャーの当麻を心配する悲痛な叫びが響くが、それがサーヴァント同士の戦いにおいて致命的な隙を生み出した

「余所見している、隙はないぞ」

「しまっ」

《Protection》

レイジングハートが咄嗟にバリアを展開するが、バリアを貫通され、さらにはバリアジャケットのリアクターパージ（バリアジャケットの一部をパージすることにより、一時的に防御力を上げる最終手段）を強いられ吹き飛ばされた、そして当麻の隣りに着陸した、しかしセイバーは三本目の大剣を引き抜き更に合体させると、渾身の力を込めて地面に大剣を叩きつけた、するとライトグリーンの衝撃波となつて当麻とアーチャーに襲いかかった。

（くっ、せめてマスターだけでも）

《Protection》

桜色のバリアが張られ、衝撃波を正面から受け止めようとした時、アーチャーの前に当麻の右手が突き出された

ライトグリーンの衝撃波が当麻の右手に触れた途端に嘘のように消滅した

「今だ、アーチャー」

当麻の声に技後硬直で動けないセイバーにレイジングハートを向けるアーチャー

「今度こそ全力全開、エクセリオン・バスター」

レイジングハートのカートリッジシステム（あらかじめ魔力を込めておいた、弾丸型のカートリッジをロードすることにより、魔法の効果を上げることができる）が起動し今までとは、比べものにならない魔力が込められる

「シュート」

桜色の暴力的な砲撃魔法はセイバーに直進した

「セイバーは、やらせない」

明日菜はハマノツルギをハリセン状態から片刃の黒い大剣に変形さらに、気と魔力を融合させ強大な力を得る究極技法アルデマ・アート感卦法を使い、爆発的な速力でセイバーの前に立った。

トメー・アルケース・カイ・アナルアース
「無極冊太極斬！！！！」

大剣の一振りと共にアーチャーの砲撃魔法を打ち消した

後には二つの打ち消された攻撃による、砂煙だけが残った

（これで、向こうはグロッキーのはず、勝った）

明日菜は勝ちを確信した、向こうのサーヴァントは魔法攻撃中心、自分がアーチャーを押さえ込めば必ずセイバーがマスターの方を仕留められる

そう、安心してしまったのであった、命掛けの戦闘に目処がついたことによりできた僅かな隙、その隙に砲撃魔法の残響と砂煙に隠れた当麻に明日菜は気がつかなかったのである

気がついた頃には明日菜の腹に深々と当麻の右手が突き刺さっていた、幻想殺しは究極技法であるはずの感卦法を打ち消し、ただの女子中学生並みになった明日菜の体を殴り飛ばした

「マスター」

そして、今度は明日菜に気を取られたセイバーに隙が出来てしまったカートリッジを二つロードし先ほどよりも更に太く力強い桜色の魔力がセイバーに向けて発射された

慌てて、セイバーは大剣を逆袈裟切りに大剣を振るが、アーチャーの砲撃魔法はセイバーの大剣を弾き飛ばし、セイバーのクラスに与えられる抗魔力を貫通し、セイバーを吹き飛ばした

後に残ったのは、力を使い果たし運動場に座り込んだ当麻とリアクターパージにより胸のリボンが少し無くなったがほぼ無傷のアーチャー、油断していた時に腹を殴られうずくまる明日菜とあちこちダメーজを受け片膝をついたセイバー、そして二人の武器である大剣は持ち主の手を離れ地面に転がっていた、どちらが優勢かは明らかだったしかし

「あのー今日は引き分けてことにして、この辺でお互い帰らない？」

「……はあ？」「……」

声を出した、当麻以外の全員が驚きの声を上げた、お互いは敵同士でありついさっきまで殺し合いをしていたのだ、その相手が今、瀕死の状態で武器もなく倒れているのとどめをささない理由など何処にもないのだ

「どういうつもりだ？」

腹を殴られてしゃべれない明日菜の代わりにセイバーが聞き返した「だって、その、ほら俺と戦う時にさ、大剣じゃなくてハリセン状態で戦ってくれただろ、それって俺を殺さないように手加減してくれただろ」

そう、幻想殺しによって一切の身体強化、治癒魔法がきかない魔法

に対して右手以外全く抵抗力のない当麻に対して、感卦法や大剣状態のハマノツルギを使うと確実に殺してしまうのだ、つまり明日菜は当麻が死なないように手加減していたのだ

「手の内を隠していただけかもしれないぞ」

「だとしたら、急所を外さないし、攻撃する時に気を弱めたりしないはずだろ」

明日菜と同じように腹を蹴られ、頭を殴られた当麻が動けた理由はそれだったのだ

「アーチャーもいいよな？」

「はあ、私も甘いとは思っていたけど、ここまで甘くないよ、でもいいよマスターの好きにするといいよ」「サンキューアーチャー」セイバーはそれを見て立ち上がり、無言で礼をすると自分の大剣とハマノツルギを拾い、明日菜を横抱き（いわゆるお姫様抱っこ、明日菜は軽く抵抗した）にして歩き出してしばらくした後、振り返らずに言った

「借りは必ず返す」

そう言った後、セイバーは夜の闇に消えていった

「なあ、借りは返すってリベンジするって意味かな」

「さあ？逆の意味だといいんですけど」

それから、まだ座り込んだままの当麻の前にアーチャーは屈みこんだ

「家までおぶりますから、乗って下さい」

「いや、いいよ、そんな女の子に」

「大丈夫、私だってサーヴァントだよ、マスターの世話くらいさせてよね」「じゃあ、お言葉に甘えて」

そして、当麻はアーチャーの背中を満喫する幸せイベントに突入しようとしていた

（ムフフ、聖杯戦争とかいう不幸イベントに参加するのだから、これぐらいは役得だよなあ）

この時に、忘れていた事が二つあった、一つ目は当麻の右手が幻想殺であること、二つ目はアーチャーがバリアジャケット（魔力で

作られ防護服のような物）を着たままであること、つまりバリアジャケットに幻想殺して触れるということは……

……

当麻の右手がアーチャーの肩に触れた瞬間、バリアジャケットが消え去りアーチャーの美しい裸体が当麻の目の前に現れた

「い、嫌

—— キャアア

数秒後、事態を理解したアーチャーは悲鳴を上げながら当麻に見事なアッパーを決めた、そして消えゆく意識の中で当麻はアーチャーの素晴らしい裸体を記憶した

1月25日？ 甘い決着、それから…（後書き）

神楽坂明日菜

スキル

魔力無効果能力

ランクA

魔力における攻撃をほぼ無力化することができる体質、幻想殺しと違い触っただけで打ち消せるほど強力ではないがこちらは全身であり、治癒魔法や身体強化、転移魔法などを阻害しないので、こちらの方が汎用性が高い

感卦法

ランクA

本来交わらないはずの魔力と気を融合させ使うことにより爆発的な力とほぼ全ての術式に対して効果がある

ハマノツルギ

ランクB

ハリセン状態でもそれなりの攻撃力があり、召喚された悪魔などは一発殴るだけで強制送還できたり、バリアや魔力障壁を一撃で破壊できる、大剣状態の場合は更に物理的な攻撃力が追加さる

これらの能力を同時に使うことにより魔法使いにとって天敵とも呼べる存在となる

第5回 X F I G H T

聖杯戦争、開戦から一週間経ったが、当麻とアーチャーはあれから一度も他のマスターと出会うことがなく普通の学園生活を送っていた

否、当麻にとつては普通ではなくとてつもなく幸せな毎日が展開されていた、そうアーチャーはつい三週間前まで居候していた暴食シスターとは全く違うのである

炊事、洗濯、掃除 e t c . 家事に関わる全てのことを一手に引き受け、暴食シスターとは違いあらゆる意味で大人な対応をするアーチャーに嬉し涙が零れ落ちたのだった、
そんな幸せいっぱいの夜

同じ時刻の広い公園のベンチで優秀かつ一部に特殊な能力を持つ事で有名な進学校、光坂高校の制服を着た艶やかな髪を腰まで伸ばし黒いカチューシャをした光坂高校生徒会長、坂上智代は赤いジャケットに逆立った長い髪に無駄な肉など一切ついていない体をした男、ソル・バッドガイと何時来るか解らない敵に備えていた

「なあ、そろそろ来ないか？」

智代が公園の闇に問い掛けると、肩ぐらいの長さの金髪に人形のよ

うな可愛らしい少女と栗色の髪をした青年が闇の中から現れた。

「いつからですか？」

「心配しなくても、追尾術に関しては充分及第点だったよ、ただ相手が悪かったな」

「そうですか、なら良かったこちらもプロなので一般人に気づかれて、少し凹んでいましたから」

軽口をたたきながら、両者は闘気をぶつけあいながら、相手の実力を図ろうとしていた。

「時間もないことですし、下らない探り合いは止めてさっさとやりましょう」

「そうだな」

智代は立ち上がり、戦闘体制を整えた

「一応名乗っておこう、光坂高校生徒会長、坂上智代だ、そしてサーヴァントのバーサーカーだ」

「私の名前はイヴです、サーヴァントはライダーです。よろ」
挨拶が終わるのも待たず、バーサーカー（ソル・バッドガイ）は腰から肉厚の鉈のような剣、封炎剣をイヴに叩きつけに来たが、イヴの隣りにいたライダー（スザク、コードギアス）が、人間のMVS（高周波振動により鉄をも切り裂くナイトメアフレーム用斬撃兵装）で受け止めた

「人の話ぐらい静かに聴いたらどうだ」

「はっ！今から、戦う相手と話す暇なんかねえんだよ」

そこからはお互いに無言のまま鏖ぜりあいをした後、イヴから10数m離れた後激しい斬り合いを始めた

「すまん、私のサーヴァントは少し乱暴だな」

「構いません、私達も初めましょうか」

イヴが言い終えると二人は同時に駆け出し、そして中央付近で激突した

智代はスカートから伸びる美しく長い脚から恐ろしく早い蹴りを連続で繰り出した、たまらずイヴは後退を余儀なくされた、咄嗟に腕で防いでいたがイヴに焦りの色が浮かんだ

「どうした、もう終わりか？」

「すみません、所詮は素人の学生だと思い、侮っていました」

「油断していた、とても？」

「はい、ですが今からは掃除屋（スイーパー、犯罪者を生きたまま捕まえ懸賞金で生活する、いわゆる賞金稼ぎ）として本気でいきます」

イヴは先ほどよりも鋭くキレのある動きで智代に接近した、しかし智代はそれに素早く反応し先ほどと同じように蹴りで迎撃した

イヴは両足で踏ん張り、二つの手で智代の足を掴んだが、驚くべきことに智代の足を掴んだ手はイヴの変身能力（トランス、イヴの体内には大量のナノマシンが存在しイヴの体の分子配列を変えることにより自由自在に体を変化させる）により髪が長く伸びて持ち上がり先端がマジックハンドのように智代の右足を捕まえていた

「なっ!?!」

智代が驚きの声を上げる

「驚いている、暇はありませんよ」

イヴは智代の足を掴んでいた‘手’を振り上げ、そのまま地面に叩きつけ、そのままジャイアントスイングのように体を半回転させながら智代を投げ飛ばし、智代が初めに座っていたベンチに当たって止まった

「そのまま寝ていれば、何もしません」

イヴが後ろを向きバーサーカーとライダーの方を見ようとしていたが、智代は素早く起き上がり疾風のようにイヴに接近した

「すまん、最近デスクワークばかりで鈍っていたようだ」

智代は、今度は確実にイヴの脇腹に蹴りを命中させイヴを後退させた、だがその時響いたのは金属を殴った時に鳴るような鈍い音だった。

「足、大丈夫ですか？」

「ん、問題はないさ、ただの鉄ぐらいなら蹴り碎けたんだが……
……脇腹を金属に変えたのか……
メタモルフォーゼ肉体変化系の能力か？それとも錬金の魔法か？それとも……」

智代は不敵に笑い、攻撃の姿勢をとる

「秘密です」

イヴも髪の毛の‘手’を4つ作り戦闘体制を整える

バーサーカーは攻めきれなかつ、今、戦っているライダーとはこと格闘戦においては圧倒的に有利な立場に立っていると云ってよかった、しかし‘スピード’この一点においてならライダーが勝っていたのだ、そしてライダーの持つ宝具であろう剣の切れ味を尋常ではなく、封炎剣以外で触れれば切り裂かれるのは必定であり、それがまた攻めにくくさせ一撃必殺を信条にしているバーサーカーのイライラを

募らせていた

（ふざけやがって、こんな奴に手こずるなんざ全部あのクソアマのせいだ）

だが、どんなに怒りを溜め込んでもバーサーカーの攻撃は烈火のごとく強力であり、機械のごとき精密さを持ち合わせ、そして時に変則的な攻撃を織り交ぜていた

実際、それによりライダーは攻めることができず、攻撃を受け続けた腕が限界を迎えようとしていた

「オラア」

バーサーカーの封炎剣による攻撃により遂にライダーに致命的な隙が生まれたのだった、今までの怒りを吐き出すかのようにライダーの頭部目掛けて蹴りを放った

「終わりだ！！」

しかし、ライダーは蹴りが迫り生命の危機が迫った瞬間に己にかけられたギアス（ルルーシュの使うことができる目の前の人物に対して一度だけ発動する絶対遵守の力、スザクは‘死ぬな’というギアスがかけられており生命が危機にさらされた時に人間を超えた動きを可能とする）が発動し凄まじい集中力を発揮し、体の力を全て抜くことにより体制をあえて崩し、バーサーカーの蹴りをよけた、そして素早く体制を整えるとバーサーカーの右腕に斬りつけた

（くそ、浅かった）

バーサーカーは右腕が斬られたことによりただでさえ短い気がブチギレた

「マスター！早く許可をだしやがれ！！！」

バーサーカーの突然の大声に智代とライダーは驚き一旦退いて合流した

「ほつ、ずいぶん苦戦しているのだな、令呪が効いている証拠だな」

「やかましい。さつさと法術を使う許可だしやがれ」
「そうだな、マスターの方には手加減をしておけよ、

バーサーカー……………やれ」

智代の声を聞くとバーサーカーは暴力的な笑みを浮かべ、体から魔力が吹き出した

「とりあえずマスターの方からだ」

イヴはガードする暇もなく反射的に全身を金属に変換することには成功するが、それさえも関係なく全身に打撃を受け大木に激突した
「マスター!!」

ライダーの悲痛な叫びが響くなか、バーサーカーが迫る

「よそ見している暇はねえんだよ!」

イヴと同じように次々と打撃を繰り返していった、なんとかガードはできてはいたがガードごと激しく殴りつけられた

「ヴォルカニックヴァイパー」

激しい必殺技を叩き込まれイヴと同じ場所に吹き飛ばした

「くたばれ!ガンフレイム」

封炎剣を地面に突き刺しトドメをさそうとしたが、攻撃が発動することはなかった

「ちっ、令呪か」

バーサーカーは智代の令呪（聖杯から与えられる三つのサーヴァントに対する絶対命令権であり、聖杯戦争のマスターの証

具体的な命令であればあるほどに効果が有り、時にサーヴァントの能力をすら超えられる）によって許可なく法術を使うことを禁じられ、さらに殺人を禁じられていたのだ

つまりさっきのは、イヴに対する殺人に該当したため、ガンフレイムがでなかったのだ

イヴは痛む体を持ち上げ、ライダーに命令をだした

「ライダー……………宝具を使い……………なさい」そして、ライダーの目に光が灯り目に決意が宿った

「イエス・マイロード」

そして、黒の騎士団が最も恐れた白兜が降臨した

第5回 X FIGHT（後書き）

クラウド・ストライフ

宝具

アルテマウェポン

言わずと知れたFF7の主人公である人物、大剣を巧みに操って戦う6本の剣を合体させることにより強力な攻撃を繰り出す

第6話 再誕の白き騎士

夜の闇の中にはえる金色に縁取られた白いボディ、渾名の由来となつた頭部に緑色のツインアイに光が宿ると全長が6 m以上もあるとは思えないほど、流麗な動きで背中に装備されたMVSを抜く

「はっ、大層なブリキ人形じゃねえか、そのブリキ人形ごと消し炭にしてやるぜ」

バーサーカーはランスロットを見ても全く臆することなく言い放つと、攻撃を始めた

「ガンフレイム」

地面に突き刺した封炎剣から、火柱が上がりランスロットに迫るが脚部に付いたランドスピナーが回転を始めガンフレイムを難なく避けると、そのままMVSをバーサーカーに叩きつけた、バーサーカーは封炎剣で受けることには成功するが圧倒的な体重と出力に負け立っていた地面が割れ片膝をつく

「ざっけてんじゃねえ」

その体制からも立ち上がり、封炎剣でMVSを押し返す

「ランスロットとパワーが互角……………なんてパワーだ」

ランスロットの人工筋肉が軋みさらに力を込めるがバーサーカーも負けじと力をこめつづけ鏝ぜりあいが続いた

そしてバーサーカーの地面が陥没し体制が崩れた瞬間に、ランスロットの左足がバーサーカーを弾き飛ばした。

しかし、そのまま受け身をとり、高速で接近を始めるバーサーカー（リーチは向こうの方が圧倒的だ、だがなデカイ図体してんだ、懐に入っちゃえばこっちのもんだぜ）

（リーチは圧倒的にこっちのほうが長いんだ、相手をこちらの間合いで戦えば……………勝てる！）

ランスロットの懐に入られないようにランドスピナーを使い、MVSで牽制を繰り返しバーサーカーを寄せ付けずにいた

バーサーカーは事態を動かすべく、振り下ろされたMVSに真っすぐ飛び込み、紙一重でMVSを避けた後にランスロットの右腕を掴むと柔道の一本背負いのようにランスロットを投げ飛ばした、背中から打ちつけられたランスロットは受け身を取り、素早く体制を整えようとするがそこにバーサーカーが拳に炎を纏い襲いかかる

「終わりだ！」

ランスロットの右腕のブレイズルミナス（所謂バリアシールド）が展開されバーサーカーの攻撃を受け止めた

「バリアまであのかよ、たつくだんだけSFなんだか」

ライダーは500mほどの距離をとり機体を屈めクラウチングスタートのような体制をとらせた

「抜き打ちか、来な、一撃で沈めてやる」

それを見たバーサーカーもまた拳に魔力を溜め込む

ランドスピナーを一旦上げ、回転数が上がりきった時に下ろし、高速で一気に500mの距離を0にする

（勝負は一瞬、ようはさつきと同じ剣をよけて……………今度こそ沈めてやるぜ）

（まともにやったら、返り討ちにされる、なら）

ライダーはランスロットの間合いに入った瞬間に飛び上がった、そして空中で体制を入れ替え、右手に持ったMVSを投げつけた。

予想外の行動の連続に後手に回らざるをえなかったバーサーカー。

続いて左側に装備されたMVSを更に投げつけ、完全にバーサーカーに隙を作り出す、そして空中からの飛び蹴りを見事にバーサーカーに決めることに成功する。

地面に刺さったMVSでトドメをさそうとするが、ランスロットのバーサーカーギリギリで右足を持ち上げ脱出に成功する、素早くランスロットの二本MVSによる追撃が行われるが、ギリギリのタイミングでかわすバーサーカー。

「ここで一気にたたみかける」

激しい連撃の最中にありながらバーサーカーは冷静に両手に魔力を

纏い一度だけMVSを受け流す、そしてランスロットの足に向かって攻撃を仕掛けるが飛び上がってそれを回避する

「待ってたぜ、空中ならよけらんねーだろ

ヴォルカニックヴァイパー」

タイミングは完璧だった、当たれば一撃でブレイズルミナスでも貫通出来る一撃がランスロットに迫った

しかし、今回ライダーも方が上手であった、素早くスラッシュハーケンを近くの建物に打ち込み、機体を持ち上げ、バーサーカーの攻撃を回避したのであった

「待っていたのは僕の方だ」

このためにライダーはワザと高くジャンプし隙を作り出したのだ
持っていたMVSを捨て、腰にマウントされたヴァリスを打ち込んだ。

およそ人間に使用する必要のない兵器によってバーサーカーは地面に激しく叩きつけられた、そして更に二発ばかり打ち込みトドメとした

土煙が広がり爆煙が公園包みこんだ、ランスロットはヴァリスをしまい、落としたMVSを拾い上げたあたりでそれは起こった

「ドラゴンインストール」

爆煙が一瞬にして晴れ、バーサーカーから火柱が上がり爆発的な魔力が放出され、傷だらけのバーサーカーの体が見るうちに再生を始めた

イヴもライダーさえもあまりの魔力に呆然としてしまった

‘勝てない’そんな思いが頭がよぎり明らかに違うレベルの差を見せつけられたのだ

（さっきの戦いでさえ本気でなかったのか！？）

しかし、彼等は力の差があるからと言って退くような素人ではなく、どのような事態になろうとも戦い続ける戦士であった

（力の差がある程度で挫けるほど私は弱くない）

イヴとライダーは新たな決意と共にバーサーカーに立ち上がった
「デメエらまとめて灰に「イナ・マキツ——ク」」

何もなかった空中から執事服を着た青髪の少年が現れ、バーサーカーを蹴り飛ばしたのであった

誰もそのまま動くことはできなかった、先ほどの決意もどこかに消え去り呆然としてしまいうイヴとライダー

起き上がり戦闘体制を整えるバーサーカー、新たな敵に警戒するべく今まで冷静に見ていた智代も駆け寄った

「平気か？バーサーカー」

「問題ねえ」

（ありえねー、ドラゴンインストールが強制解除させられた）

今まで黙っていた執事服の少年が口を開いた

「問題ねえですか、かつてタマ（三千院家で飼われている体重300kgのホワイトタイガー？）でさえ仕留めた必殺技なんですが」

先ほどの少年と同じように何もないとところから、マントを羽織った
ピンクブロンドの髪の少女が現れ、瞬間

「青犬、あんた私が解呪ディスベルの魔法をかけてあげたのになんであいつ生きてんのよ」

執事服の少年の襟の掴み怒声をあげた

「ええ！？僕のせいじゃありませんよ、ていゆうか僕、人間ですよ
サーヴァント相手に無理に決まってるじゃないですか」

「言い訳無用、後で折檻してあげるから覚悟なさい」

「そ、そんな」

目の前で、繰り広げられるやり取りにしばし見とれていた4人だが、
イヴが割って入る事に成功した

「すみません、見たところキャスターのマスターのようですが間違
いありませんか？」

話しかけられ、ピンクブロンドの少女との会話を中断しイヴに自己
紹介を始める

「ええ、僕は白皇学園2年7組綾崎ハヤテですよろしく願いしま
す。」

「こいつのサーヴァントでクラスはキャスターよ」

イヴはハヤテの営業スマイルに思わず見とれ頬を赤くしてしまっ
ていた

「えっと〜大丈夫ですか？」

「は、はい、ななな何ですか！？」

呆然としていたところをハヤテに覗きこまれ、慌て返事すること
しかできないイヴ

（おかしい、私にはスヴェンがいるにも関わらず、いえこれではま
るで……………）

「あゝすまんが逃げさせてもらっぞ」

智代の言葉にイヴも正気に戻り智代を睨みつけた

「逃がしませんよ、そのためにわざわざライダーと組んで潰しに来
たんですから」

「そうか、なるほど狙いは私達ということか」

「さつきから見ていた、けどあんたのバーサーカーは規格外なのよ、先に潰しておかないとね」

キヤスター（ルイズ）は杖を構え、ハヤテも戦闘体制を整える

「そうか、貴様等が手を組むというのなら尚更逃げさせてもらうぞ」
そういうと智代はポケットから小さなカプセルを取り出して投げつけた

すると、暴力的な光と音そして、煙幕がまき散らされた

4人共突然のことで動けずにいたことで、煙幕が消えた頃には、智代とバーサーカーの姿はなかった

「麻帆良工科大特製のスタングレネードと煙幕と催涙スプレーの合成弾ですかままとやられましたね」

ハヤテはイヴの方に向き直って、柔らかに微笑んだ

「じゃあ、僕もお暇させていただきました」

「あ、はい、あのありがとうございます」

ハヤテは一礼すると、キヤスターと共に公園から去っていった
そして、公園にはいまだに心臓を高鳴らせたイヴとランスロットに乗ったライダーが残され、ポツリと呟いた

「名前、言い忘れた」

第6話 再誕の白き騎士（後書き）

坂上智代

CLANNADのヒロインの一人であり、作中でも無類の強さを見せつけたが、本来なら、このような場には似つかわしくない人物だが作者の趣味により最強サーヴァント、バーサーカーのマスターとして登場した

能力的にはバイクの蹴りだけで粉碎するなど、卓越した体術を使うインファighter

第七話 登場！黒紅の二人組（前書き）

・hack・G・U・にハマってしまい更新が遅れてしまいました。
作者のモチベーション維持のため感想などをいただけると幸いです

第七話 登場！黒紅の二人組

「なーんか世界とか救いてえ——……」

バーサーカーとライダーの激闘の翌日の昼間、ベンチに座っている少女が独り言を呟いていた

いつもならここでタバコを吸うのであるが、今日は‘彼’に会いに行くため我慢

サラサラの短い黒髪、乳性石鹸のような白い肌の少女^{スズキ}涼月・ディー
トリツヒ・シユルツ因みに14才

彼女は一人、訓練をサボって‘彼’に会いに行くため、様々な障害を突破したのであった、内心では一応これは仕事一環であって別に‘彼’に会いたいわけではないと前置きを置いて置くのを忘れない
「御館様！ラー油サイダー、買って参りました！！」

涼月はとりあえず、うっさいバカの顔を殴りぶつ飛ばして黙らせる、決してタバコが吸えないから八つ当たりしたのではない、特甲を装備していないとはいえ1.5トンの威力を持つ右手で殴られても缶ジュースを落とさないバカの忠誠心にいつも驚かされる

「御館様、何をなさるのですか！？この真田弦二郎幸村に何か落度でもあったのでしょうか」

「やかましいわ、そのやかましい口を閉じろつってんだよ、ついでに真名を大声で軽々しく叫ぶんじゃねえ」

そう言いながら、ランサー（真田幸村）からラー油サイダーを受け取り一気に飲み干し、缶を握り潰す涼月

「御館様、今日は仕事をお休みになって何をなさるのでしょうか？」
ランサーは膝をつき、涼月に頭を下げた

「あゝそれな、昨日アホみたいな魔力が感知されてな、どうもそれがサーヴァントの魔力らしくてなあたし等だけじゃ手に負えそうにないから、他のマスターと手を組みに行こうと思ってな」

ランサーは膝ついた体制のまま、納得したように手をうつた

「なるほど、脅威に対して和睦を結びその者達と脅威に立ち向かうのでございますね。」

それはわかりましたが、他のマスターの居場所などわかるのでござるか？」

もつともな質問であつたが涼月には一人あてがあつた

「あゝまあ、確かめたわけじゃないんだけどな、多分マスターの信用できる奴を一人知ってる、つかマスターじゃなくても勝手に巻き込まれてる」

頬を赤く染めながら、あやふやなに答える涼月

「では、そこに行くのでござるか？」

「ああ、ランサー、お前は霊体化して後ろからついてこい」

「御意」

ランサーが霊体化し消えると涼月は少し早歩きで歩き始めた

「彼」の学校につきはしたのだが、少し早かつたのか、下校時間ではないようだった

あらかじめ用意しておいた黒い目だし帽をかぶり、学園都市においてそこそ有名な自分の顔を隠し待っていると、時間が来たのか下校する生徒がちらほら見え始めた、

いい加減タバコを我慢するのが馬鹿らしくなりタバコを一本口にくわえてA・S・A・P（アズ・スーン・アズ・ポシブル、可能な限りさつさとやれ）の刻印付きのジッポライターで火をつける。

解放感溢れる吸いっぷりで至福の時間を味わう
(なんて切り出したらいいかな、一応今のところは私等も敵なんだからブツブツ……………)

30分後(やっぱり最初は世間話から入っても……………)

一時間後(やけに遅いな、でもまあ居残りで勉強でもしてんだろ)

二時間後 涼月はイライラしながらも校門で待ち続けていた、そして怒りを抑えるべくタバコを取り出すと、足下から小さな少女が現れタバコを引ったくられてしまった

「タバコは二十歳を過ぎるまで吸ってはいけませんですよ」

視線を下にずらすと桃色の髪の十歳前後の少女が両手を振り上げて怒っていた

涼月はタバコを取り返すべく説得を始めた

「お嬢ちゃん、それは外国製の無害なタバコだから、早くお姉さん

に返しな」

「嘘ついちゃダメなのですよードイツ語でしつかりと有害物質の名前が書いてあるじゃないですか！」

小さいにも関わらずドイツ語を読める少女に少々驚きながら、涼月は話を続けた

「よく読めたな〜よし大人しく返そうな」

「返しませんよ、大体さつきから子供扱いしないで下さい小萌先生は酒もタバコも嗜む大人の女性です」

涼月はその言葉に驚愕し、かつて情報通の同僚陽炎から聞いた噂話を思い出した。

曰わく、学園都市には、有名なスプリングフィールド先生の他にも子供先生が存在し尚且つ、その子供先生は成長しない

その話を聞いた時には、ありえねーと言ったものだが本物を見たらあながち嘘ではないようだった

（魔法でも科学でも超能力でも不可能と呼ばれた不老の力を手に入れている存在がいるなんぞ、この都市もいい加減いかれてんな）

涼月が感心しながら、眺めていると目の前で小萌先生はタバコがいかにも未成年の体に悪影響を及ぼすかを延々と語り続けていた

（いや、どう考えても私が吸うよりあんたが吸った方が悪影響でるだろ）

反省のない涼月の態度に対して、結局小萌先生のお説教は一時間にも渡り、お説教には慣れている涼月も辟易せざるを得なかったかし、その間にも、彼は現れず、去り際に小萌先生に問い掛けると、

裏庭で罰当番をしているそうなので涼月は裏庭に行ってみることもあった

すると、そこには探していた‘彼’、上条当麻が着衣の乱れた二十歳前後の女性に跨り顔を数cmの距離にありさらに右手はその女性の胸の上に置かれていた、当麻は突然現れた涼月に驚き呆然としながら、普通を装った

「ヤア、スズキサン、オヒサシブリ」

「ああ、そうだなお前って奴は何時も何時も」

涼月は3時間待たされた怒りを爆発させるように未だにアーチャーに跨ったままの当麻に襲いかかるうとして、ランサーに後ろから羽交いじめにされていた

「離せ、ランサー今日という今日はこいつをぶつ殺す」

ようやく、再起動を果たした当麻はアーチャーから飛び退た

「あゝえつとほら、さっきのは事故みたいなもんでな、あんまり気にすんな」

当麻に見つめられ怒りとは別の感情で顔が赤くなった涼月も少し正気を取り戻し、今日ここに来た理由を当麻に説明した

「MPB（原作ではミリオポリス憲兵大隊のことだが、この作中では学園都市の特殊鎮圧部隊）が誇る対甲鉄拳のお前が手におえないレベルだよ」

当麻はげんなりしながらため息をついた

「てゆうか、対甲鉄拳って女の子にどんな二つ名つけてるんですか？」
アーチャーが聞き返すと当麻は涼月の伝説を語り始めた

「去年の今頃に全自動の最新鋭装甲車が暴走した事件があつてな、偶然居合わせた涼月がワンパンで横転させちまったんだよ、それからは対甲鉄拳の涼月つつたら有名人だ」

アーチャーは呆れ顔でため息をついた

「ふう〜わかった、この街に住む人に一般人はいないんだね」

当麻と涼月はそんなことはないと言つてツツコミをいれようとしたが、自分の周りにいる人々を思い出し止めた

「と、とにかく共同戦線はるってことでいいんだよな」

涼月は多少無理やりに話しをまとめようとした

「わかった、じゃあちゃんと戦闘になつたら呼べよ」

そう言いながら、帰ろうとする当麻とアーチャーに涼月は上擦った声をかけた

「ま、待てよ、ほら、その、携帯の番号教えないと連絡とれないだろ」

「ん、まあそうだな」

そう、言う二人は携帯を取り出して番号を交換した

そして、しばらくした後、別れ涼月は歩き出した、今まで黙って後ろについていたランサーが涼月に声をかけた

「御館様、想い人からケイタイバンゴウを知ることができてようございしましたな」

涼月は顔を熟したトマトのように真っ赤に染めた

「ババババカ、なんで私があんな奴のことが好きだったりすんだよ、ああああありえねえよ」

早口でバレバレの嘘をつく涼月

「隠さなくても大丈夫でございます、このランサー全力でマスターの恋路を補佐する所存」

そして、照れを隠すための鉄拳が涼月によってランサーに打ち込まれる

「違つてんだろ、バカランサー」

顔を殴られ、膝をつきながら再び涼月に向かっていった

「ですが、マスターのためには」

「黙ってる、ランサー」

再び吹き飛ばされるランサーしかし今度は膝をつかずにたえた

「マスター」

「こっんの、ランサー」

再度殴られるランサー、しかしたえる

「マスター」

「ランサー」

「マスター」

「ランサー」

「マスター」

「ランサー」

「マスター」

「ランサー」

.....

殴られそして起き上がりそして殴られる涼月とランサーこの不毛な戦いはしばらく続けられた

第七話 登場！黒紅の二人組（後書き）

ソル・バッドガイ

宝具

封炎剣

自身が生態兵器であるギアなので尋常ではない戦闘力を持ち火の法術を使った一撃必殺を旨とした戦いをする、100年以上戦い続けていたキャリアがありあらゆる面で隙がない

第？話 YOUNG PRESIDENT AND OLD GIRL(前書き)

後書きのキャラクター説明は面倒なので後でまとめて詳しく書くことにしました。

第？話 YOUNG PRESIDENT AND OLD GIRL

当麻、アーチャー組と涼月、ランサー組が同盟を結んだのと同じ日の夜中

海賊のような眼帯が目立つ以外は普通の高校生に見える、魔術結社アストラルの社長であり布留部高校2年生の伊庭いつきは自らのサーヴァントであるアサシンに振り回されていた

「行くぞ、いつき！今宵こそ他のサーヴァントを正々堂々正面から叩き潰してやるのだ」

などと、およそアサシンというクラスのサーヴァントが言うはずのないセリフを叫びながら夜の学園都市でいつきを引きずり回していた、その理由は本人曰わく「最強の魔導書の我が、何故アサシン（アル・アジフ）などという卑しい身分に甘んじねばならぬ」と怒り狂い「こうなれば、正面から敵を捻り潰しアサシンなどという汚名を返上してくれるわ」つまりアサシンというクラスが気に入らず、荒れているのだ

「ね、ねえアサシン今日はもう帰らない？」

アサシンは、ギロリと振り返りながらいつきを睨みつけてた

「マスター、^{なれ}汝今なんと言った」

「え、いや、あのそのえ……と、ナンデモアリマセン」

アサシンに睨みつけられたいつきはしどろもどろになり、そしてやはりアサシンの目に逆らえず引き下がるのであった、そしてその時いつきの眼帯に封印された妖精眼が僅かな痛みと共に他のサーヴァントの位置を感知したのであった

「見つけたよアサシン」

「でかしたぞいつき！して位置は？」

「ここから、北に……いや北東に4km」

「了解じゃ行くぞ」

学園都市の夜の闇の中二人はそこに向かって駆け出した

二人はが着いたのは学園都市にある麻帆良学園のシンボルの神木・播桃、通称世界樹が目の前にそびえ立つ世界樹前広場であった

あちらもこちらの接近に気づいていたらしくハマノツルギ（大剣状態）とすでに3本合体させた大剣を構えた明日菜とセイバーがいた
「一応きいておくけど、聖杯戦争の参加者で間違いないのよね」

明日菜が声を張り上げていつき達に問い掛けると先ほどまでの怯えた様子を見せずにいつきはしゃべり始めた

「間違いないよ、布留部高校2年の伊庭いつき、アサシンのマスターだ」

「そう、私は麻帆良学園女子中等部の神楽坂明日菜、セイバーのマスターよ」

4人は睨み合うとアサシンの声が響いた

「行くぞ、いつきマギウス・スタイルだ！」

「うん」

そして、二人を青い魔法陣を囲い込んだ、数秒後激しく魔力が吹き荒れると共に先ほどまで着ていた布留部高校の制服ではなく黒いボディアーマーを着込み真っ白になった髪をたなびかせたいつきと何故か10数cmほどの大きさになったアサシンが現れた

「アサシン、バルザイの円月刀を」

「わかった、受け取れいつき」アサシンがそういうと、いつきの右手に1mほどの黒い異形の大剣が握られた、いつきはそれを逆手に持ち再度明日菜とセイバーに向き直った

静かな睨み合いがしばらく続いた

瞬間、明日菜とセイバーが爆発的な速度をもって同時にいつきに襲いかかった、いつきは焦ることなくまず明日菜のハマノツルギを受け流し、バルザイの円月刀をもってセイバーの斬撃をさばいた

いつきの妖精眼は封印されながらも明日菜に違和感を感じとっていた、そしてそれがなんであるか分からない内は明日菜の攻撃をまともに受けるのは危険と判断し、受け流していた

そして、魔力のカタマリであるサーヴァント、セイバーの動きは封印を施した状態であってもほぼ完璧に予測出来ており、攻撃をさばくことに成功していた

しかし、いつきは明日菜の攻撃受け流し、セイバーの攻撃をさばくだけで精一杯でありいくらマギウス・スタイルであったとしても人間のいつきには限界があつた

「マギウスウイング」

いつきは攻撃が止んだ一瞬の隙をつき、腰の辺りから黒い翼をだし高速で空中に逃れようとしたが、逃げようとして体制の崩れたいつきに対してセイバーは追撃をかけた

「画竜点睛」

しかしいつきはバルザイの円月刀に魔力を通し灼熱の刃としセイバーの追撃を弾いた

「ニトクリスの鏡」空中で体制の整えたいつきはニトクリスの鏡を発動させ、広場を埋め尽くすほどの幻像を作り出した。

「こんなもの」

明日菜がハマノツルギをセイバーが大剣を振り回すと鏡が割れるような音と共に幻像は簡単に砕け散った

「……………脆いな」

セイバーがそう呟いた瞬間に幻像に隠れて本物のいつきが切りかかるが、ダメージを与えられなかった

「一対一なら勝てるっても」

セイバーは臆することなくいつきと対峙し斬り合いに応じた

いつきは明日菜とセイバーを分断しさえすればマギウス・スタイルの超人的な力で勝つことが出来るとふんでいたが

ただの斬り合いにおいてセイバーにはたとえ一対一になろうともいつきは勝つことが出来なかった、大剣を使いながらも高速で叩きつける斬撃は先ほどよりも鋭く重い攻撃であり、いつきは予測出来るにもかかわらず一撃を受ける度に体制崩されていた

「いつき！接近戦ではぶが悪いクトウグアとイタクアを使いえ」

「わかった、お願いアサシン」

バルザイの円月刀が消えると、いつきの両手には自動拳銃イタクアとリボル

クトウグア

バー式拳銃が一丁ずつ握られ距離をとるため近距離からクトウグア

を連射した、風の属性を持つクトウグアの弾丸は魔力による精密誘導により一つの銃口から出たとは思えぬほどの様々な角度からセイバーに襲いかかるが、セイバーは新たにもう一本大剣を抜き放ち両手に大剣を構えるとクトウグアの弾丸を全てを弾いたのであった、いつきはその隙に距離をとり上空から、今度はイタクアもセイバーに向け全ての弾丸を乱射した、イタクアは爆炎を纏う強大な威力の弾丸を吐き出しセイバーのいた地点を中心に徹底的な破壊をもたらした。

しかし、爆煙が晴れた後には健全な姿のセイバーとそれを守るような形で立っている明日菜の姿があった

「イタクアの攻撃を防ぎきるとはあの小娘一体何者だ」

「分からない、とりあえずあの娘に攻撃はきかないみたいだね」

上空から、二人を見るとどうやら飛行能力はないらしく黙っていきの出方をうかがっていた

「アサシン、妖精眼を使うよ、サポートお願い」

いつきが大きくはないがとても強い台詞を言っているとアサシンもそれに呼応して大きく頷いた

「任せておくがiiiiいつき、汝の体に一欠片の汚染もさせはせん」

「ありがとう、任せた」

いつきは自分の右目を覆う海賊がつけるような眼帯を外し、魔物の全てを視る伝説の魔眼、妖精眼を解放した

9 時間目 Brave Heart

明日菜とセイバーは聖杯戦争が開戦した直後に油断があつたとはいえ当麻とアーチャーに敗北を喫してしまった。

本来ならばそこで終わっていたのだろうが、相手の情けにより生き延びたのであつた、明日菜は何の準備もせずに戦いを挑んだ事を後悔し、それからセイバーとの連携を合わせるために毎日、世界樹前広場で訓練をしていたのだ

その矢先に受けたのは、伊庭いつきと名乗る眼帯を付けている以外はただの気の弱そうな少年と、幼い少女の姿をしたアサシンだった、二人共とても戦闘をするようには見えなかったが、前回の油断による敗北の記憶がよぎり明日菜は再び気を引き締め感卦法を発動させた（今度はセイバーの足を引っ張ったりしない）

そして戦い始めるとやはりそれは正しかったのだ凄まじい魔力から繰り出される様々な攻撃はどれもがかなりの威力を持っており、感卦の気を纏っていないければまずかったかもしれない、そしていつきが眼帯を外した直後状況は一変する

「ハア、ハアくっ攻撃が……………当たらない」

「……………化け物か？」

眼帯を外したいつきに対して明日菜とセイバーは一撃も当てる事が

出来なかった。

一週間で作られた付け焼き刃とはいえ二人のコンビネーションはそう悪い物ではなく実際に眼帯を外すまでは有利に戦闘を進めていたのだ、

しかし二人が攻撃を仕掛ければ仕掛けるほどにいつきは明日菜らの動きを利用したカウンターを繰り出し追いつめて見せても絶妙なタイミングと適切な行動に全ての攻撃を回避していた

二人は致命傷こそ受けていなかったものの一撃もいれる事の出来ない今の状況に焦りを感じていた

(……恐らくはあの眼による力、こちらの心を読んでいるのか、未来予知かそれとも……だがそんな力を使い続けられいずれ……長期戦に持ち込めば)

「いつきの妖精眼に時間的な制限はないぞ」

セイバーはやはり心を読まれたのかと驚くが直ぐに小さくなったアサシンを睨みつけてた

「そんな顔をするでない、汝の表情は乏しいようでなかなかどうして熱い感情を持っておるのじゃな」

「……黙れ」

顔色を読まれセイバーの心が更に動揺する、セイバーは一見するとクールな戦士に見えるが、その本質は内向的で引っ込み思案なナイーブな青年でありこういった精神的に強いタイプではないのである「フフフ、その調子ではマスターを守ることなぞかなわんぞ」

「……………」

守れない、セイバーの心の奥にあるかつて守れなかった少女のことが去来する

(……………エアリス)

セイバーが心の中にエアリスが浮かんだ直後、彼の隣で地面を砕く大きな音が鳴り響く

「いちいち、ウツサイのよチビ女！私はね守らるためにここに立ってるんじゃないのよ！」

明日菜だった地面のレンガを叩き割り腕を中ほどまでめり込ませた状態で啖呵きる

「だいたいセイバー、あんたもいちいち動揺してんじゃないわよ、こつちの攻撃が当たらないなら、避けられない攻撃をすればいいだけじゃない」

腕を引き抜き、セイバーに向き直り叫ぶ明日菜

暴論まさに明日菜の言っていることはその一言に尽きたが彼女となら出来るセイバーにはそんな気持ちが芽生えた

「座ってないで、サツサとあいつを倒すわよ」

そう言って微笑んだ明日菜の笑顔にセイバーはエアリスの姿を重ねた、顔も歳も何もかもが違う14才の自分のマスターにどんな絶望的な状況でも天真爛漫に笑い続けたエアリスを重ねたが、直ぐに消え失せ全く似ていないその姿に自嘲気味に小さく笑った

「なに笑ってんのよ」

「いや……何でもない、さあ始めようか避けられない攻撃を」

セイバーは全ての大剣を合体させ正眼に構えた、そしてセイバーの体からは力強いライトグリーンのオーラが立ち上り、眼にはかつてセフィロスを倒した時のような強い光が宿った

「どうやら、火がついたようじゃな、油断するでないぞいつき」

「ああ、アサシン全力で叩き潰すぞ」

いつきはバルザイの円月刀を構えた

明日菜とセイバーは同時に駆け出すと合図を出さずに同時に二手に分かれると左右からいつきを挟み込んだ、先にセイバーは大剣を地面と平行に構え鋭い突きを放つ、しかしいつきは必要最低限の動きでかわし少しタイミングをずらし真上から襲いかかる明日菜の攻撃を見もせずにバックステップかわした

「さっきと何も変わってないな」

しかし明日菜の隙を補う形でセイバーの大剣が突き出される、そして体制を立て直した明日菜が再び攻撃を開始する、絶妙なタイミングで繰り出される連撃に防戦一方になるいつき

「くっ」

明日菜とセイバーが取った避けられない攻撃とは、反撃の隙を与えない絶え間ない連続攻撃であった、片方の隙を補いカウンターをされない形で行われる連続攻撃、口で言うのは簡単ではあるがいつきは二人動きの三手、四手先を読んで行動しておりほんの少しの隙、攻撃が少しでも途切れればバルザイの円月刀の餌食となってしまうのだ

「ハア！」

セイバーの気合いの籠もった声と共に逆袈裟からいつきのバルザイの円月刀をはじめ僅かな隙を作り出す

「しまっ！」

そして、明日菜はハマノツルギをフルスイングしいつきの腹にハマノツルギの峰をめり込ませ吹き飛ばした、いつきはそのまま広場の階段に叩きつけられ口から僅かに血を吐いた

「かはっ」

「いつきー！」

肩で息をしながら、いつきを見守る明日菜とセイバー

「よしっ、作戦成功！やったわねセイバー」

「……作戦？」実は打ち合わせもなく、たまたま成功した攻撃だったのだが

いつきは右肋骨を怪我したようで右手でそこを押さえ、左手で口元を拭い立ち上がった

「アサシン」

「まさか我にだけ逃げるなどと言うまいな」

いつきは驚きアサシンに向き直った

「やはりか、ふん直ぐに自分を犠牲にしようとするのは汝の悪い癖じゃ………しかし我は嫌いではないぞ」

「……アサシン」

アサシンはいつきに顔を見せないようにしながら呟いた

「そうだな、最強の魔導書が味方なんだアイツ等ぐらい倒すとするか」

「ああ、いつきあの程度の相手にこれ以上手間取るでないぞ」

いつきはイタクアとクトウグアを構え、明日菜とセイバーに向き直った、

再び二人が激突しようとした時、上空のヘリコプターから紅と黒のシルエットが広場に襲来した

「楽しそうなことでんじゃねえか、私も混ぜやがれ」

「戦場への乱入、政宗殿が好きなのもわかるでござる」

黒い特甲を装備した涼月が不敵に笑い、ランサーは戦場の空気に血をたぎらせる

「行くぜランサー」

「わかりました。御館様」

二人は立ち上り、ポーズを決め叫ぶ

「最強黒紅！見参！」

第拾話 恐怖！白き魔王の降臨

特甲児童

《特殊転送式強襲機甲義肢》通称、特甲を学園都市から支給され、治安維持に当たる6人の少女達

ケルベルスとフォイエル・スプライトの二つの三人小隊に別れ、学園都市の平和の象徴として露出の多いド派手な衣装で華やかなパレードなどに参加する一方で、その圧倒的な戦力で外敵を制圧確保することで学園都市を守り続ける暗部でもある存在なのだ

そして、涼月・デイドリツヒ・シュルツはケルベルス小隊の小隊長であり、対甲鉄拳と呼ばれ6人の特甲児童の中で単体での最強の戦力を有しているのである

世界樹前広場は涼月とランサーの乱入により乱戦の様相を呈していた。いつきの魔弾が夜の闇を裂き広場のタイルを焼き払い、明日菜とセイバーの大剣は広場に深々と傷跡を残し、涼月の拳が広場に小さなクレーターを作り出し、ランサーの持つ二本の十手槍が穿つ。そこは数十分前までのどかな広場ではなく、噴水は粉碎され地面のタイルひび割れ焼けた後の黒い焦げが残り、元々の雰囲気を残してはいなかった。

乱戦はますます激しさを増し続けていた

「おい、ランサー私があのお白髪ヤローをやる、お前はあっちのヒヨ

「頭を潰せ」

「御意」

涼月がランサーに指示を出すとランサーは威勢の良い返事と共に駆け出しセイバーに飛びかかった

「そなたも名のある、武人であるとお見受けする、このランサーと正々堂々と一騎打ちをされたし」

「……………」

ランサーが叫び声を上げセイバーと槍と大剣をぶつけ合わせ、激闘を繰り広げる中

明日菜といつきそして涼月は等間隔を取って向かい合い三角形を作り出した。

いつきだけはサーヴァントと一緒にであり有利に思えるが明日菜の魔力無効化能力は魔力を使う者にとって天敵であり、涼月は特甲児童なので妖精眼によるアドバンテージが存在しないのであった

誰にとっても二人を同時に敵にまわしたくはなく結局三人共動けず事態は硬直し長期戦の様相を呈し始めたが、明日菜、涼月そしてアサシンにそんな理屈は長い時間通用せず明日菜と涼月が突っ込み、アサシンにせかされる形で少し遅れていつきがバルザイの円月刀に切り替えて突進した

「くたばれ、白髪ヤロー」

涼月がボディブローをいつきに放つが、バルザイの円月刀で受け止められ止まっているところに明日菜がハマノツルギで切りかかって来るが、二人はバックステップで回避すると、距離をとることなく戦いを続行した

「ただの殴り合いなら、私が負けるわけねーんだよ」

涼月はフェイントを入れながら、隙を作り出しいつきの腹に拳を突

き立てる

殴り飛ばされたいつきを追って真っ直ぐに明日菜が切りかかった
いつきはバルザイの円月刀が真つ二つになるが一瞬時間を稼ぐ事には成功し明日菜の斬撃を避け、痛む体を無理やり動かし崩拳（中国拳法の正拳突き）を打ち込む、いつきの妖精眼によって気と魔力の融合における僅かな綻び見極め、崩拳により分離させ強制解除する、いつきの全身全霊を込めた一撃であった

感卦法を解除され、一撃を打ち込まれた明日菜は弾き飛ばされ、片膝を突きその場にうずくまる

涼月は片膝について隙だらけの明日菜に見向きもせずいつきに向かって駆け出した

「いいなあ、お前！さっきのは中国拳法か？宮沢和人や駒場利徳が死んじまって以来、拳で人をぶっ飛ばす奴なんざ久しぶりだ」

いつきはふらつきながらもイタクアとクトウグアを構える

「お前相手には接近戦なんかしないぞ」

いつきは喋りながらもクトウグアを連射し涼月を寄せ付けない

「ちい、面倒クセエ」

「卑怯だとも？」

いつきの質問に鼻で笑いながら涼月は答えた

「はっ、戦闘に卑怯も糞もねえよ、誰が強いかそれだけだ」

言い終わった涼月はクトウグアの弾丸をかいくぐりいつきの懐に入り込む

「くたばれ、白髪ヤロー」

涼月の拳がいつきの顔面に迫る前に涼月の体に赤い蜘蛛の糸のような物が絡みつき、動きを封じ込めた

「アトラック・ナチャ」

「なっ」

いつきは、涼月の両足の膝に向かってクトウグアを3発ずつ打ち込み、動きを封じ込める、特甲であるが故に痛みはないが、膝を完全に碎かれ這いつくばる涼月から距離をとり、今まで魔力を溜め込ん

でおいたイタクアが神威を顕現させた神獣弾を放った、鬼械神デウス・マキナですら葬り去る灼熱の一撃が涼月に迫る中涼月はとある少年の背中を見た

ランサーとセイバーの戦いは熾烈を極めた、二人は接近戦を極めたサーヴァントであり力量の差はほとんどなかったのである、ランサーが二本の槍で力強く素早い突きを連続で繰り出す、セイバーは大剣を操っているとは思えないほど巧みに槍を防ぎ、時にランサーよりも重みのある斬撃を繰り出しランサーの動きを封じ込める。

「某の名は武田軍の真田弦二郎幸村なり、そなたの真名は？」

ランサーはセイバーの一撃を二本の槍を交差させ防ぎ、鏖競り合いにもちこみ名乗りを上げた

「……クラウド・ストライフ……… 自称元ソルジャーだ」

セイバーも同じように名を名乗ると大剣に力を込めランサーを押し返す、

いつきの攻撃でうずくまっていた明日菜は再び涼月といつきの方へは行かず、セイバーの加勢に向かった、ランサーの右側から切りかかっていくが、ランサーは易々と槍で受け止めた

否、受け止めることは出来なかった、ランサーの槍はハマノツルギにより簡単に切り裂かれ槍としての機能を失った

ここぞとばかりに明日菜とセイバーはランサーに襲いかかった、先ほどまでとは違い一本しかない槍、二対一の状況ではランサーもどつすることもできず、瞬間に追いつめられていった

「くっ」

「……トドメだ」

上空に飛び上がったセイバーは切っ先をランサーに向け急降下を始めた

（お許し下され、御館様この真田幸村の力及ばず）

ランサーも諦めかけたその時、セイバーを桜色の光の奔流が吹き飛ばした。

涼月が初めてその背中を見たのは、今と同じような絶体絶命の時だった。

敵から集中攻撃を受けた涼月は足の接合部にダメージを受け這いつくばることしか出来なかった、通信も妨害され助けを呼ぶことも出来ない状況

そしてまもなく敵は現れた、殺人が趣味の腐った目をした奴が右手に持った銃に氣を込めていた、巨大な氣に対しアラームが鳴り響く
中涼月は静かに目を閉じた

（まっ、私等の最後なんかこんなモンだよな）

涼月が諦めたその時に、いきなりその少年は現れた、少年の右手は氣弾を簡単に消し去り、氣弾を消され戸惑う敵を殴り飛ばした、こ

の時になって涼月は目を開いた、いきなり現れたコイツは一体何者なのか？なんで自分を助けたのか？、質問は山積みになりパニック状態の涼月は呆然としていた

そして、少年は振り返り右手を涼月の上に置きこう言った

「もう、大丈夫だ、助けに来た」

出会った時と同じように微笑む、当麻に涼月は思わず紅潮した顔を背けて、呟いた

「助けなんか、呼んだ覚えねえぞ」

「かゝゝ可愛くねえな、そこはお礼の一つでも言えよ」

涼月は特甲を再転送しなおし、立ち上ると頭をかきながら小さな声で囁いた

「……あ、ありがとう」

「何て？」

「二度は言わねえ」

涼月は紅潮した顔を見られないように俯いて叫んだ

バリアジャケットを着たアーチャーがランサーと共に涼月達の方に走り寄って来て合流した

「ランサー、平気か？」

「はっ、苦戦していましたがアーチャー殿のおかげで窮地を脱しました」

「そっか」

涼月はランサーの調子を確認めると、前に向き直って叫んだ

「さあ、第三ラウンドの始まりだ！」

しかし、それに答える者はいなかった。

「あの〜涼月サン、敵なら攻撃を防がれたあたりで一目散に逃げ出しフゲエ」

涼月は当麻に軽く一撃を見舞い黙らせ、辺りを見渡した

「御館様、某と戦っていた二人もアーチャー殿の一撃を受けて逃げ出した次第にございます」

涼月はいない敵に叫び散らしてしまい顔が紅潮していた、ただでさえ恥ずかしいのに当麻に見られたことで涼月は完全にパニックってしまった

（クソ〜恥ずかしすぎる、なんて言って話を切り出せば……………）

俯いて両手で頭をかく涼月は後ろから黒いオーラを感じ取り、固まった、そしてゆっくりと後ろを向くといつもはニコニコしているアーチャーが無表情で黒いオーラを放っていた

「ねえ、涼月ちゃん、ランサー君」

「は、はい」

アーチャーのまさかの変貌に涼月とランサーアーチャーの前に二人並んで直立していた

「なんで、私達を呼ばなかったのかな？今日、仲間になったんだよね、

一緒に戦うって約束したよね

というかなんで二人共一人で戦ってたの？」

アーチャーの圧倒的なオーラに涼月とランサーは一言もしやべれなかった

（このプレッシャーは信長公以上か！？）

アーチャーから魔力が吹き出すといよいよ止められなくなった

「あの、それはその、色々あってだな」

涼月は懸命に言い訳をしようとするが、恐怖のあまり言葉にならなかった

「色々あったんだぶん、マスター向こうで涼月ちゃん達とお話してきますね」

（断ってくれ、当麻）

「あ、ああ」

涼月の願いも虚しくプレッシャーに押しつぶされ半ば空気になっていた当麻は許可をだしてしまいアーチャーは涼月とランサーを路地裏に引きずっていった

そして、夜の学園都市に二つの悲鳴が響き渡った

2月6日 帰還！銀髪碧眼シスター

涼月とランサーを助けた後、俯きながらごめんなさいを連呼する二人と別れ

当麻とアーチャーは色々なことあり疲れた二人は直ぐに寝てしまったのだ、そしてイギリスから届いた一通のエメールは朝に届いた大量の広告に紛れ当麻の目に触れることはなかった

四日後の2月6日土曜日の朝、普段なら誰も訪ねてこない当麻のマンションの前に今日は銀髪碧眼の白い修道服を着た少女、インデックスが立っていた

彼女は一月前までここに住んでいたのだが、先だつてのローマ清教との戦争が終わった後様々な戦後処理をするためにイギリスに渡っていたのであった、そしてそれが終わったインデックスは待ちきれずに朝一番の飛行機（ちなみに一人で飛行機に乗るために完全記憶能力を使い空港内の内装を暗記したのであった）に飛び乗り日本に帰ってきたのだ

それもこれも大好きな当麻に会うためなのであった、一緒に住んでいた頃はそこはかとなない仄かな想いであつたが戦争の終盤に自分の

想いに気づきそして別れて暮らした1ヶ月の間にその想いは順調に育っていったのであった

（ただ大丈夫、ここは私の家でもあるんだから、ただいま、って普通に入ればいいんだよ）

久しぶりに入る当麻の家にテンパリまくるインデックスだが、いつまでもこうしているわけにもいかず意を決して、一応呼び鈴を鳴らしドアノブをひねった

「と、当麻、ただいま」

ここ二週間の当麻の朝は素晴らしい物であった。

まず朝起きるとエプロンを着けたアーチャーが完璧な朝ご飯を作り、昨日の内に済ませておいた（もちろんアーチャーが）洗濯をベランダに干しておいてくれるのだ、今まで自分が一人で慌ただしく行っていた朝の仕事がアーチャーのおかげで、することもなくゆっくりと眠ることができるのだ

そして2月6日土曜日の朝、当麻はアーチャーと一緒に仲良く朝食の準備をしていた、それはともすれば新婚ホヤホヤの夫婦のようでありとても幸せそうであった、そんな中不意に呼び鈴が鳴ったので当麻は手を止めエプロンを脱いで玄関に向かった。

「と、当麻、ただいま」

当麻が玄関に向かうと1ヶ月前まで、一緒に住んでいた大切な「家族」の姿があった

「インデックス！？お前久しぶりだな、元気だったか？」

「うん、元気だったよ、約束通りちゃんと帰って来たよ」

インデックスは前と同じように迎えてくれる当麻に感動し、当麻の胸に飛び込んだ

「えへへ当麻、当麻」

「お、おいインデックス」

インデックスは当麻に抱きついて何度も名前を呼んだ、当麻はインデックスの控え目なふくらみの感触を感じ顔を赤らめながらインデックスの頭を撫でた、そしてしばらくそのまましていると奥からアーチャーが現れた

「マスター？」

玄関で抱き合う当麻とインデックスを見たアーチャーは訝しげな表情で当麻に声をかけた

そしてその表情を見たインデックスは悟った。当麻は私のいない1ヶ月の間に愛人（？）をつくったのだ

そこまで考えてインデックスは思い直した、自身の想い人である当麻は困っている女の子がいれば迷わず助ける困った癖というか性格なのだ、きつとこの女性も自分のようにやむをえない事情があるに違いないのだ

（い、今の私は昔の私や短髪みたいにこの程度じゃ怒らないんだよ）
「当麻、あつちの女の人は誰？」

「ああ、紹介するから上がれよ、っていうかアーチャーはそんな顔すんな」

そう言われインデックスは1ヶ月ぶりに当麻の部屋に入った

しかし当麻は廊下に落ちていた雑誌を踏んづけてしまいアーチャーを押し倒す形でこけてしまった、しかも左手はアーチャーの割と大きなふくらみの上にあった、慌てて飛び退いた当麻だが直ぐに前後から殺気を感じ取った

「とっっま」

「マスター」

インデックスは当麻の頭にかじりつき、アーチャーはレイジングハートを展開した

「ぎゃあゝ痛い痛い痛い、久しぶりに噛みつかれた

そしてアーチャーはレイジングハートを展開しないで」

それから30分程の間当麻の部屋から悲鳴が響き渡った

一時間後、当麻の部屋では体中に噛み跡と痣を幾つか作った当麻とニコニコ笑顔のいつものアーチャー、そしてキラキラした目で朝ご飯をかきこむインデックスがテーブルを取り囲んでいた

「スゴいね、アーチャーのご飯はとっても美味しいんだよ、モグモグ流石は聖杯戦争の英霊！モグモグおかわり」

「はいはいちよつと待つてね、はい！ちゃんと噛んで食べるんだよ」（インデックスの奴もうアーチャーに餌づけされてやがる）

ひとしきり当麻に制裁を加えた二人は、気絶している当麻を放り出して自己紹介をしあうとアーチャーはインデックスに今回の聖杯戦争の事を説明すると（インデックスは勿論、聖杯戦争について知っていた）インデックスは安心してアーチャーのことを受け入れた、そして作りかけの朝ご飯を二人で完成させた後アーチャーのご飯によつてインデックスは懐柔されたのだった

ご飯を食べ終わつた三人はアーチャーの淹れたお茶を飲みながら、まったりと雑談を始めた

「アーチャーの宝具つてさっきのレイジングハートなの」

「そうだけど、どうかしたのか？」

インデックスは少し考え込んだ後、悩みながら話し始めた

「えつとね、私が暗記している10万3000冊の魔導書の中には‘高町なのは’っていう英霊も‘レイジングハート’っていう宝具も一言も記されてないんだよ」

「10万3000冊の魔導書つてどういう意味？」

アーチャーはインデックスについて聞き返した

「インデックスは完全記憶能力者なんだ、その能力を使つて10万3000冊の魔導書を丸ごと暗記してんだ」

インデックスの代わりに当麻が答えるとアーチャーは納得し、先ほどの疑問に答えた

「聖杯の力を使つて英雄の座から召喚したんじゃないの？」

「それなんだよ、今までの聖杯戦争つていうのは過去、現在、未来に存在した英霊を召喚して、使役するんだよ、私が全く知らないような英霊がそんな強いのもおかしいよ」

未来の英霊の可能性や、もしかしたら私が知らないだけかもしれないけどアーチャーの使う魔法はあまりにも異質過ぎる気がする」

アーチャーと当麻は考え込むが二人はあまり詳しくなくよくわかつ

てなかった

「とりあえず、今回の聖杯戦争はおかしいんだな」

インデックスは何もわかっていない当麻の適当なまとめかたにため息をついた

「ふうー、当麻には難しい過ぎたね」

「ちくしょーインデックスになんか小ばかにされた」

「まあまあ、マスター」

当麻はアーチャーになだめられながら、三人の雑談は続いた

そしてインデックスが帰って来た当麻の部屋にはいつまでも騒がしかった

第12回 NEXT BATTLE

2月7日日曜日、智代とバーサーカーは地下にある温泉や遊園地、水族館などがある複合娯楽施設に来ていた。

普段はこのような所には来ない智代であるが、いつも生徒会の仕事で忙しい智代のために生徒会のメンバーがこのこのペア一日優待券を用意してくれ、バーサーカーと一緒に遊びに来ていた

そして智代は昼食のために入ったレストランで困り果てていた、確かに最近は生徒会の仕事に加え聖杯戦争の影響で疲れが溜まっており温泉に浸かったり、遊園地で遊ぶことでリフレッシュすること自体はやぶさかではなかった、しかしもらったチケットはペアチケットであった、しかし誰かを誘おうにも初夏に失恋を経験しておりそれ以来、このような場所に誘うような男性とは付き合いがなく、仕方なく、バーサーカーを誘ったのだが、どうやらこのペアチケットはカップル用のチケットであり、やることなすこと全てがカップル仕様だったのだ、そしてチケットと一緒に入っていた手紙には「背の高い外国人の彼氏と楽しんで来てください 生徒会一同より」と書かれており、否応なく智代はバーサーカーを意識してしまい、動きの全てがギクシャクしていた

（あいつら渡す時にやたらとニヤニヤしてると思ったら……だいたいい私とバーサーカーは……）

そこまで考えて、目の前で昼食を取っているバーサーカーに目を向けた、アメリカ人らしい高い身長に引き締まった筋肉そして顔もワイルドな感じで十分に整っていた

つまり、智代がバーサーカーを異性として意識するのも無理のない

ことだった

「なあ、バーサーカー」

意を決して智代は話しかけた

「なんだよ」

「そのだな、その…今日一日は真名で呼んでもいいか？」

「…何でだ？」

「いや、せつかくの……………そのデートなんだから……………」

そう言って不安げに智代はバーサーカーを見つめた

「……………ダメか？」

「別に、ダメだなんて一言も言ってねえだろ、おら食い終わったんならさっさと次いくぞ、智代、」

もう一度聞き返してくる智代にバーサーカーはぶっきらぼうに答えそそくさとレストランを出た

智代はバーサーカーが初めて自分の名前を呼んでくれたことに胸が暖かくなるのを感じた、バーサーカーの優しさはぶっきらぼうでわかりにくいのが確かに存在していた、今日だって智代の歩幅に合わせて歩いていて、その他にも様々なわかりにくい形でバーサーカーは智代に優しく接していた

「ああ、いくかソル」

智代は返事をするにバーサーカーの後ろについて歩きだした

それから、数時間後智代とバーサーカーは並んで歩いていたが日曜日であるが故に人通りが多く何度もはぐれそうになっていた、そこでバーサーカーは黙って智代に左手を差し出した、それだけでバーサーカーの意図を理解した智代は顔を赤らめながらバーサーカーの左手に右手を絡ませた

（……………大きいな、そして暖かい）

智代は去年出会った、一つ年上の少年を思い出し苦笑した

（案外、私はこういう奴が好きなんだな）
そのまま、智代とバーサーカーのデートは続けられた

夜になり、夕食を食べ終わると徐々に人が減り始めそれからしばらくすると人影はまばらになった、智代とバーサーカーもそろそろ帰ろうとした時、通路の防火扉が降りてきた

智代とバーサーカーは緊急事態に際しすぐさま警戒体制を取った、するとサイレンが鳴り響き非難誘導の放送が流れた

「…どう思う？」

「十中八九、罠だな……………だがそれごと潰す」

智代とバーサーカーは警戒しながら通路を進んで行くが要所要所に防火扉が降りていたり、鍵がかかっているなどでなかなか進めずどこかに誘導されていた

30分ほど歩くと開けたホールに二人は足を踏み入れた

「どうやら、ここに誘導されてたみたいだな」

「ああ」

しばらくすると階段の上から執事服を着た青い髪の少年が現れ深々と礼をした

「こんばんは、キャスターのマスターで三千院家で執事をしている、綾崎ハヤテと申します」

言い終わると同時にバーサーカーはハヤテのもとに飛びかかり、拳を繰り出すがハヤテは後ろに飛び退き回避した

「智代！」

「まったく、ほどほどにしておけよ、法術を許可する」

智代がバーサーカーに許可を出すと、バーサーカーの法術が解放され魔力が噴き出すが、炎はあがらなかった

「!?!」

炎が出ないことを不審に思ったバーサーカーが一度距離をおくと、ハヤテは微笑みを浮かべて語り始めた

「規格外なあなたを倒すためにこちらが用意させていただいた、最新の新消火システムです、消火性の高い液体をホール全体に噴霧してありますので炎どころか火種すらおきませんよ」

炎を封じられるがバーサーカーは気にした様子もなく再度、突撃を開始した

「炎を封じたぐらいで勝った気になってんじゃねえ」

法術によって強化されたバーサーカーの拳や蹴りがハヤテに襲いかかるが、ハヤテは素早い身のこなしでかわしながらしゃべり始めた

「そつえば、先日ここに欠陥工事が見つかりましてね、壁や柱に強い衝撃が与えられると崩れる可能性があるそうです」

ハヤテが言い終わると智代の前に防火扉が閉まりバーサーカーと智代を分離させた

「俺と智代を分離させてもテメエを潰せば終わりだ」

その瞬間にバーサーカーの拳がハヤテの腹に突き刺さる

「!?!」

しかし、バーサーカーの拳は殴ったはずハヤテの体をすり抜けていた

「キヤスターの魔法何ですけど、幻影イリュージョンつていうんですよ、それ」

ハヤテの声は壁の向こうから聞こえており、つまり智代側にハヤテはいた、しかしバーサーカーは慌てることなく言い放った

「お前何か勘違いしてねえか？」

「何をですか？」

「そいつは元々守ってもらうようなタマじゃねえ」

智代はハヤテに接近すると一瞬の内に5発の蹴りを繰り出しハヤテを弾き飛ばした

「私とバーサーカーの分断に随分骨を折ったようだが、私を誰だと

思っている……私はバーサーカーのマスターだぞ」

続けて智代は、ハヤテの懷に飛び込むと得意の足技でハヤテの反撃を許さなかった

（くっ、完璧な誤算だ、まさかマスターの方がここまで強い何て、だが）

智代の蹴りがハヤテの脇腹に直撃するが素早く後ろに飛び受け身をとることで衝撃を逃がし、智代から距離をとると特に気にした様子もなく立ち上がった

「僕も本気を出しますよ」

ハヤテはそう宣言すると智代に向かって駆け出した、同時に智代もハヤテに再度突撃を開始した

両者は中央で立ち止まると人間とは思えないほどのハイスピードな攻防戦を開始した

ほぼ互角の戦いがしばらくの間続くが体力で劣る智代の息が上がり始めると均衡が崩れた、ハヤテはその隙について正拳突きを叩き込んだ

「かはっ」

致命傷ではなかったが決定的な隙を作ってしまった智代に対しハヤテは容赦ない追撃を加えた

その時、いてもたってもいられなくなったバーサーカーが防火扉に右ストレートを叩き込んだ、欠陥工事で構造の緩いホール全体が揺れ、ハヤテが一瞬だけ気を取られる、その一瞬に対し智代は傷だらけの体を押してハヤテの左側頭部にハイキックを見舞った。

かろうじて左腕でのガードがかろうじて間に合ったハヤテであったが、咄嗟に出ただけの左腕は完全に折れていた

（マズいな、このままじゃ）

ハヤテが撤退を視野に入れた思考を始めた時、智代の視界に巻き込まれたらしいツンツン頭の高校生とその頭上の天井のプレートがさ

つきのバーサーカーの一撃で外れかかっているのが映りこんだ

「伏せる！」

智代が走り出したと同時にプレートが外れ落下を始めた、智代は少年を助けるべく少年の胸元に飛び込んだ、それと同時にプレートが地面に落下し激しい音が鳴り響き、崩れる危険性を無視したバーサーカーが二撃目を叩き込み防火扉に穴を開けたのは同時だった

2月7日 レベル0対虚無

上条当麻はいつも不幸である、そしてもちろん今日も不幸だった。

昨日帰って来たインデックスの歓迎を兼ねて地下複合娯楽施設に遊びに来たはよかったのだが、あまりの人ごみにインデックスとアーチャーの二人とはぐれてしまい、二人を探す内に段々時間が過ぎていつてしまいさらに何故か人気がなくなり防火扉が閉じてしまい出れなくなり、しばらく歩いていると当麻は不良狩りで有名な坂上智代と執事服を着た青い髪の少年が向かい合っている現場を目撃した

そして、こちらに気づいた智代は当麻に向かって叫ぶと同時に飛び出した、それと同時に当麻の頭上のプレートが落下を始めた、突然の事態に固まってしまった当麻に智代はタックルを決め当麻を弾き飛ばした。

「痛っっ」

当麻が目を開けるとちょうど真横に智代が倒れていた、当麻が立ち上がって智代の方を見ると智代は頭部を激しく打ちつけたらしく額からおびただしい血を流して気絶していた

「いくつかイレギュラーはありましたが、とりあえずは予定通りとあった所でしょうか」

ハヤテは倒れている智代と壁をぶち破った所で動けずにいるバーサーカーを交互に見た

「そこの一般の人、邪魔なので扉を開けるのでさっさと出て行ってもらえますか？」

当麻は手袋を着けておりそのおかげで左手に刻まれた令呪が見られることはなく一般人と勘違いされたのだった、そして話している隙

にバーサーカーは智代のもとに行こうとするがハヤテの方が智代に近く人質にとられているも同然の状況で動けずにいた

「どういふつもりですか？」

当麻は倒れている智代の前に立ち、ハヤテに立ちふさがった

つまり所当麻には何一つ状況が解らなかった、当麻にはこれが聖杯戦争であることも何が自分にとっての最良の行動なのかも、もしここで当麻が逃げ出してしまうれば恐らくはハヤテの勝利で終わっていたのだろうし、当麻は労をせずに一組のサーヴァントを潰せたのだが、当麻には一つだけ分かっていることがあったそしてそれは、坂上智代は上条当麻を助けたせいで窮地に立たされている、つまりこの状況は自分のせいなのだ

「どういふつもりもクソもねえよ、自分のせいで困ってる奴がいるんなら助ける……当たり前のことだろ」

ハヤテは一瞬驚くが直ぐに顔を引き締める

「そうですか、ならば一緒にどうぞ」

ハヤテが消えると同時に圧倒的な暴力的な破壊をもたらす光、エクスプロージョン爆発が発動した

当麻とバーサーカー事態に先に気づいたのはもちろんバーサーカーだった、爆発までのほんの数瞬の間に距離を詰めて二人の盾になるうとした、しかしバーサーカーの超人的な身体能力を持ってしても距離は詰め切れず爆発の直撃を受け壁に叩きつけられた

ハヤテと背中長剣を背負ったキャスターが再びバーサーカーの前に現れ煙が通り晴れると三人は驚愕を隠せなかった圧倒的な力を持つバーサーカーでさえも吹き飛ばすキャスターの爆発を智代の前に立って右手を突き出しただけの当麻が、ただの右手で防いでい

たのだった

「あ、あり得ない！？キャスターの虚無の魔法が打ち消された！？キャスターの爆発は防御魔法でさえも消し飛ばして確実に相手を倒す筈なのに」

「う、ウソでしょ。そんなバカなことって」バーサーカーも口には出さないものの、非常に驚いており目を見開いていた

当麻は後ろで倒れて頭からかなりの血を流す智代を見て決心した

「頭から血を流して倒れてる女の子に手え出すよな奴なら遠慮はいらねえな」

そして、当麻は手袋を脱ぎ捨て左手に刻まれた令呪を発動させ叫ぶ
「来い！アーチャー！ー！」

当麻の叫びと共に地面に桜色の魔法陣が展開され、中から白いバリアジャケットを着たアーチャーが召喚された

「あなた、マスターだったのですか、まあいいですよ。死にぞこないのバーサーカーと一緒にまとめて始末して差し上げます」

ハヤテは突然のアーチャーの出現に驚きながらも、二人を睨みつける

「勘違いしてんじゃねえよ、アーチャーは戦うために呼んだんじゃないよ」

ハヤテとキャスターそしてバーサーカーが頭に疑問符を浮かべる中、アーチャーは冷静に周りを見渡し大体の状況をつかみ当麻の言わんとしていることを理解した

「アーチャー、坂上先輩を病院に」

「ハア、言うと思った。坂上先輩っていうのはこの娘のことではないんだよね、任せてマイマスター」

アーチャーが智代の側についたあたりで、ハヤテが口を開く

「何をするかと思えば、逃がしませんよ。この地下からはどんなことがあってもね」

アーチャーはレイジングハートを変形させると、先を天井に向けた「さつきマスターを探すためにWAS（ワイド・エリア・サーチの略）を発動させて置いて正解だったね、柱の脆さも何かも全部わか

る」

アーチャーはカートリッジを3発連続でロードする

「全力全開！ディバイーンバスター」

アーチャーの声と共にレイジングハートから強力な魔力砲が放たれた、それは天井を貫きアスファルトを砕き、地上までのトンネルを作り出した

「そんなバカな、壁抜きだつて」

ハヤテは目を見開いて驚いていた

そして、アーチャーは智代を抱えると空に飛び出した。

「やけに、簡単に見逃すじゃねえの」

「まあ、敵の戦力が減るんですから、そこまでして止めるほどじゃありませんよ」

「そうかよ」

バーサーカーは当麻の隣りに立つと無言で拳を突き出した、当麻もそれに合わせて拳を軽く打ちつけるとハヤテ達に向き直った。

「礼は言わねー、アイツ等を叩き潰すぞ、小僧！」

「ああ、礼はいらない、ただ一緒に戦ってくれるだけでいいさ」

当麻とバーサーカーはハヤテとキヤスターを睨みつけていた

「仕方がありません、本気でいかせていただきます、キヤスター」

「わ、分かっているわよ、青犬」

自分の自慢の魔法の防がれ茫然自失としていたキヤスターがハヤテの声に応えるとキヤスターの手にはめられていた、青い指輪（ティファニアが才人を治療する時に使った指輪）が輝くと折れていたハヤテの左腕が完治していた

「なっ」

「ハンッ」

ハヤテが一通り左腕を動かし問題が無いことを確認するとキヤスターが背負っていたデルフリンガー（片刃の長剣）を手に取るとハヤ

テの左手に刻まれたガンダールヴのルーン（令呪も兼任）が輝いた。そしてハヤテはデルフリンガーを正眼に構えた

「さて、本気の僕相手にボロボロのバーサーカーとあなたの二人でどこまでいけま」

ハヤテが微笑みを浮かべ挑発をするが、しゃべっている途中にもかわずバーサーカーと当麻は同時に駆け出し、殴りかかった

「グダグダうるせえ！ぶっ潰してやるから覚悟しな」

「力の差なんかで怯む気なんかねえよ」

ハヤテはバーサーカーと当麻に同時に攻撃されるが、バーサーカーの封炎剣をデルフリンガーを使った絶妙な剣技によって受け流しながら、デルフリンガーを破壊するべく右手を伸ばす当麻をあしらっていた

「合わせろ。小僧！」

バーサーカーは左ジャブからの右ストレート、そしてハイキックを放つそしてそれらを避けるために僅かに体がおよいだハヤテの顔面にめがけて右ストレートを放つが、ハヤテは当麻の右袖を掴み床にたたきけた

「かはっ」

当麻は背中から叩きつけられ動きが止まってしまった

「その右手、切り落としますよ」

ハヤテは倒れている当麻の右腕の付け根に向かってデルフリンガーを振り下ろした。

しかしバーサーカーは素早く封炎剣を振り上げて受け止める、ハヤテはバーサーカーの攻撃の勢いに乗ってそのままバク転を使い距離を取ると、キヤスターがエクスプロージョンを発動させるが、それをよんでいたバーサーカーは倒れていた当麻の襟を掴み

「えっ、うお！？」

エクスプロージョンの中心に向かって投げつけた

「うああああああ」

当麻の反射的に突き出された右手のせいでエクスプロージョンは発

動すらずに打ち消された

「ドラゴンインストール」

すかさずバーサーカーはドラゴンインストールを発動させ右手に炎を纏う

「くれてやるううっ！！！！」

ハヤテとキヤスターに向かつて炎を打ち出した、それはまさに紅蓮の炎、全てを焼き尽くす炎は膨大な魔力が込められハヤテとキヤスターに襲いかかった

ハヤテはその炎に対し冷静に心を静め正眼に構えたデルフリンガーを袈裟切りに振り下ろした。

デルフリンガーによって大部分の炎は吸収されるが、前衛のハヤテはかなりの火傷を受けた

「デメエ、急に人投げるんじゃないやねえよ、ってかその後の炎もかすつたじゃねえか！」

「けっ、役立たずのクセにうつせえな」

お互いに罵り合いながらも二人はハヤテとキヤスターの方を見ていた、そしてハヤテの火傷はキヤスターの指輪の力で完治していた（不味いな、ドラゴンインストールも使っちゃったってのに…………あれじゃあどうしようもねえ）

「打つ手無しと思っていいですね、そろそろ決めさせていただきます」

ハヤテが再び、デルフリンガーを構えるとアーチャーがあけた穴から黒い影と赤い影が現れハヤテを弾き飛ばした。

「今度は私達が助けに来たぜ、当麻」

「アーチャー殿からネンワとやらを受けて加勢に來たでござる」

当麻の元に走り寄ってきた涼月とランサーは当麻に声をかけた後、ハヤテ達に向き直った。

「4対2ですか、相手に出来ないこともないですが、ここは素直に逃げさせていただきます、キャスター」

「分かつてるわよ、テレポート転移」

ハヤテとキャスターが光に包まれると二人はその場からいなくなっていた

「ちっ、直ぐ逃げやがってタマなしヤローが」

涼月が吐き捨てるように言くと、当麻が涼月に礼を言った

「ありがとうな、涼月、ランサーお前等のおかげで助かった」

涼月は思っていた以上に素直にお礼を言われ顔を真っ赤にしていた

「お、おうまあ、お前には助けられっぱなしだから、たまにはな」

それから、バーサーカーの素性についての話になったり、涼月が照れ隠しに当麻を殴ったりもあつたがほどほどに平和だった

TURN 14 ブリタニアの白き死神VS管理局の白い魔王（前書き）

お待たせいたしました、というか1ヶ月以上も放置しておいて待っていてくれたかはわかりませんが、ちゃんと完結させますので今後ともよろしく願います。では本編をどうぞ

TURN 14 ブリタニアの白き死神VS管理局の白い魔王

アーチャーは怪我をした智代を当麻がよくお世話になる病院に預けると当麻達の元に戻るべく、学園都市の空を飛行していた

（受け答えしてくれたカエル顔のお医者さんはちよつと頼りないけどマスターがよくお世話になってるらしいし大丈夫だね）

余談だが、誰かが怪我をした場合はこの病院に連れて行くことがアーチャーと当麻の間で決められていた

（涼月ちゃん達には念話で助けをよんでおいたけど、涼月ちゃん達は念話ができないから一方的に伝えただけだから、向こうがどうなってるかわからないし急いだ方がいいよね）

そう思い、さらにスピードをあげようとした瞬間、アーチャーはヒヤリとした僅かな殺気を感じ取り高速で左に移動した、そして数瞬後に先ほどまでアーチャーがいた空間を高速の弾丸が貫いた、アーチャーが弾丸の飛んできた方向を向くと白を基調として金色に縁取られた鎧のようなボディをした4〜5mほどのロボット、ランスロットがアーチャーにヴァリスを向けていた。

「誰？なんでこんなことするの？」

アーチャーがそう問い掛けると、ランスロットの外部スピーカーから若い男の声が聞こえてきた

「僕の名前はライダー、聖杯戦争のサーヴァントだ、戦う理由はそれだけで十分だろう」

アーチャーはそれを聞くと桜色の魔力弾をランスロットに向かって発射した、ランスロットはそれを横に飛んで避けると屋上から道路に着地すると同時に加速しアーチャーに接近しながらヴァリスを連射した

アーチャーは慌てずに回避すると今度は誘導性の高い魔力弾を無数に発射した、ライダーはヴァリスをしまうとMVSを抜き放ち迎撃

体制を整える、アーチャーの魔力弾はランスロットを取り囲むように配置されありとあらゆる方向、角度からライダーに襲いかかった。しかし、ライダーの超人的な反射神経と卓越した操縦技術によって機動するランスロットは時にはMVSにより撃ち落とし、時にロボットとは思えない程滑らかな動きで体制を入れ替えることで、一発たりともランスロットに直撃することはなかった

「くっ、数が多い」

しかし、アーチャーの魔力弾は尽きることなく打ち出され、一方的に攻撃され続ける状況に流石のライダーも焦りを感じ始めた、ライダーは一瞬の隙に魔力弾の包囲網から抜け出すと真っ直ぐアーチャーを見つめながら後退し体制を整えた

（流石はアーチャー遠距離じゃ、相手にならない…接近戦で仕留める）

後退していたランスロットを一気に前進させ加速させて魔力弾を振り切ると同時にビルにハーケンを打ち込み、ジャンプと同時にハーケンを巻き上げアーチャーの真上に飛び上がった、そして空中でMVSからヴァリスへと持ち替えアーチャーに向かって発射し牽制した。

アーチャーは空中で高速移動してヴァリスを回避するがランスロットの接近を許してしまい、ランスロットはヴァリスをしまうと右肩からMVSを抜くと袈裟懸けに斬りつけた、しかしアーチャーの圧倒的な魔力で作られたバリアはランスロットの一撃を真っ正面から受け止める、そして

カートリッジがロードされレイジングハートの先に桜色に輝く魔力が集中する

（あれは、マズい）

ライダーはランスロットの左腕のブレイズルミナスを展開し防御体

制に入った

「エクセリオンバスター」

しかし、アーチャーの砲撃魔法は軽々とランスロットのブレイズルミナスを貫通しランスロットの左腕を砕き、ランスロットを吹き飛ばしビルにめり込んだ

ランスロットはめり込んだビルの中で柱にもたれかかる座り込み力無く緑色のツインアイを明滅させていた、アーチャーはトドメをさすべくレイジングハートをランスロットに向けた。

「私の勝ちだよ……………じゃあね」

アーチャーは倒れている相手にトドメをさすようなことはしたくはなかったが、これは管理局員としての仕事ではなく聖杯戦争であり慈悲をかけることはできなかった

「参ったよ、ここまで圧倒的に僕のランスロットが負けるとはね」

ボロボロのランスロットのスピーカーから時々かすれた音声が届いてきた。

「……………」

アーチャーは何も答えなかった。ただ警戒を怠らずにレイジングハートを向け続けた

「魔法とは一切関係ない僕にすらわかるその驚異的な魔力にあの威力……………まさに魔王だね」

「いいよ……………魔王で、魔王らしいやり方で大切な物を守れるなら」

アーチャーは覚悟を持ってライダーを睨み言い放った

「そうだね、大切な物を守るためなら、ね」

ライダーは動かないランスロットを無理やり動かして立たせる

「君が魔王だというなら僕は死神だよ」

そしてランスロットが光を放ち始める

「真名解放 ランスロット・コンクエスター」

ランスロットの光が更に強まりランスロットの周辺を白く塗り潰す。

そして光が収まると先程までの壊れかけのランスロットではなく新品同然に蘇り、さらに背部にフロートユニットと折り畳まれた砲身が追加されたランスロット・コンクエスターがその姿を現した

アーチャーとライダーがランスロットを通して見つめあうと二人は素早くビルから飛び出し、さっきまでいたビルよりもはるか上空でアーチャーはレイジングハートをライダーはMVSを構えた

そして、両者は同時に動き出した、アーチャーはカートリッジをロードして魔力弾をばらまき、対してライダーは先程よりも速い速度で魔力弾を回避しながら、アーチャーの右斜め下に潜り込んだ。

「速い！」

ライダーのMVSがアーチャーに向かって振り上げられるがアーチャーのバリアによって防がれるが両手に持ったMVSによる息もつかせぬ波状攻撃によりアーチャーは反撃できず、回避と防御に全力を尽くさざるをえなかった

そして、ちょうど10回目の斬撃がアーチャーのバリアに命中した時、初めてアーチャーのバリアに亀裂が入りアーチャーの体制が崩れた、その隙を狙いライダーは今までよりも大きく振りかぶりアーチャーのバリアに叩きつけた、アーチャーのバリアがついに音をたてて砕ける、更にライダーは間髪入れずにアーチャーに蹴りを叩き込む

大きく吹き飛ばされるがバリアジャケットのおかげでダメージは殆どないが致命的な隙が生まれる、ライダーは右手のMVSをしまい腰にマウントされたヴァリスを取り出そうとした瞬間、ランスロットの周辺に桜色の三つの輪が現れ、輪が一気に縮まりランスロットを縛り上げる

「三重バインド、いくら速くても止めてしまえば終わりだね」

ライダーはバインドを引きちぎるべく力を込めるがランスロットの

人工筋肉が軋みを上げるがバインドが壊れる様子はない

「今度こそ、仕留める」

カートリッジをまとめて三発ほどロードし爆発的に魔力が高まる、桜色の魔力光を放ちながらレイジングハートを先端部に集中した魔力は強力な砲撃魔法となつて放たれる

「エクセリオンバスター」

「くっ！マズい」

放たれた砲撃魔法はランスロットに直撃し大きな爆煙を上げるがアーチャーは警戒をとらずにそこを見つめ続けた

爆煙が晴れると錐体状の緑色のバリア、コアルミナスコーンを発動させた無傷のランスロットがいた、ライダーはもう一度力を込めてバインドを引きちぎる

それと同時にアーチャーの魔力弾が襲いかかる、ランスロットのスピードに慣れたアーチャーは今度は接近させることなく戦い始めるライダーも接近を試みようとするが、そのたびに魔力弾と砲撃魔法に阻まれ接近できずにいた、また牽制のために打ち込んだヴァリスも最低限の動きでかわされ、当たったとしても強固なバリアに防がれてしまっていた

（このままじゃ埒があかない）

ライダーは一度下がり体制を整えると背部に折りまれた砲身を右肩に展開して組み立て砲身のソケットにヴァリスを合体させハドロンブラスターの射撃体制をとる

射撃体制をとるランスロットを見たアーチャーもまた切り札をきる

「ブラスター1」

ブラスターシステム、レイジングハートに組み込まれた限界を突破しアーチャーにさらなる力を与える切り札をきる

「これならどうだ」

ライダーは極一点集中されたハドロン砲を打ち出すランスロット最

大火力の兵装の発射準備を完成させる

「全力全開」

更にカートリッジを三発ロードし驚異的なまでに魔力を高める

「発射」

「シユート」

ランスロットがアーチャーをロックするとハドロンブラスターを発射したと同時にアーチャーの今まで一番大きな砲撃魔法が放たれる

二人のちょうど中間地点でぶつかり合った二つの砲撃は激しい炸裂音と大きな爆発を発生させ消滅した

爆発の残響が響くなかランスロットのコックピットにエネルギー切れを示す警告音が響いた

「エナジーファイラーが、一旦退くか」

ランスロットは踵を返すと最大戦速でビルに紛れこむように飛び去った

アーチャーはランスロットが飛び去った方向を向いて追撃するべきか悩んだが、ブラスターシステムまで使い疲労している体で深追いするよりも、当麻と合流することを優先し、ランスロットが消えた方向とは別の方向に飛んだ

第拾伍話 真昼の決闘（前書き）

今更ですがこの作品にはネタバレ、オリ設定、ご都合が多分に含まれています。

それでもよろしい人だけお進み下さい

第拾伍話 真昼の決闘

「……なーんか世界とかすくいてえ」

涼月・ディートリッヒ・シュルツは二月初旬のまだまだ寒い空の下、オシャレな感じのオープンカフェのテラス席でタバコをふかしながら、英語の問題を解いていたが疲れたのか背もたれにもたれかかっていた

「御館様は、よくこのような南蛮語が解るでござるなあ」

涼月の向かいに座った、ランサーが声をかけると涼月は灰皿にタバコを押しつけて火を消すと大分温くなったコーヒーを飲みながら力無く応える

「南蛮語って何時代だよ？大体元々私はオーストリア人だし、最近まで日本語の方が苦手だったさ」

「そうなのでござるか？それにしても随分流暢な日本語でござるな、やはり当麻殿のおかげでござるな」涼月は派手にコーヒーを吹き出し咳き込んだ

「ゲホ、ゲホッなんでそこでアイツの名前が出るんだよ」

「やや違うのでござるか？拙者てつきり御館様が日本語を覚えたのは当麻殿と話すためだとばかり」

「ち、違えーよ、日本で生活するから、自然と覚えたんだよ」

「そうなのでござるか？」

「そーだよ」

涼月は顔を真っ赤にしてテーブルに手をつけて否定したがそれが照れ隠しであることは色恋に疎いランサーにすらわかった、尚も声を荒げて否定するが明らかに逆効果だった

「あんた、そこで何してんの？」

「あああん！」

涼月が息を荒くして声がした方を睨むとオレンジ色のツインテールの制服姿の少女神楽坂明日菜と逆立った金髪に黒い服装の青年セイ

バーが立っていた

「ucci、見りやあわかなだろ、英語の宿題かたずけてんだよ」

「何露骨に舌打ちしてんのよ、英語の宿題ってこれ？」

明日菜は自然に涼月の隣に座ると涼月がやっていた宿題を見ると顔をしかめた、ついでにセイバーも席につき4人席が埋まった

「何これ？全然わかんない絶対これ中学生レベルじゃないでしょ、涼月ちゃんこれ本当に解けんの」

「解けるからやってんだよ、っーか早く返せよシヨタコン女」

涼月は明日菜が持っていたノートを奪い取ると同時に軽く地雷を踏んだ、明日菜は額に青筋を浮かべながら怒りを抑えた

「御館様、シヨタコン、とはなんでございましょう」

「んっ、ああなんっーかな、10才のガキに手えだす変態のことだ」

「なんと！セイバー殿のマスターにはそのような趣味が」

「ちがーっーう、あんたといいこの間の上条といいなんで私をシヨタコン扱いしてんのよ」

「フー」

明日菜がランサーの声を遮り大声を出す。セイバーはまたかと言わんばかりにため息をつく

涼月は先程までいじられていた八つ当たりにも更に続ける

「あれだろ、噂の子ども先生を誑し込んでんだろ結構有名だぜお前等」

「だから、違っって言ってんでしょ」

涼月はニヤニヤしながら顔を真っ赤にして叫びまくる明日菜を更に弄っていた

「止めなくて良いのでござるか？」

見かねたランサーがセイバーに耳打ちするとセイバーは興味なさげに呟いた

「勝手にさせておけばいいさ、その内収まるさ」

「そんなものでござるか」

しばらくして一段落つくと明日菜が何かを思い出したのか若干ニヤ

ニヤしながら携帯を取り出し録音された声が流れ出す

『あつ、そこにいるのは誰？良き市民も犯罪者もみんな釘付け 黒天使ピクリン！愛と平和と正義のため華麗に参上！』

「ぶふうー」

「くっ」

「プッ」

録音されたやたらと高い涼月の声が明日菜の携帯から再生される、普段とのあまりのギャップが滑稽さをさらに引き立たせる

「おお前、ななな何でそんなモン持ってたんだよ」

動揺を隠しきれず、どもりながらしゃべる涼月、先程の声は先日 of 広報活動（学園都市の特殊鎮圧部隊であるMPBは治安の維持の重要性をアピールするためド派手な衣装でパレードを行う）で行われたパレードでここ数ヶ月で最も恥ずかしい設定 黒天使ピクリン だった

そして勝ち誇った顔で明日菜は言い放つ

「結構有名よあんた、MPBのケルベルス小隊長 黒天使ピクリン ちゃん」

明日菜は言い終わると続きを再生し始めた

『真実の愛を求めてさまようあなたも一発元氣！ねえ、幸せってなんだろう？それはピクリンと出会うこと！』

さながら、某ディ・ニー・ンドのパレードの際のような甲高い声がこだまする

「やめろー」

涼月が大声出しながら止めようとするが明日菜は先程の仕返しと言わんばかりに再生を続ける、セイバーとランサーはすでにどん引きして二人を眺めていた

「まだまだいくわよ『みんな大好きだよ！あつ、あれは誰の声？僕たちみんなの愛の使徒 黒天使ピクリン！』」

「やめろー」

「フッフッまだあるわよ」

「神様どうか今すぐあたしをこの世から消してくれ」

涼月はすでに恥辱のメーターを振り切り軽い鬱になりテーブルに顔を押しつけていた、実行犯である明日菜でさえも罪悪感にさいなまれていた

「ほら、なんて言うか仕事だったんでしょ、その〴〵上手だったし」

一生懸命フロアに入るが涼月が復活する様子はなかった

「おっ、涼月何やってんだ」

そして救いの天使（当麻）が現れた、学校帰りで一人の当麻の声を聞いた涼月はすぐさま顔を上げて返事をした

「いつ今な、英語の宿題かたずけてたんだよ、ほら」

涼月は宿題を当麻に手渡す、当麻はペラペラ捲りながら話し始めた
「げえ、涼月お前こんなのやってんのかよ、俺なんか全然分かんねーよ、つーかお前、神楽坂と知り合いだったのか？」

ようやく、空気が元に戻り会話が始まったその時テーブルに置いてあった明日菜の携帯が全くの偶然でテーブルから落下そしてこれまた偶然再生ボタンが押されてしまった

『みんなを素敵に抱きしめるために降臨！あなたの心に届くよ嬉し恥ずかし最高元気！』

しかし、再び空気は凍りつくおもむろに当麻がしゃべり始める

「アノースズツ」

「忘れろ」

「フベッシ」

涼月は当麻の記憶を抹消するべく当麻の顔面に鉄拳を叩き込んだ、
当麻はそれはもう見事なまでに錐揉み状に三回転して吹き飛んでい
った

「ハア、ハア、ハア」

『ねえ、愛てなんだろう？それはピクリーガシャベキ

涼月は地面に落ちていた明日菜の携帯を踏み碎くと鼻息荒く低い声
で言い放った

「ハア、ハア、神楽坂とかいったなちよつと面貸せや」

涼月の有無を言わせぬ様子に明日菜は黙って立ち上がって涼月の後
ろをついていった、半ば空気と化していたランサーとセイバーは戦
いの気配に神経を研ぎ澄まし始めるのであった

余談だが、当麻はアーチャーが救助に来るまでの間、カフェの前で
倒れ伏していた

16時間目 FIGHT HEROES

トアル報告書

聖杯戦争開始カラ、二週間が経過ガ依然脱落者ナシ、以前カラ検討サレテイタ“セイイサー追跡者”ノ戦線二投入スルコトガ決定

涼月とランサー、明日菜とセイバーはM P Bの練兵場にて向かい合っていた

「まあアレだ、キツカケはともかく何時かは決着をつけなきゃいけないんだ……戦うぜ、聖杯戦争」

涼月の四肢が幾何学的模様に輝き涼月に特甲が転送される

「いいわよ、いい加減そろそろ一組ぐらい減らしたげる」

明日菜も胸の前で両手を合わせ魔力と気を融合させ感卦法を発動させ、ハマノツルギを召喚し構える

「御館様、セイバー殿の相手は拙者が」

「ああ、任せる。気の済むまでやりな……勝てよ」
「承知」

ランサーは背中になしてあった二本の十手槍を構える。そしてランサーの身体から燃えるような赤いオーラが吹き上がる

「セイバー」

明日菜はセイバーの方を向き合図を送る

「……いいのか」

「さっさで行って、さっさと倒してボッコボコしてきなさい」

「………わかった」

七本の大剣を合体させ、一本の大剣とすると大剣を正眼に構えエメラルドグリーンのオーラを静かにくゆらせた

四人が全員戦闘準備を整えるとどちらともなく、戦闘が開始された。

涼月の特甲は100%純正の科学の産物であり、したがって魔力や気などの超常的なエネルギーを一切使用せずに戦っており、明日菜の最大の長所である魔力無効化能力によるアドバンテージを得ることはできなかった、そして拳中心で攻める涼月に対し明日菜は脚技を中心にハマノツルギ（ハリセン状態）で戦う、明日菜の方がリーチで勝っていたが、普段重火器や圧倒的にリーチの違う魔族と戦闘をする涼月にとってあまり関係がなかった

そして、二人は今互角の戦いを繰り広げていた

「オラア」

涼月の右ストレートが明日菜に迫るが、明日菜はサイドステップをとって回避すると右足でハイキックを放つがそれを涼月は左腕でしっかりとガードするがミシリと特甲が軋む音が涼月に伝わる、そこから涼月は明日菜の足を払いのけると同時に左腕でジャブを幾つか放つが明日菜の持つハマノツルギによって防がれるが、涼月は気にせずにガードの上からさらに本命の右を叩き込んだ、涼月の右手に内蔵された超振動型雷撃器が発動し轟音とともにガードごと明日菜を跳ね飛ばした、明日菜は膝をつきながらも後退し一旦距離をとった「痛つつ、ガードの上からでも吹き飛ばすなんて、どんな威力よ」

涼月はフレームが歪んだ左腕を再転送して無傷の左腕をつけながら応える

「うつせえーよ、テメエこそ素手で特甲軋ませやがってこのクソ力」涼月が言い終わると同時に今度は明日菜が一気に接近し飛び蹴りを放った、涼月は両腕で防ぐが両腕が再び軋みを上げる、そして飛び蹴りを決め着地をした明日菜は再転送する暇を与えぬように次々と蹴りを繰り返してさらにハマノツルギを打ち込む

「おりゃおりゃおりゃおりゃ」

絶え間ない明日菜の攻撃に涼月はかろうじて防ぐことができていたが反撃は一切できていなかった、状況を打開するべく涼月は左フックを放つがスウェーでかわされてしまい明日菜の前に致命的な隙を作り出してしまう

「しまっ」

ガードどころか気や魔法による障壁が一切ない無防備な涼月の脇腹（特甲児童である涼月の四肢は機械であるが、胴体部と頭部はほぼ生身である）に明日菜の蹴り入る

「かはっ」

口元から僅かながら血を吐き、脇腹を抑えよるける涼月に明日菜の力カト落としが迫る、涼月の頭部に付いた飾り耳から発せられる抗磁圧の見えないヘルメットを簡単に破り涼月の頭を轟音と共に地面に打ちつけた

「なあ、お前さあ何のためにこんなのに参戦したんだ」

昼下がりの日だまりの中涼月はタバコを吸いながらランサーに質問してみた

「……どういう意味でございましょう？」

「ん、ああ、ほら、お前さよく忠義だとか民のためとか言うけどさ現代にはさ、お前の主も民もいないんだぜ」

涼月は先ほどの質問をもっと噛み砕いて再度問うがランサーは真剣な顔で何の迷いも無く即答する

「恐れながら申し上げます、今の主は涼月・でいーとりっひ・しゅるつ、貴女様でございます、そして拙者が戦う理由は今の昔も御館様への忠義故……ただそれだけでございます」

ランサーの返答に呆気にとられるが、納得しタバコをもみ消す

「なら、私もお前の主らしく一緒に突撃してやるよ」

「はい、お供します御館様」

涼月の意識が浮上しゆっくりと目をあけると自分の前に自分を蹴り潰したであろう、明日菜の足があった、涼月はほぼ無意識のままその足を左手で掴み引き倒した

（私はランサーのマスターで御館様なんだ、そう簡単に負けてたまるかよ）

あお向けに倒れ驚きを隠せない明日菜を尻目に頭から血を流しながらも機敏な動きで明日菜の足を跨ぐような形で立ち上がると明日菜の胸にめがけて全力で右手を振り下ろした、爆音そして打ちつけた

明日菜を中心に小さなクレーターが出来上がった、更に左手を振りに上げトドメを刺そうとしたがそこで涼月の両腕が限界をむかえる

「ちっ」

涼月は一度後退し体制を整え再転送を行い両腕を新品にかえる

「ゴホッ、ゴホッ、ハアハアハア」

明日菜も咳き込み殴られた部分をおさえながらハマノツルギを杖代わりにして立ち上がる

涼月も追撃を行おうとしたが急に頭がふらつき膝をつく、お互いに満身創痍でまともに動けない中、お互いに見つめ合ったままゆっくりと歩み寄ると先ほどまでのような素早い動きで二人は戦闘を再開した

ランサーとセイバーの戦いは最速のサーヴァントであるランサーの速度がリードする形で始まったが、しばらくすると最優のサーヴァントであるセイバーはしっかりとランサーの動きに対応していた

セイバーはスピードを重視し大剣を分解し両手に持ちランサーの神速の突きを弾き、受け、さばいていた、しかし防戦一方というわけではなく少しでも隙が僅かでもできれば容赦ないセイバーの攻撃が襲いかかっていた

セイバーの斬撃とランサーの突きが交錯し火花が散っていた、お互いに体中に細かい傷が出来ていたが致命傷や動きに支障をきたすような傷は受けていなかった、既に何度目か分からない攻防を終え二人は10m程の距離をとった、数秒息を整えると二人は接近し武器をぶつけ合った、セイバーを切り裂くべくランサーの槍が一瞬の内に十数発の突きとなって襲いかかるが、セイバーは大剣の刀身で受け止め、突きの圧力に屈することなく自分の間合いにもっていく、そして大剣を再び合体させる

「凶斬り」

セイバーの重く鋭い四連撃が放たれる、一発一発が正に一撃必殺の威力をもった四連撃をランサーは攻撃の手を止め槍をクロスさせ受け止める、一発受けるたびに腕が痺れ火花が散ったがランサーの心は真の強者と出会え存分に力をぶつけ合える興奮を隠しきれなかった、ランサーは四連撃の最後の一撃を受け止め後ろに弾き飛ばさる「今度はこちらから行かせてもらうでござる」

凶斬りをつけて痺れる腕を無理やり抑えつけ神速の動きでセイバーに肉迫する

「虎炎」

烈煌の気合いと共にランサーの拳が燃え上がり、セイバーのガードの上からセイバーを叩き潰すような勢いで炎の拳を叩きつける

セイバーは受けきるが顔を歪め後ろに下がり大剣を構え直す

「バカ力め」

お互いに距離をとり、息を整え痺れた腕に問題が無いことを確認する、そして相手を打倒するべく切り札をきる

今までの蓄えられた戦意がセイバーの体がエメラルドグリーンに輝やかせ、戦闘力を上昇させる

「限界を超える」

セイバーとの戦いによって高ぶった闘争心を戦闘力に変換するように戦闘力を上昇させる

「戦極ドライブ」

二人のオーラが爆発的に上昇し辺りを埋め尽くす、やがて二人のオーラが収束し純粹な攻撃力となって武器に宿り今までとは比べ物にならない威力となる

「クライムハザード」

「千両花火」

二人は同時に突進し翠と朱の閃光となって交錯した

第拾七話 英雄その意味その存在その力

限界を超えたセイバーとランサーの戦闘は既に常人には翠と朱の閃光が練兵場に飛び交っているようにしか見えず、しかし二人の武器が交錯するたびに辺りに響き渡る金属音が戦いの凄まじさを物語っていた。

激戦を繰り広げ、相討ちのような形で二人とも傷だらけになり幾本か肋骨に輝が入っている明日菜と頭から血を流し内臓が傷つき口元から血を吐きながら涼月も立って見入ってしまった

明日菜はセイバーの力を完全に見誤っていた、セイバーの剣はたしかにすさまじい至近距離から打たれた弾丸を防ぎ、あの重たい大剣を軽々と振り回す、しかしセイバーの剣術は戦闘によって磨かれたものでどこか無骨さが抜けきらない身体能力に頼ったもので、友人の桜咲刹那の方が剣術においては洗練されており、また敬愛する高畑先生の方が強い、そう思っていたが今日の前で行われる戦闘は正に英雄と英雄の戦いであった。

そこにいたのは普段はクールなくせに実は自分の中でウジウジ悩む内気でナイーブな青年ではなく、一人の戦士として戦場に立ち一人の女性のために剣を握るセイバーは確かに英雄だった、先ほど無骨と表現した剣も刹那とは比べものにならない程のスピードで振るわれ一撃で地面を砕いていた、星そのものを救った英雄の力という物を英雄という存在をこの時初めて理解した

涼月も英雄という存在の重み感じていた、自分のように機械がなけ

れば立つことさえままならず、ましてや生きることすら機械に依存している自分、しかしランサーは自分の力を限界にまで高め槍を振るあの姿は人の極地ともよぶに相応しい姿だった。涼月の脳裏に戦の最前線に立ち敵陣に切り込むランサーの姿が容易に浮かんた、その姿は英雄と呼ぶに相応しいものだ。そしてその背中には敬愛する主、志を同じくする仲間、守るべき民を背負っていた、しかし今ランサーが背負うものそれは自分だけであつた、自分は仮とはいえランサーの英雄の主なのだ、せめてランサーが信じ背中を預けられる主になるうそう涼月は心に決めた

セイバーとランサーの戦いは佳境を迎え更に激しさを増していたランサーの槍の広い間合いと持ち前のスピードを生かし上下左右から放たれる突きや払いはいかな剣の英霊たるセイバーであつても易々と捌くことはできずに攻め倦んでいた、そして槍使いの弱点である接近戦に持ち込んだとしても炎を纏った拳や蹴りによつて十分に対応することができた

（二本の槍に炎の体術、これがランサーの力……強いな）

セイバーの大剣はランサーの神速の突きを防ぎ、切り払いを弾き返した、そして一転して反撃に移ったセイバーの斬撃はガードしているランサーの槍砕かんばかりの威力で叩きつけ強引にガードを引き剥がそうとしていた

（セイバー殿の真の剛剣は凄まじいさには感服したした、しかし最後に勝つのは拙者でござる）

セイバーとランサーの体力も限界に近づき、最後の攻防が始まるうとしていた

「ブレイバー」

セイバーは自分の大剣を地面と平行に構えミサイルのごとくランサーに突撃した、ランサーは十字に構えた槍でセイバーの突きを受け止め押し返されまいと足で踏ん張る、受け止めた瞬間に周囲に爆発したような衝撃波が広がりセイバーの攻撃凄まじさを物語る

攻撃を防ぎきったランサーはここぞとばかりに槍を振り回しセイバーを押し返す、今度こそセイバーを仕留めるべく今まで以上の速力を持ってセイバーの間合いの外から攻撃を続けた、最速のサーヴァントたるランサーの怒涛の反撃はセイバーの実力を持ってしても防ぎきれずセイバーの体に顔に足細かな傷を作っていく

セイバーは大剣を分離させ対応し、速度を上げるが防御が薄くなつたセイバーを好機と見たランサーは一撃の威力を上げる「烈火」

神速の連続突きが放たれセイバーの防御を貫いていく、致命傷になりそうな攻撃だけを弾きランサーの攻撃のリズムを読み反撃のタイミングをはかる、そして程なくそのチャンスが訪れる渾身の突きを放った後のあるかどうか分からない隙その隙に今まで隠し続けていた切り札をきる

「サンダガ」

セイバーの手から電撃が放たれランサーの体を貫く、セイバーは剣の英霊であってキャスターではない故に大した魔力を持たないマテリアの力に依存した魔法では対魔力を持つランサーにほとんどダメージを与えることができない、おそらくは二度と通用しないだろうしかしこの極限状態とも言える状況ではそれで十分だった、電撃を受け硬直したランサーの間合いに侵入し両手の大剣を再び合体させ小細工なしの袈裟切りを放つ、防御が間に合わないことを悟ったランサーはこの危機的状況において攻撃を選択した右手に持った槍を突き出した

ランサーは左肩から右脇腹にかけて斜めに一閃され吹き飛ばされる、がランサーが突き出した槍はセイバーの左脇腹には突き刺さっていた、セイバーは槍を引き抜き歩きだそうとしたがどうにも血が足り

ないのか、足がふらつき腕にも力が入らなかった

「……ハア、ハア動け、動け、俺は俺は……エアリスを」

ランサーも槍を杖代わりにしてなんとか立ち上がる

「何のこれしき、我が忠義の前に……」

ランサーは上着を脱ぎ傷の上に巻き荒く血を止めるがノーガードで受けた傷は浅くなくどう見ても気休めにしかないが、ランサーはセイバーに向かって歩きだす

「見ていて下され、御館様これが我が忠義」

「こっんのアホランサー！ テメエが死んじゃったら意味ねえだろ！」
涼月の怒声が響き渡りランサーの足が止まる、反対に涼月がランサーの側まで歩き出し言い放つ

「セイバーを倒したって聖杯戦争はまだ終わんねえんだよ、テメエも一軍の将なら考えて行動しやがれ」

ランサーが呆気にとられ何も言わない内に涼月がランサーの右腕を取り肩に担いで歩き出す

「今はとりあえず生きろ、セイバーとの再戦はその後だ」

「……承知いたしました」

黙ってその様子を見ていたセイバーと明日菜も何も言わずそれを見送る

「次はこんなケガせずに勝ちなさいよ」

「なんだ、心配してくれていたのか？」

「……当たり前でしょ、あんたは私のサーヴァントなんだから」

「フツ、そう言えばそうだったな、今度は一撃で勝つさ」

「あんたが強気なんて珍しいわね」

「そういう時もある」

言葉で語らずに再戦の誓いをする二人サーヴァント、辺りはすっかり暗くなっていて激戦を繰り広げ集中力を欠いていた四人は上空に浮かぶ存在に気づかなかった

無数の金色の閃光が絨毯爆撃のようにセイバーと明日菜そしてランサーと涼月に襲いかかった、防御が一切できなかった四人は地面に倒れ臥した痛む体を持ち上げ攻撃の飛んで来た方を見ると長い金髪をツールにシマントを羽織って黒い軍服のような服を着た妙齡の女性が金色の玉を中心に展開された黒い杖を構え空に浮かんでいた「あの杖、アーチャーの杖と似てやがる、誰だデメエ」

空に浮かぶ女性は無表情で答える
「言っても多分意味がない、あなた達の聖杯戦争はこれまで」
女性は黒い杖を變形させ魔力刃を展開し死神の鎌を連想させる武器とする

「最後に私は八番目のサーヴァント、チエイサー（追跡者）」

四人の中で魔力無効化能力によって一番傷の小さかった明日菜にチエイサーの鎌が迫る、万全の状態でもかわすこと難しい高速の斬撃は魔力無効化能力によって威力が半減していたが、涼月との疲れきった明日菜では反撃さえもできずになぶられた、セイバーもボロボロの体でチエイサーを止めようとするが、それを意に介さずチエイサーは攻撃を続けた
「止めろーデメエ」

涼月の声を聞きうつとおしそくに涼月の方を向くと一瞬で涼月の両足を切り裂く、そして倒れた涼月の頭を蹴り飛ばす

「御館様」

チエイサーは高速でランサーの元に接近すると立ったはいいが動けないランサーの首目掛け鎌を振り下ろすが、それは桜色の防御壁によつて防がれる

「間に合つて良かった」

そこから少し離れた所には魔力反応を感じて遅ればせながらやって来たアーチャーと当麻が立っていた

「そこで何してるのフェイトちゃん？」

「アーチャーと上条当麻ですか、邪魔者ができましたね、ここは一旦引きましょう」

「質問に答えて！」

彼女らしくない大声を張り上げチェイサーにレイジングハートを向ける、チェイサーは何の感情も映さない瞳をアーチャーに向けた
「今ここにいるのは、時空管理局執務官でもあなたの知ってるフェイトでもない、私は八番目のサーヴァントチェイサー、つまりはそう言うこと」

「答えになってないよ、フェイトちゃん、フェイトちゃんがサーヴァントだからってなんで……」

アーチャーが叫ぶがチェイサーはそれ以上応えず飛び去っていった、アーチャーが追おうとしたが当麻が制止した

「追わなくていいアーチャー、涼月達の治療が先だ」

「くっ、わかりました」

当麻は沈痛な面もちで頷くアーチャーを見て声をかける

「さっきのチェイサー、フェイトって呼んでたけど知り合いか？」

「うん、私の親友だよ」

そう言つてアーチャーはチェイサーの飛び去っていった方を悲しそうに眺めた

涼宮ハルヒの解説

涼宮ハルヒ以下ハ「……………」

キヨソ以下キ「おいハルヒよ、もう放送始まってんぞ」

ハ「えっ、ちょ待ちなさいよ」

古泉一樹以下古「と言いましてもラジオなので止めようがありませんよ」

朝比奈みくる以下み「アウウ、緊張してなにしゃべったらいいのやら」

長門有紀以下長「……………」

ハ「ええい、とりあえずタイトルコールするわよ、声合わせない」

キ「へいへい、なんで俺がこんなことせにやなんのだ」

古「わかりました。」

み「は、はい」

長「…わかった」

ハ「じゃあいくわよ、せ」の

ハキ古み長「ドキ 主人公だらけの聖杯戦争」ラジオばじょん」

キ「色々突っ込みたいことがあるがとりあえずなんだこのタイトルは？」

古「どうやら、作者は最初このタイトルで投稿しようしたようで、その名残だそうです」

ハ「相変わらずつまないことに気にして、番組進行上もつときかなきゃいけないことがあんでしょう、ね」みくるちゃん」

み「ふえー私ですか、えーっとえーっと、このラジオってなにしゃべったらいいんですか？」

ハ「そうよ、みくるちゃん、タイトルなんてどうでもいいのよ、二話以降出番がない私達はこの仕事をしつかりこなして本編で出番をしつかりもらうことなのよ」

キ「朝比奈さんはそんなこと一言も言つとらん、でだ、ハルヒよ結局俺達は何をするんだ」

ハ「古泉くん」

古「はい、とりあえず僕達の仕事は作者が途中でめんどくさくなつた、サーヴァントのステータスの発表とこのままだと一生出てこないであろう裏設定や制作裏話だそうです」

ハ「わかった、キョン」

キ「説明したのは、古泉だ、でとりあえずどれからやるんだ」

ハ「最初はサーヴァントのステータス発表からね、有紀お願い」
長「…わかった」

クラス アーチャー

マスター 上条当麻

真名 高町なのは

性別 女性

宝具 レイジングハート・エクセリオン

筋力 E 魔力 A+

耐久 D 幸運 B

敏捷 C 宝具 B

保有スキル

単独行動：A

マスターの魔力による補助なしで行動することができる

マルチタスク：A

複数の思考を同時に処理する、ミッドチルダ式魔法に必須のスキル
Aの場合数十近い分割思考が可能

リンカーコア：A

ミッドチルダ式またはベルカ式魔法を使用するために必要不可欠な
スキルというか機関で空気中の魔力素を体に魔力として取り込むこ
とができる

Aランクのリンカーコアの魔力量は周囲からバカ魔力、悪魔と評さ
れるレベル

不屈の心：B

どんな危機的状況においても諦めず戦い抜く
ダメージによる戦力や志気の低下を抑えられる」

ハ「今でこそ、この作品の主人公みたいなポジションだけど最初は
フェイトさんがセイバーとして登場してなのはさんの出番はなかつ
たらしい」

キ「そうなのか、なんでなのはさんに」

み「えーっと、主人公でアーチャーって言うのが思い浮かばなかつ
たそうです」

ハ「ハイハイ、次いくわよ次」

長「クラス セイバー」

マスター 神楽坂明日菜

真名 クラウド・ストライフ

性別 男性

宝具 合体剣

筋力 A 魔力 C

耐久 A 幸運 D

敏捷 A 宝具 B

保有スキル

対魔力：B

魔力による攻撃を防ぐことができる

魔眼の力：B

エメラルドグリーンのオーラを発し戦闘力を上げることができる

リミット：A

自分の限界を超える力を手にすることができるが連続使用ができず、更に使用時間に限界がある

ドライビングテクニク：B

バイクを自分の手足のように自由自在に乗りこなせる、バイク限定なのでランクがダウンしている」

古「クラウドさんは元々ライダーとして参戦する予定だったらしくドライビングテクニクはその名残だそうです」

ハ「じゃあ次は賛否両論のライダーいくわよ」

長「クラス ライダー

マスター イヴ

真名 枢木スザク

性別 男性

宝具 ランスロット

筋力 D 魔力 E

耐久 D 幸運 D

敏捷 C 宝具 A+

保有スキル

対魔力：C

魔力による攻撃を減衰させることができる

ギアスの呪い：C

ルルーシュによってかけられた死ぬなという絶対遵守の呪い
命を守るためにオートで発動し自分の能力を一ランク上げ、最適な
行動を行う

KMF操縦：A

KMFを操縦することができるスキル

Aランクの場合どんなKMFでも自分の体同然に動かすことができる
」

キ「（カンペを見ながら）え〜と何々クラウドがセイバーに決ま
った後仮面ライダーにするかスザクにするか迷った挙げ句スザクに
したんだと」

ハ「ふ〜ん、まあ、いいわ次は有紀」

長「クラス バースカー」

マスター 坂上智代

真名 ソル・バッドガイ

性別 男性

宝具 封炎剣

筋力 A+ 魔力 A

耐久 A+ 幸運 D

敏捷 B 宝具 B

保有スキル

GEAR：A

人をギア細胞によって強化させることで誕生した生物兵器、並みの人間を超越した回復力や筋力や魔力を持っている

ドラゴンインストール：A+

魔力を大量に放出することにより、圧倒的な戦闘力を得ることができる」

古「カタログスペックだけなら確実に最強ですね」

ハ「ま、バーサーカーなんてそんなもんでしょ、有紀」

長「クラス キャスター」

マスター 綾崎ハヤテ

真名 ルイズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

性別 女性

宝具 水のルビー 始祖の祈祷書

筋力 E 魔力 A+

耐久 D 幸運 A

敏捷 D 宝具 B

保有スキル

虚無：B

失われた最強の系統魔法

制御が上手くできないためランクは高くないが、威力自体はかなり上位

ガンダールヴ：B

伝説の使い魔のルーン

これを持つ者は武器であればどんな物でも自由自在に扱うことができる」

ハ「ツンデレの化身よね」我がSOS団にも欲しい人材ね」

古「因みに本編でもふれましたけどガンダールヴのルーンが令呪を兼用しているらしいですよ」

キ「おゝいアホな作者よ、誰がどうみても三画じゃねえじゃぬえか」
古「クロスオーバー自体がネタなんですから、細かいことは気にせずを楽しみましょう」

ハ「そうそう細かいことなんて気にしたら、この作品自体有り得ないでしょう、何事も楽しむことが大切なの、というわけで次いわよ」

長「クラス ランサー

マスター 涼月・デイドリツヒ・シュルツ

真名 真田弦二郎幸村

性別 男性

宝具 朱羅

筋力 B 魔力 C

耐久 B 幸運 B

敏捷 A + 宝具 C

保有スキル

対魔力：B

魔力による攻撃を防ぐことができる

属性攻撃：B

特定の攻撃に炎を纏わせることができる

戦極ドライブ：A

戦闘における興奮を戦闘力に変換することができ技の威力の一ランク上げることができる」

み「作者さんはアニメを見てファンになってランサーは当初から全く変わってないらしいです」

キ「涼月のマスターになることが決まった時に本多忠勝しようかと悩んだらしいじゃねえか」

古「なるほど、サイボーグコンビというわけですね、それもなかなか面白そうですね」

ハ「いよいよ、最後はアサシンいっくわよ」

長「クラス アサシン

マスター 伊庭いつき

真名 アル・アジフ

性別 女性

宝具 ネクロノミコン

マギウススタイルのいつき

筋力 B 魔力 A

耐久 B 幸運 C

敏捷 B 宝具 A+

保有スキル

マギウススタイル：B

アル・アジフと契約を交わした者をマギウススタイルという超人形態に変身させる

なお、これを使用している時アル・アジフ本体はちびアルというデフォルメ状態になる

魔具召喚：A

アル・アジフ本体に記されている魔具を召喚し使用することができる
バルザイの円月刀やニトクリスの鏡などが該当する」

み「えっと、アル・アジフさんは長い年月を経て肉体と魂を持った

精霊さんです」

キ「精霊さんって、可憐で可愛らしいのは見た目だけだろうが」

古「アサシンでありながら、隠れる気すらなく、本の精霊であるという変わり種ですね」

ハ「というわけで、サーヴァントステータス発表はこれで終了なんだけど、誰も彼もが主人公だけあって個別の作品における保有スキルはAランクばかりね」

キ「仕方ないだろう、主人公だったらその作品では最強なんだから、主人公より強い奴がわんさかいる作品なんか稀だろ」

古「それもそうですね、後この作品におけるセイバー、ランサー、ライダーが持っている対魔力は戦闘を円滑かつ平等に行うための措置だそうです」

み「?????どういことですか?」

キ「つまり、魔法が存在するF Fは一応大丈夫だけど、魔法が全く存在しない戦国B A S A R Aとコードギアスの両作品が魔力による攻撃に対する耐性がないから、そこらへんを平等にしようってことだ」

ハ「まあ、ランスロットが一撃でやられたりしたら萎えるからね」

長「...そろそろ終わり」

ハ「えっ、嘘まだサーヴァントのステータスしか発表してないじゃない」

キ「しかも、チェイサーのステータス発表してねーし」

古「それもありますし、この作品の場合マスターも説明しないといけないですし、長門さんどうにかありませんか?」

長「ならない」

み「へふうゝ私はもうこれきりにしてほしいです」

ハ「ダメよ、残りは第二回で放送するんだから」

キ「えっ?これ続くのか」

古「作品者の気分がのればまたやるらしいですよ」

ハ「じゃあ最後に有紀、提供読みよろしく」

長「わかったこの放送は

毎朝新聞

アストラル

古河パン

喫茶どんぐり

黒の騎士団

霸道財閥

ストライフ・デリバリーサービス

魅惑の妖精

必要悪の教会

アサシン組織

ザビー教団

喫茶翠屋

M P B

ケット・シー

の提供でお送りしました」

キ「全部解る奴いるのか？」

ハ「さあね？感想、レビューを何時でも待ってるからね、またいつかね」

ハキ古み長「まったね」

涼宮ハルヒの解説（後書き）

提供の答えは次話の後書きに書きます、正解がわかったという方は暇でしたら感想板までよろしくお願いします

第??話 NIGHT（前書き）

すみません、しょうもないネタ短編書いてたら、また更新遅れました
今回は短めですが、よろしくお願いします

第？？話 NIGHT

学校の帰り道、いつきとアサシンの二人は公園のベンチに座っていた焼きを食べながら、今後の作戦を立てていた

「むくなんとしても、正面から正々堂々と敵を打ち倒し妾の名誉を挽回せねばモグモグ」

「またそれ、もういい加減諦めたら？別に誰もアサシンのこと馬鹿になんてしてないと思うけど、それにアサシンがそんなに卑怯な人じゃないのはちゃんと僕わかってるよ」

いつきのセリフを聞いたアサシンはベンチから立ち上がって、いつきの前に立つといつきを指差してしゃべり始めた

「甘い甘いぞ、汝がそんなことを言って戦わぬから妾が隠れておるなどと言われるのじゃ」

「それって誰が言ったのさ」

「うっ…………五月蠅い！他のサーヴァントは絶対言っておるのじゃ、だから妾は……………」

アサシンはまだギャーギャーと何かを言って騒ぎ立てる自分のサーヴァントの姿にいつきは最近はそうでもないが、出会って間もない頃のアディリシアさんもよく誇りがどうか言いながら穂波とよく喧嘩してたっけと、益体もないことを考えていた

「いつき！汝は話を聞いておるのか？」

アサシンの叫び声によっていつきは妄想の世界から帰還した

「汝、妾の話しを無視して一人で何を夢想しておった？」

アサシンは先ほどまでの愚痴とは違い明らかに怒っていた、額に青筋を浮かべていつきを睨んでいるアサシンはいつきの恐怖の対象だった

なにせここにあるアサシンの正体はクトゥルフ神話に登場する最強の魔導書ネクロノミコンオリジナルの原典なのだ、不完全な英語版の偽物でさえ異世界から怪物を召喚し、またそれを撃退させることが可能なのだ、

そして偽物でさえそれほど力を持つネクロノミコンの原典の力とは先日セイバーやランサーと戦った程度ではなく、場合によっては時を超えることすら可能なのだという。

アサシンの真名をアストラルのメンバーに伝えた時など全員がショックでかたまってしまっていたものだ

少々脱線したが、結局何が言いたいのかと言うとそんな神話級の存在を怒らせてしまい、いつきは内心焦りアサシンの気迫だけで気絶しそうだった

「ご、ゴメン、許してアサシン」

いつきは今にも土下座しそうな勢いで自分のアサシンに謝りまくった、そのおかげで日が沈み始める頃にはアサシンの怒りは鎮まり、二人は夕暮れの中ゆっくりと自宅に向かって歩き出した

そして

「見つけました。随分逃げ回りましたね、アサシン」

ライダーのマスター、イヴがいつきとアサシンの目の前に立ち言い放つとアサシンは俯きブツブツつぶやき始めた

「だ、大丈夫アサシン」

あまりのアサシンの言動のおかしさにいつきは若干ビビリながら声をかける、そしてアサシンは顔を上げ怒りに肩を震わせながらイヴに言い放つ

「フフフフ、妾はこのような屈辱は初めてじゃ、よもやあのような小娘に卑怯者呼ばわりされるなど」

アサシンは異様な気迫を放ちながらイヴを睨みつける、あまりの迫力にマスターのいつきも一歩引いてしまい、マスターを守るべくライダーがイヴの前に立つ、夕暮れの街が異様な空気に包まれるなかイヴはさらに地雷を踏む

「小娘って、あなたの方が年下に見えますが？」

「五月蠅い、たかだか十数年生きただけの小娘が、数百年の時を重

ねた最強の魔導書たる妾に、」

「なんだ、お婆さんでしたか」

イヴがぼそりとつぶやくとアサシンの唯でさえ短い気が切れる

「いつき！」

「は、はい」

「あやつらを叩き潰すぞ、徹底的にな、奴らの脳髓に妾の恐怖を刻み込んでくれるわ」

「わ、わかった」

アサシンの姿がデフォルメ化しちびアル状態になる、そしていつきは黒いボディアーマーを纏い日本人特有の黒髪を白銀色に変化させ、マギウススタイルに変身する

「今回は最初から全開、出し惜しみはなしじゃ」

「うん」

いつきは自分の左眼につけられた、眼帯を外し妖精眼を解放する

グラムサイト

異様な空気に驚き、固まっていたイヴとライダーもいつきのマギウススタイル、妖精眼の二つを見て気を引き締める

「ライダー、こちらにも宝具を使います」

「イエス、マイロード」

ライダーの返答と共にランスロット・コンクエスターが現れ、ライダーとイヴが素早く乗り込むとランスロットのツインアイに光が灯り戦闘体勢を整える

戦闘になった時、頭を冷やし冷静に戦況を確認する、アサシンは怒りにまかせた戦いがどういう結果を生み出すのかをよく理解していた、しかしそれは許すこととは全く別である

「行くぞ、アサシン、バルザイの円月刀を」

「了解した、行くぞ、いつき」

いつきの手にバルザイの円月刀を召喚し、ランスロットを膝を狙って切りかかった

ライダーは素早くランスロットを動かし、攻撃を回避するとMVSを抜き放ちながら距離をとろうとするが、いつきはマグウスウィングを展開しランスロットと一定の距離を保ちながら時折バルザイの円月刀で攻撃しかけ続けた

「非常識な、あの大きさでこれほどのスピードとパワーそして飛行機能まで」

「まるつきりSFだね、聖杯戦争には未来の英霊も参加可能とはきいていたけど、こんな形で思い知らされるとはね」

「全くじゃ、知名度の低さを宝具の力だけで引っくり返すとは流石はライダーと言ったところかの」

いつきは武装をバルザイの円月刀から、クトウグアとイタクアに変更し、炎と風の弾丸を乱射する、ランスロットに直撃した弾丸は爆煙を広げ機体を覆い尽くす

「だが、最後に勝つのは妾達じゃ」

「もちろん」

爆煙が晴れると緑色のバリアで全身をガードし、無傷のランスロットが現れる

「……一筋縄ではいかないか……」

同時刻、チェイサーはいつき達が戦っている通りにある、ビルの屋上で佇んでいた

「いい加減、出てきたらどうですか？アーチャー」

貯水タンクの裏から、アーチャーは姿を現す

「やっと会えた、サーヴァント同士が戦っているところに行けば会えると思ったよ」

チェイサーは待機状態のバルディッシュを取り出し、バルディッシュ

ユを展開し白いマントを羽織った黒い軍服のようなバリアジャケットを着る、そしてバルディッシュをアーチャーに向ける

「それで、私に会ってどうするつもりですか？」

アーチャーもレイジングハートを展開し、白いバリアジャケットを着る、そしてチェイサーと同じように目の前のチェイサーに向ける
「お話ししよう、話さないときつと何も解らないから」

四騎のサーヴァントの解放された魔力は学園都市全体に広がった、そしてそれに呼応するように他のサーヴァントが集まり始める

「行くぜ、智代、今日こそ他のサーヴァント共を燃えっカスにしてやる」

「ああ、そろそろ他の奴らも本気で来るだろう、思う存分やってこい」

「行くぜ、ランサー」
「御意」

「行くわよ、セイバー今度こそアイツ等をケチヨンケチヨンにしてやんなさい」

「……ああ、任せろ」

「行きましょう、キャスター、漁夫の利でも狙いにね」
「私に命令するんじゃない、この青犬！」

夕暮れに染まったが夜の闇に沈む時、背徳の炎が天覇絶槍がソルジ
ヤーが虚無の担い手が戦場に加わり、第六次聖杯戦争が始まって以
来最も長い夜が始まった

第20話 決戦の夜

日が沈んだ学園都市の中を当麻は走っていた

(……あの時、3日前、チエイサーとかいうサーヴァントに会ってからずっとおかしかつたんだ、ちっ、なんでこんなことになってからじゃねえと、気づかねえんだよ、俺は)

当麻の左手にはアーチャーが残した書き置きが握られていた

(何が「フェイトちゃんに会いに行く、探さないで下さい」だよ、思いつきり戦闘してんじゃねえか、一人で突っ走ってんじゃねえよ) 当麻が向かっている、ビルの屋上では桜色と金色の閃光が幾度となく交錯していた

(つたく、俺が行くまで負けんじゃねえぞ)

そして、当麻は更に走るスピードを上げた

ライダーといつきのバトルも激しさを増していた

いつきのバルザイの円月刀とランスロットのMVSがぶつかり合う度に派手な金属音を打ち鳴らし、オレンジ色の火花が飛び散った。リーチや直接的な攻撃力では、ランスロットの方が勝っていたが、いつきは小回りをきかせた機動とアサシンがサポートについている分、武装の切り替えなどが素早かった

一向に決着がつかない、戦いにライダーは一計を案ずることにした
「いい加減にしろ」

ランスロットで距離をとり、ハドロンプラスターをいつき目掛けて発射する、土煙が辺りを覆い尽くし、視界がゼロになる

「自分で煙幕をまくとはな、未熟者め」

土煙に紛れ込み、いつきはランスロットの背後をとり背中から袈裟懸けにバルザイの円月刀を振り下ろす

「未熟者は君達の方だよ」

いつきの背後にはこの土煙に紛れ、ランスロットのコックピットを開いて脱出したイヴがいつきに奇襲をかけるべく、背中から天使のような翼を広げていた、大きく目立つランスロットを囷に使った罠「しまっ」

「今更、気づいても遅い」

イヴは髪をナノスライサーに変身させ、いつきの両手足の腱を切り裂くが、切り裂かれたはずのいつきは鏡が割れたような音を残して碎け散る

「ニトクリスの鏡」

「ふん、じゃから言っただであろっ、未熟者とな」

いつきの魔眼、妖精眼にとつては誰がどこにいるかなど一目瞭然であり、この程度の罠にかけようとする、相手の裏をかくことは造作もないことだった

「今度こそ、終わりだ」

いつきの持つバルザイの円月刀がイヴの背中に振り下ろされる

イヴはやられたと思い反射的に一瞬、目をつぶってしまった、しかしいつまでたっても覚悟した衝撃はこなかった、それどころか何かに抱かれたような心地よさを感じた

「大丈夫ですか？」

自分の耳元で声をかけられ、目を開けると至近距離にバーサーカーとの戦いの時に出会った、執事服の少年が微笑んでいた

「へっ！？ああなの、ふええ」

イヴはらしくもなく意味不明な声を上げ、よくよく自分の今の状況を確認すると、目の前の少年に横抱きにされていることがわかり、顔を紅潮させていた

執事服の少年はイヴを道路に下ろしながら、自己紹介をした

「先日は、自己紹介すらせずに失礼しました、僕は白皇学園2年生で三千院家で執事をさせていただいている、綾崎ハヤテと申します」
丁寧な自己紹介をする、ハヤテにたいして未だにドキドキしながらも挨拶を返す

「えっと、イヴと言います一応プロの掃除屋です」

イヴが自己紹介を終えると、いつきがバルザイの円月刀をハヤテの頭上に振り下ろすが、ハヤテは背中に担いでいたデルフリンガーを抜き放ち横に構えて防ぐ

「…その妖精眼、アストラルの若社長ですか」

攻撃を防がれ止まっていたいつきにランスロットのMVSが襲いかかった、いつきは慌てることなく後ろに下がり回避する

ランスロットの一撃により土煙が舞う中、高速でハヤテに接近する人影が一つ、ハヤテはデルフリンガーを横になぎ迎撃する、しかし人影はハヤテの目の前で身体を折り畳むように身体を丸めて着地し、多少無理な体制ながらも一瞬で三発の蹴りを放ちハヤテを蹴り飛ばす、更に追撃するべく走り出そうとしたが、髪を針状に尖らせたイヴが間に立ちふさがった

「お前、確かライダーのマスターだったな」

「…バーサーカーのマスター、坂上智代」

智代はイヴの肩越しにハヤテを軽く睨む

「先日は世話になったな、たつぷりと礼はさせてもらう」

智代が後ろに下がると、どこからか現れたバーサーカーと合流する
「つまりくたばれてことだ、ガンフレイム」

バーサーカーは封炎剣を道路に突き刺しイヴとハヤテに向けて炎を発射する、イヴはそれを回避しながらライダーと合流し再びランスロットのコックピットに入る、ハヤテも平然と炎を避ける

「相変わらず、喧嘩早つやいサーヴァントですね」

「はっ、前回はよくもはめてくれたじゃねえか、潰してやるから覚悟しな」

バーサーカーの怒りに呼応するかのように身体から炎が立ちのぼる、

そして

「こそこそ隠れて、奇襲するなんて私らしくねえよな、ランサー」
「はっ、我が身は御館様と共に」

涼月とランサーが戦場に現れる、直後

「まあ、ランサー達まで出て来たんだし、戦いますか」

「……バトルロワイヤルか」

そして、セイバー組も現れ混迷する戦場、初めての者もいれば、すでに何度か戦ったことのあるサーヴァントいるこの状況で、全員が適度に距離を取り合った結果、各々を頂点とした歪な六角形が出来上がった

（アーチャーと当麻がいない、何やってんだアイツ等）

涼月の思考に割り込むように、上空でものすごい魔力がぶつかり合い爆発を引き起こしていた

（あれって、この間のアーチャーとチェイサーとかいうサーヴァントじゃない、向こうは向こうでタイマンはってるわけね）

明日菜が上空からチラリと視線を移すとバーサーカーと並んで立つ智代の姿があった

（あの人って間違いなく、あの坂上生徒会長よね、なんであんな化け物が）

学園都市の裏路地に住む不良共を恐怖のどん底に叩き落とした、最強の生徒会長、ウワサ好きのクラスメートの話しが本当ならば自分の力の及ぶところではない、明日菜は一瞬弱気になるが、隣りにいるセイバーを見て立て直す

（私だって、ネギの従者でセイバーのマスターなんだから負けてらんないんだから）

（ふっ、この間の綾崎ハヤテにリベンジもできる上にバーサーカーの力ならもう二、三騎倒せるといった感じか）

智代は油断も慢心もなく冷静に周囲の戦力を計算し、サーヴァントが強いこともわかった上でそう思った

（イヴさんを助けるためとはいえ、このタイミングで出てきたのは早計でしたね）

ハヤテは自分のサーヴァント、キャスターを隠れさせていたが、ガンドールヴの力を得た自分なら一人でサーヴァント達とやり合う自信があった

（まあ、やれるところまで戦らせてもらいましょう）

（えっ、私、さっきまでお姫様抱っこされてた????えっええええ）

イヴは当面の命の危機が去ったことにより、またしても顔を紅潮させていた、まともな男性経験のないイヴにとって、このような時自分を制御すればいいのかわからなかった

（…いるのは気づいてはいたけど、まさかこんな状況になるとはね）
いつきは静かに佇み、身体中に魔力を通し、神経を妖精眼に集中させどんなことが行っても大丈夫のように、準備を整える

嵐の前の静けさとも言えいいのか、膨大な魔力が周囲を覆い尽くしながらも一切の物音がしない不気味な戦場、動いた者から狙われるのは明白しかし、この状況で退く道理はなく決戦の時は間近に迫っていた

第貳拾壹話 激突！学園都市攻防戦

歪な六角形が作られ誰も動かず、しかし嵐のような闘気と魔力が渦を巻き始めてから三分が経過していた。

実際には三分しかたつてはいないものの通常では有り得ない六つ巴という敵だらけの状況と渦巻く闘気に当てられ、もうすでに何時間にもにらみ合っているような錯覚を全員が覚えた、状況把握に全神経を集中させながら警戒態勢に入る者が多数をしめる中、一部の者達はこれから始まる戦闘に興奮を隠しきれなかった。

そして、ついに我慢がきかなくなったバーサーカーとランサーがほぼ同時に六角形の中心に突進する

「バンディッドブリンガー」

「虎炎」

バーサーカーとランサーの炎を纏った拳がぶつかり合い周囲に爆音を轟かせる、爆音を合図にセイバーとハヤテが両手にしつかりと己の得物を握りしめ、爆心地たる五角形の中心にいる二人に下に斬り込む、そして二人に数秒遅れながらもいつきとランスロットに乗ったライダーが走り出す

いつきとライダーが到着する数秒の間にも、バーサーカーの封炎剣と拳そして蹴りが幾度となく振るわれ周囲の敵を打ち払う、そしてランサーに封炎剣を振り上げた後、セイバーにムチャクチャな体制のまま回し蹴りを放つ

封炎剣が迫るランサーはバーサーカーの暴力的な攻撃を真正面から受けるのは危険と判断しに受け流す、案の定バーサーカーの攻撃を

真正面から受けたセイバーに隙が生まれる

そしてセイバーはバーサーカーの回し蹴りを大剣で受け止めるが、あまりの威力に受けた両手が僅かに痺れる、そしてできた隙を狙いランサーの突きが襲いかかるのをギリギリで受け止める

一方ハヤテは隙のできたセイバーを直接狙わずにセイバーに攻撃を仕掛けたランサーに斬りかかるが、ランサーはギリギリで反応しデルフリンガーによる斬撃を受け止める

三人が固まっているところにバーサーカーの強烈な力カト落としが振り下ろされる、三人は攻防を一旦停止し散開するがバーサーカーの力カトがアスファルトを砕く音の後、直ぐに集まりあいバーサーカーの封炎剣、ランサーの槍、セイバーの大剣、ハヤテのデルフリンガーが火花を散らし合う

英霊の武器が交錯しあう激戦地へと恐れを抱きもせずにつききはバルザイの円月刀を構え、ライダーランスロットにMVSを両手に装備してつつこむ

いつきは右手に持ったバルザイの円月刀を大きく振りかぶりバーサーカー目掛けて投げつける

激戦の合間を縫って絶妙なタイミングで投げられたバルザイの円月刀は、ブーメランのように回転しながらバーサーカーに迫る、バーサーカーは体制を僅かに崩しながらサイドステップでかわす

バーサーカーの回避を妖精眼で予測していた、いつきは男子にしては小さな体をバーサーカーの懷に潜り込ませ、バーサーカーに徒手格闘戦を挑む

「はっ、上等だぜ！」

バーサーカーは身体中に魔力を漲らせる

接近戦を挑んだいつきの方からの最初の一撃はバーサーカーに比べて小さな身体を生かし懷に潜り込ませ密着状態からの肘鉄をだつた

いつきの肘鉄はバーサーカーの鳩尾に見事に突き刺さるが、バーサーカーは倒れもしなければよろめきもしなかった。

いつきがバーサーカーの顔を見上げると平然とした顔でバーサーカーは両手をくんでいつきに振り下ろした、もちろん動揺していても妖精眼によってバーサーカーの動きを感じとりバックステップで回避する

回避した後もいつきはバーサーカーの側から離れずに攻撃を入れ続ける

本来ならば身体中に魔力が満ち満ちたバーサーカーの動きは妖精眼によって十分に予測し対策をとることができ、カウンターを合わせることすら容易であつた。

しかしバーサーカーの防御すらゆるさない圧倒的な攻撃力とほんの僅かでも身体がブレれば即座に連撃を叩き込むラッシュ力が妖精眼によるアドバンテージを無力化させる

（化け物か、あっちの攻撃は当たってないし、僅かだけどこっちの攻撃は当たってるのにこのまま勝てる気がしない）

最初のようにいつきの拳と蹴りは幾発かはクリーンヒットしていたが、ギアであるバーサーカーの耐久力と回復力の前には殆ど意味がなかった

10秒にも満たない攻防戦の後、バーサーカーの背後から最初に投げられたバルザイの円月刀が襲いかかるが、バーサーカーはまるで後ろに目がついているかのように回避する

いつきはバーサーカーが回避したバルザイの円月刀をキャッチし、そのまま回転しながら横薙ぎに振るがバーサーカーの封炎剣で防がれる

いつきがいる正面ではなく、バーサーカーの左側からハヤテが借金取り対策の居留守で身につけた気配遮断法を用いて奇襲をかけるが、バーサーカーはそれさえも避けてみせる

「アトラック・ナチャ」

ハヤテの介入によって僅かにできた隙を利用し、バーサーカーをアトラック・ナチャで絡めとる

ここぞとばかりに、ハヤテといつきが同時に斬りかかる

「うぜえ」

バーサーカーはアトラック・ナチャを力まかせに引きちぎり、反撃の体制をとる

ハヤテといつきの攻撃が当たるかと思われた瞬間

「いつき、後ろだ」

ちびアル状態でいつきについていたアサシンから声が届き後ろを見ると、背後から智代の蹴りが迫っており回避する間すらなくハヤテ

と共に蹴りを喰らい大きく体制を崩してしまう

「いつの間に」

「しまった、バーサーカーに集中しすぎた」

バーサーカーを前に二人はあまりにも大きすぎる隙をさらしてしまう

「シャンタク」

いつきは飛行ユニット、シャンタクを展開し高速でバーサーカーの攻撃から離脱を果たす
残されたハヤテに向かってバーサーカーの拳が放たれる

ハヤテ自身の回避は間に合わなかったが、横合いから事態を見ていた、イヴの長く伸びた髪を変身させた手がハヤテの足を引っ張り無理やりイヴの近くに移動させる

「これで、貸し借りなしです」

イヴが僅かに顔を紅潮させながら、ハヤテから目を背けて言う

「ありがとうございます、イヴさん」

ハヤテから自分の名前を呼んでもらった、それだけでイヴは胸が高鳴るのを感じていた

一方ライダー、セイバー、ランサー、そして明日菜と涼月を加えた5人も死闘を繰り広げていた

ライダーはランスロットを巧みに操りマスターのサポートなしでも、他の四人に遅れをとることなく闘い続けていた

ランスロットの右腕がMVSをセイバーに向かって振り下ろす、セイバーは大剣を頭上に構えランスロットの一撃を受け止める

受け止められたMVSを持った右腕に涼月の豪腕が迫るがランスロットは後ろに飛び跳ねてそれを回避する

攻撃を避けられた涼月はそのまま攻撃対象をセイバーに移行させる

セイバーは向かって来る涼月の右腕に対し決して直撃しないように注意しながら、大剣を振り下ろす

サポートに入ろうとした、明日菜を足止めするためにライダーが槍を構える

前回の戦闘から明日菜のハマノツルギは自分の槍を容易く両断する何かしらの力があることがわかっていたランサーはハマノツルギに当たらないように注意して槍を多用せずに格闘戦主体で闘い始めた

どちらも先にやはりサーヴァントとの地力の差によってマスターの方がピンチに陥りはしたが、ランスロットのヴァリスが四人に襲いかかり四散したアスファルトに紛れこみ、自分のサーヴァントと合流を果たした

ライダーはセイバーに向けて更にヴァリスを連射しながら、イヴを左腕で回収する

バーサーカーとの闘いに見切りをつけたハヤテが明日菜へと迫り、デルフリンガーによる斬撃を見舞う

明日菜のハマノツルギの使い方は良くも悪くも大味であり、ガンダールヴによって洗練されたハヤテの斬撃は容赦なく明日菜の身体に傷つけた

ハヤテの後ろからセイバーの斬撃が入り、ハヤテはサイドステップでかわすが明日菜への攻撃は諦めざるをえなかった

ガンダールヴによって高められたハヤテの剣術はセイバーと互角に渡り合い火花を散らしながら何度も剣をぶつけてあった

ランサーと涼月はライダーとイヴに狙いを絞り、得意の突撃を敢行する

ライダーは一心不乱に突撃する涼月達に向けてヴァリスを放つが、一歩も怯まずに突撃を敢行する姿はまさに猪突猛進を体現していた

ランサーと涼月は言葉をかわすことなく別れてそれぞれランスロットの両足に突撃した

ランサーの方にはイヴが足止めに入り、ランスロットへの接近を止める

ライダーはランスロットのMVSを真つ直ぐに突撃する涼月に振り下ろす、涼月はギリギリになって僅かに半身をずらし左腕を切り落とされながらもランスロットの足元に食らいつく、ランスロットの腕が届かず死角となる足元に潜り込んだ涼月は倒れ込むように左足

のランドスピナーに右腕を叩きつけ破壊し、ランスロットの機動力を減衰させる

敵が一人になり魔力を一気に解放したバーサーカーが自分の立っているアスファルトを溶かすほどの炎を立ち上らせていた、いつきは四方八方から炎に襲われ徐々に身動きがとれなくなっていた

「タイランレイブ」

バーサーカーは炎を纏って突進しいつきに迫る

いつきは右手にクトウグアを装備しマガジンに込められた七発全ての爆炎の魔弾を打ち込むが、バーサーカーの突進は止まることなくいつきの体に直撃した、初めて直撃したバーサーカーの攻撃はいつきを紙屑のように吹き飛ばしアスファルトに三回バウンドした後ビルの壁にぶつかりやっと止まった

バーサーカーはゆっくりとした足取りでいつきの前に歩くと喋り始めた

「デメエの宝具は俺には効かねえ。わかったらさっさとサーヴァントと別れやがれ」

バーサーカーはクトウグアの魔弾が命中したにもかかわらず大した怪我をしていなかった、いつきは壁に手についてゆっくりと立ち上がるそしてアサシンが静に笑う

「フフフフ、逆に聞こうバーサーカー汝の力とはその程度なのか？」

「アアア!？」

「じゃから、言うておろう、十分の一の力も使っておらぬ妾等に苦戦するこの程度の力が汝の全力なのか？」

「下らねえ、ハツタリなら死んでからにしな」

「ハツタリかどうかは妾等の宝具を見てからにするがよい」

いつきの妖精眼と左手の令呪が輝く

「アサシン、社長命令だ！宝具を使え

行くぞアサシン」

「応」

いつきを中心に展開される巨大な魔法陣と周囲を渦巻く凄まじい魔力がバーサーカーに先ほどの台詞がハツタリではないことを伝える

「憎悪の空より来たりて」

祈るように歌い上げるいつき声が

「正しき怒りを胸に」

鮮烈にして清浄なるアサシンの詠唱が

「我らは、魔を絶つ剣を執る！」

最弱にして無敵の剣を召喚する聖句を詠み上げる時

「「汝、無垢なる刃、デモンベイン」」

人が造りし魔を絶つ剣、再弱無敵の鬼械神^{デウス・マキナ}が学園都市に降臨する

第???話 EVOLUTION

膨大な魔力の奔流とともに顕現したのは、両足首から脚部全面を覆うように突き出た時空間歪曲シールドクリティアス、ティマイオスが特徴的な全長数十mの鋼の巨神

「冗談だろ」

茫然自失となった涼月がポツリとつぶやいた、先ほどまで死闘を繰り広げていたランスロットが小人にしか見えないほど巨大な体躯そしてなによりまだ戦闘を行ったわけでもないのに溢れ出る膨大な魔力が圧倒的な戦力を容易く想像させる

「ふむ、いつきの妖精眼のおかげか魔術方式の制御は最低限でも大丈夫だな、獅子の心臓（デモンベインの魔導機関、搭乗者の魔力によって出力が変わる）の出力はやはり九郎のようにはいかんが十分じゃ、行けるぞいつき」

「わかった、行くぞアサシン」

デモンベインを見上げているバーサーカーに文字通り鉄拳を振り下ろす、拳を地面に振り下ろすというただそれだけの行為が歴戦の戦士であるサーヴァントを震え上がらせる

しかし、バーサーカーはその圧倒的な質量と威力の前に一步も退くことなく迫り来る鉄拳に渾身のアッパーを叩き込む

莫大なエネルギーを伴った二つの拳がぶつかりあうとエネルギーの一部が衝撃波となり周囲の建物のガラスが一斉に割れバーサーカー

が立っていた地点を中心にアスファルトに巨大な蜘蛛の巣状の亀裂が入る

「さっきまでのが十分の一以下つてのはハッターじゃねえな」

バーサーカーは完全に止まったデモンベインの拳を蹴り上げる

そして

「ウオオオオオ！」

ランサーは蹴り上げられたデモンベインの右腕をを駆け上がり頭部に槍を突き出す

「なっ!?!」

ランサーの槍はデモンベイン頭部に直撃したものの多重の魔術的防御が施されたヒイロカネの装甲の前に甲高い金属音を響かせるだけで傷一つつけることができなかった

その後、ランサーはデモンベインの頭部バルカンに追われる形で一旦後退を余儀なくされる

「セイバー」

デモンベインに気を取られ警戒を怠っていたセイバーに明日菜の声が響き、奇襲じみた形でハヤテがデルフリンガーを振るう

「デカブツに気を取られている場合ですか？あなたの相手は僕ですよ」

「……………」

セイバーは無言でハヤテに殺気を放つと腰ために大剣を構えハヤテに剣を振り上げる、ハヤテはデルフリンガーを斜めに構えて受け流すと今度は横に薙ぐように大剣を振るうハヤテも慌てずにデルフリンガーを縦に構えてしっかりと受け止める

その後何合かお互いの武器をぶつけあった後、鏖競り合いになったが、すぐさま体制を崩しながらも無理やりセイバーは左に飛び退くセイバーの不可解な行動に疑問に思う暇すらなくセイバーの後ろから明日菜が飛び蹴りを浴びせてきた

突然の攻撃に驚きながら腕をクロスさせてガードするがあまりの衝撃に弾き飛ばされる

「よっしゃーさっきの借りは返すわよ」

明日菜はセイバーと並んでハマノツルギを構える、ハヤテも若干痺れる腕の調子確かめながらデルフリンガーを強く握る

その頃、左足のランドスピナーが壊れたランスロットでの地上戦は不利と判断したライダーは空中戦に切り替えて小回りをきかせながらデモンベインを牽制していた

「これなら」

デモンベインの後ろに回り込んだ後、ランスロットの武装の中で最

大火力をほこるハドロンブラスターを背中に向けて放つ

「小賢しい」

「アサシン、バルザイの円月刀」

いつきの声とともにデモンベインの右手にいつきが使っていた時とは比べものにならぬほど大きなバルザイの円月刀が握られる

それを振り向きざまに振り抜きハドロンブラスターの直射を相殺する

「イタクア」

デモンベインの左手にリボルバー式拳銃が握られる、六回の発砲音とともに六発の風の魔弾がランスロットに向けて発射される。

ライダーは急旋回してかわそうとするが、一つ一つが暴風の力を宿した魔弾は魔力による精密誘導によってランスロットを追尾し続ける

「くっ」

ライダーは急旋回や急加速を繰り返しながらヴァリスを発射し撃ち落とす

しかし一発だけ撃ち落とせずにランスロットに迫る

それをライダーはランスロットの右足にブレイズルミナスを展開して蹴り落とすが、ランスロットの右足が膝から折れてしまう

いつきがランスロットに集中していた時、涼月とランサーはデモンベインの足下でバーサーカー達と対峙していた

「ウオオオオオ！」

涼月とランサーがタイミングを合わせて連続攻撃を仕掛けるも、個人で戦うことが多かったバーサーカーと智代は、多人数戦に慣れており涼月とランサーを難なくあしらっていた

「喰らえ」

バーサーカーの後ろからセイバーが、智代の後ろから明日菜が奇襲を仕掛ける

「うぜえ」

バーサーカーは封炎剣を振るい炎の壁を作り出しセイバーと明日菜を攻撃するが、明日菜の蹴りが炎の壁に接触した瞬間に炎の壁が吹き消される

バーサーカーは自分の攻撃がかき消され一瞬動揺してしまう、そのせいかいつものように回避することなく明日菜の蹴りを左腕で受け止め更に涼月の拳が迫り、それを右腕で受け止めるが、流石のバーサーカーであっても耐えきれずに後ろに吹き飛ばされる
そこにランサーとセイバーが同時に攻撃を仕掛ける

「悪いが、私のことを忘れてないか？」

バーサーカーに集中し過ぎたランサーとセイバーの背中に智代の鋭い蹴りが突き刺さる

「ぐっ」

蹴りを受けたランサーとセイバーは後退し自分のマスターと合流する

「ってか、お前らキャスターのマスターと戦ってたんじゃないのかよ？」

「アイツなら、二対一になったら直ぐに逃げ出したわよ」

「そーかよ、んでバーサーカー潰すのに関しては協同戦線ってわけでもいいんだよな」

「まーね、アイツ化け物だからね手加減なしよ」

セイバーはリミットを解放し、ランサーもまた戦極ドライブを発動させる

「はっ、おもしれえ、誰を潰すって」

バーサーカーは更に魔力を込め炎の温度を上げる

バーサーカーとセイバーそしてランサーが睨み合う、前のように硬直状態になるかと思われたがバーサーカーを狙ったデモンベインのバルザイの円月刀の一撃が加速度的に状況を変化させる

バーサーカーは馬鹿げた質量とそれに伴った威力を持ったデモンベインの一撃を封炎剣で受け止める

「邪魔してんじゃねー」

バーサーカーが受け止めているデモンベインの右腕に涼月とランサーの拳が叩きつけられる

二人の攻撃によって力が抜けた右腕を跳ね上げて魔力を練り上げる

「バンディッドリヴォルヴァー」

バーサーカーの炎を纏った蹴りがデモンベインの胸部に命中する

「デモンベインを舐めるな！」

胸部から爆煙が吹き出し体制が崩れるも空中で身動きが一切とれないバーサーカーにバルザイの円月刀を叩きつける

バーサーカーは固い道路で二、三度バウンドしてやっと足をつけることができた

「んっの、野郎」

バーサーカーは額から血を流し膝をついて立ち上がる

『脅威の増大による高度兵装の許可を要請。戦時状況下とみなし実行を承認。アクセス権限を拡大——』

涼月の顎に仕込まれた通信機に骨伝導を利用した無機質な連絡が届けられる、待ちわびた涼月の口元に獲物を狩る狼のような獰猛な笑みが浮かび上がる、そして

『特甲レベル3の転送を開始します』

涼月の身体を幾何学模様のエメラルド光が包み込む、光が消えると先ほどまでの制圧用のレベル1の特甲よりも攻撃的なフォルムの軍用のレベル3の特甲が装着された

「行くぜーランサーついて来いや」

「御意」

真紅の閃光となったランサーがバーサーカーに瞬く間肉迫すると同時に突く、ひたすらに突く足を止め呼吸すらせずに後から来る自分のマスターに全てを託しバーサーカーを釘付けにする

漆黒の特甲を纏った涼月もまたランサーの信頼に応える、ランサーの連撃により釘付けにされたバーサーカーに渾身の一撃を叩き込む

「ハアアア！」

レベル3となつて強化された超振動型雷撃器が唸りをあげバーサーカーの腹にめり込む、流石のバーサーカーでさえも問答無用で吹き飛ばす

吹き飛ばされたバーサーカーは腹を押さえながら殴らった涼月を睨みつける

「デメエ！ぶっこ」

バーサーカーの目が自分に向かって飛び蹴りを放つデモンベインを捉える

「アトランティス・ストライク」

脚部の時空歪曲シールド、ティマイオス、クリティアスによって時空間を歪曲し生じた反発エネルギーを蹴りで叩き込む近接粉碎呪法

その圧倒的なエネルギーの前に一瞬の抵抗すらできずにバーサーカーが押し潰される

「ふむ、手負いの状態でアトランティス・ストライクの直撃を受けたのじゃ流石に」

「ドラゴンインストール」

2月11日 ライトニング（前書き）

仕事が一段落ついたので投稿を再開します、今回は短めですがよろしく願います

後書きにチェイサーのステータスを載せるのでよろしければご覧下さい

2月11日 ライトニング

時間を少しさかのぼる、サーヴァント達が歪な六角形を作り出してにらみ合っていた頃、当麻はアーチャーが戦っているビルにたどり着いていた

「ハアハア、待つてろよアーチャー直ぐに行くからな」

当麻は息を整えながらエレベーターに乗り込み、アーチャーのいる屋上を目指した

そして、屋上では白いバリアジャケットを着たアーチャーと同じく黒いバリアジャケットを着たチェイサーが死闘を繰り広げていた

「話を聞いてってばー」

アーチャーのレイジングハートから砲撃魔法が放たれるが、チェイサーは自慢のスピードを駆使して回避すると同時に自身のデバイス、バルディシュの鎌型のハーケンフォームに変形させ距離を詰める

「させないよ」

アーチャーの周りに桜色の魔力弾が多数浮かび上がると接近する、チェイサーを取り囲み行く手を遮った、それをチェイサーは焦ることなく防御、あるいは回避すると、その隙を突いてアーチャーのバインドがチェイサーを縛り上げようとするが、チェイサーはその攻撃を見透かしたように高速で下降して回避しアーチャーの左下から襲いかかる

「左足、いただきます」

ガギンツ、派手な音が鳴り響く、アーチャーは無理矢理の加速で強固なバリアを張ったまま振り切られる前のバルディッシュにぶつかることでバリアの破壊を防ぐ、更にその衝撃で若干ふらつくチェイサーからまた距離をとる

「フエイトちゃん、なんでこんな闇討ちみたいなことしてるの？」

「……………」

「なんで答えてくれないの？」

「……………」

「…わかった、なら私らしいやり方でお話かせてもらうんだから」

アーチャーの空間を埋め尽くすような莫大な魔力が更にカートリッジシステムによりブーストされ、桜色のミッドチルダ式魔法独特の円形の魔法陣を展開する

「アクセルシューター」

アーチャーの声とともにレイジングハートは砲撃重視のバスターモードに変形し収束された魔力はアーチャーの周りに魔力弾を大量に作り出し、攻撃準備を整える

「シュート」

それに対抗するべく、チェイサーもまたアーチャーと同じ様にカートリッジシステムを起動させ、バルディシュを汎用型のアサルトフォームに戻しミッドチルダ式魔法の魔法陣を展開する

「フォトンランサーファランクスシフト」

チェイサーの周囲に金色のプラズマ球が大量に浮かぶ。チェイサーも攻撃準備を整える

「ファイア」

大量の金色と桜色の弾丸がアーチャーとチェイサーの間で交錯し合う。

両者ともに弾幕を張り相手の魔力弾を撃ち落としあい連続的な小規模の爆発がおきる。

初めは均衡を保っていた撃ち合いは徐々にチェイサーが圧し始めるが、アーチャーは焦ることなくレイジングハートに魔力を込め先端部に収束させる

「エクセリオンバスター」

構えたレイジングハートから発射される極太の桜色の光、アーチャーの砲撃魔法がチェイサーの魔法弾を呑み込みチェイサーに迫る。チェイサーはそれに対抗するべくまだ撃っていない魔力弾を一つに纏め上げ発射する、チェイサーの渾身の魔力弾は数瞬の抵抗の残して消し飛ばされる。

だが、そのおかげで稼いだ数瞬の時間にチェイサーはバルディシュを大剣型のザンバーフォームに変形させカートリッジを一発ロードする。

チェイサーは大上段からバルディシュをアーチャーの砲撃魔法に向

かつて振り下ろす、アーチャーもまたカートリッジをロードし魔力を更に込め迎え撃つ

今までで一番派手な爆発音がビルの中に響くのを当麻はエレベーターの中で聞いた

「大丈夫だろうな、アーチャーの奴」

当麻は心配になりエレベーターの中をうろろしていたが、エレベーターが最上階に着いたことを伝えるチーンという音で少し平常心を取り戻した、そしてその直後にエレベーターの扉が開く

「動かないで下さいと、ミサカはアナタに忠告します」

エレベーターの扉が開くと、右手に拳銃を構え額にゴツいゴーグルをひっつけた常盤台中学校の制服を着た少女が立っていた

「み……御坂……妹」

当麻は知り合いの少女に銃を向けられ動揺しながらも相手の名前を喉の奥からやっとなり出した

「はい。詳しく言うとミサカはミサカの中でも最もアナタと懇意にしているミサカ10032号ですと、ミサカはアナタから買って貰ったペンダントを見せながら懇切丁寧に説明します」

「……そんなこと聞いてねえよ、何してんだよ、早くアーチャーの所にいかねえといけないんだよ」

御坂妹は右手で当麻に銃を向けたまま、左手の甲を見せるそこには
聖杯戦争のマスターの証令呪が刻まれていた

「私がチエイサーのマスターです」

2月11日 ライトニング（後書き）

クラス チェイサー

マスター 御坂妹

真名 フェイト・テストロッサ・ハラオウン

性別 女性

宝具 バルディッシュ・アサルト

筋力 E 魔力 A

耐久 D 幸運 D

敏捷 B 宝具 B

保有スキル

単独行動：A

マスターの魔力による補助なしで行動することができる

魔力変換資質（雷）：B

魔力による攻撃に雷属性を追加することができる

マルチタスク：A

複数の思考を同時に処理する、ミッドチルダ式魔法に必須のスキル
Aの場合数十近い分割思考が可能

リンカーコア：B

ミッドチルダ式またはベルカ式魔法を使用するために必要不可欠な
スキルというか機関で空気中の魔力素を体に魔力として取り込むこ
とができる

Bランクのリンカーコアの魔力量は十分に一流の魔導師レベルの魔

力である

第24回 背徳の炎

バーサーカーを踏み潰していたデモンベインの右足が弾かれたように跳ね上がる、そして次の瞬間には天を衝くような火柱が上がる、そこから今までとは比べものにならない程の魔力を体中に漲らせたバーサーカーが現れる

「あれがこの前観測された、MPBのマスターサーバー レイが私に勝てないって報告してきた、バーサーカーの本気がよ……………化け物だな」

吐き捨てるように涼月がポツリと呟くが、彼女の手は震えていた

「まさか…臆したでござるか？」

僅かに震える涼月の手に気がついたランサーが声をかける

「はっ、冗談だろ…………燃えてきたよ」

涼月は僅かに震える拳を強く握り締め、自分に言い聞かせるように強い言葉を口にする

「そうでござったか、ならばこの幸村の乾坤一擲の一撃にて彼の魔人の首を取って見せましょう」

ランサーの身体から溢れ出す闘志がランサーに更なる力を与える

「真田源二郎幸村！推して参る」

空からバーサーカーの異常なまでの魔力を感知したライダーは一度目を閉じて神経を尖らせる

「マスター」

「どうしました？」

「僕も全力でいきます。ですからパイロットブロックから降りてもられますか？」

それはつまりはこの激戦地で自分一人でやり過ごさなければいけないことを意味していた、イヴは一瞬だけ思案した後に返事をする

「構いません、その代わり負けは許しません」

「イエス、マイロード」

ランスロットが地上に下りると同時にパイロットブロックを開けるとイヴがそこから飛び降りる。

ライダーはイヴが降りたのを確認すると自身の真なる力を呼び覚ます

「真名解放、ランスロット・アルビオン」

そしてかつて最強と呼ばれた騎士、ナイトオブゼロが顕現する

「この魔力、九郎と同等かそれ以上じゃな」

「どうするアサシン、あれほどの相手なら一度退くのも手ではあるぞ」

「フツ、馬鹿を言わないつき汝がいて妾がいるそしてデモンベインがある、負ける要素もなければ退く道理などあるわけがなかるう」

「成る程な、じゃあ行くぞアサシン」

デモンベインの手に先程までいつきが使っていたバルザイの円月刀が巨大化した状態で握られる

（さて、どのタイミングでキャスターの虚無を使うかが問題ですね）

チラリとバーサーカーの方を見ると地獄の業火を身に纏ったような赤い魔人がそこにいた

「奇襲とはいえ、前々回はよくもまああれに蹴りを入れられましたね、同じ手が何度も通用するような相手ではなさそうだし……………」

ハヤテは考えを纏めさつそく行動に出る

ハヤテが導き出した答えは激戦地のだ真ん中バーサーカーとなるべく一対一にならないある意味一番安全で危険な場所に飛び込んだ

（強い流石は坂上生徒会長、私も脚技には自身があったのに）

明日菜はバーサーカーがドラゴンインストールを使う直前まで智代

と交戦していたのだが、格闘戦では終始圧倒されてしまっていた
現在はセイバーと合流し次の戦闘に備えていた

「……怖くはないか？」

セイバーが明日菜に小さく声をかける

「こ、怖くなんか」

「怖いならば言え、それは恥じゃない」

明日菜は言いかけた言葉を飲み込み素直な言葉を口にする

「怖いわよ、でもね私はあんたの隣りで戦うことを決めたのよ……
だからあんな奴らに負けてあげないんだから」

明日菜の赤裸々な言葉を聞いたセイバーは小さく笑い、呟くように
囁いた

「恐れを知らずに戦うのはただの馬鹿だが……恐れを知り震えなが
らも戦えるならそれは勇氣だ」

セイバーはそれから喋ろうとはせずに大剣を構える、その隣りで明
日菜もまた大剣状態のハマノツルギを構える

「はっ、ドラゴンインスツールを見て少しはビビるかと思ったら、
どいつもこいつもやる気満々じゃねえか」

「当たり前だ、彼等とて英雄と呼ばれる存在なのだからな」

図らずもバーサーカーのドラゴンインストールによって仕切り直された戦闘はバーサーカーの一撃から再び開始される

「まずはデメエからだデカブツ！ヴォルカニックヴァイパー」

燃え盛る炎を巻き上げながら振り上げられたバーサーカーの封炎剣はガードしたデモンベインの装甲ごと削り取る

「ぬう、なんというパワーじゃ、いつき」

「応」

アサシンの言葉にいつきは黙って頷く

飛び上がってから空きのバーサーカーに右手に装備したバルザイの円月刀を振り下ろすが、

バーサーカーは封炎剣で受け止め空中で受け身を取り無傷で着地する

バーサーカーの後方から全員を射程圏に捉えたライダーがランスロット・アルビオンが姿を現す

先程までのランスロット・コンクエスターとは違い全体的に細くしなやかなボディと緑色の六枚のエナジーウイング、そして二連装になったスーパervァリスを両手に装備した、最強のナイトメアフレームである

大きく広げられたランスロットのエナジーウイングから刃状の粒子がばらまかれる、ナイトメアフレーム一個中隊を殲滅させるほどの

威力を持った射撃にも関わらず全員が己の武器により射撃を弾き捌ききる

更にバーサーカーに向けてハドロンモードに移行させたスーパーヴァリスを打ち込む

「ブリキ人形の本気ってどこか？……………くだらねえ！ガンフレイム」
地面に突き刺した封炎剣から吹き出した火炎はランスロットの砲撃を真っ向から相殺する

二人の攻撃がぶつかり合い爆炎が上がる中それを潜り抜けランサーがバーサーカーに迫る

「大車輪」

円を描くように大きく振られたランサーの槍をバーサーカーは封炎剣で防ぐが、勢いに負け地面を少し滑る

「上等じゃねえか、この熱血バカ」

バーサーカーもまた赤い炎を身に纏う、二色の赤が二人の間で交錯しあう

その二つの赤を切り離すようにセイバーと明日菜の斬撃が飛ぶ、先に出た明日菜の斬撃は殺傷能力こそ低いものの燃え上がっていた二人の炎をかき消した。そしてそこにセイバーの斬撃が入る、エメラルドグリーンの斬撃はバーサーカーとランサーに襲いかかるが、ランサーは持ち前のスピードで見事に回避してみせ、バーサーカーは斬撃そのものを殴りつけて防いでみせる

「いいです」

頃合いを見計らっていたハヤテは緊急回避で体制の崩れたランサーにデルフリンガーを振り下ろそうとするが

「させつかよ」

ランサーを守るべく涼月はランサーとハヤテの間に滑り込む

「オラ、来いや童貞野郎ー！私が相手だ」

涼月の拳が振り下ろされる度にハヤテの額に嫌な汗が浮かぶ

「くっ、女の子がそんな下品な言葉を使う物ではありません」

「まったくです」

右腕から一對の小さな翼を生やしたイヴがそれから二人にめがけて羽を発射する、発射された羽は何でできているのかアスファルトの地面を削り取る、横からの突然の攻撃に二人は驚くが涼月は拳でハヤテはデルフリンガーで捌きながら後退する

「戦闘中に叫ばないで下さい鬱陶しい」

「んだと、糞チビ」

一触即発の空気の中、涼月の後方にてデモンベインの足音が鳴り響く

「ちつ、デカブツが……なあ、糞チビに青髪執事、とりあえずあのデカブツ潰さねえか？」

イヴとハヤテはそれぞれ今は一番の障害をデモンベインであると認め、涼月の提案に頷く

「下品なアナタと一緒に戦うのはいささか不満ですけど戦ってあげます」

「良いですよ、じゃあ僕から行かせてもらいます」

先頭をきろうとするハヤテを押しつけて涼月が走り出す

「馬鹿、先頭は私だよ、行くぜテメエ等^{アル・シュトゥルム}全頭出撃だ！！」

涼月を先頭にハヤテ、イヴが続いてデモンベインに突撃する

ハヤテ達がデモンベインに突撃する十数分前、当麻と御坂妹は向かいあっていた

「もう一度だけ言います。そのままエレベーターで帰って下さいと御坂はアナタに再度勧告します」

「何言っただよ、早くそこを退けよ御坂妹！あいつがアーチャーが待っただよ」

当麻の叫びに動ずることなく、御坂妹は淡々と銃弾を当麻の足下に一発撃ち込む

「次は本当に打ち抜きますと御坂は殺気を込めてアナタに訴えます」

「本気なんだな」

「本気ですと御坂はアナタに警告します」

御坂妹の言葉に動揺しながらも当麻もまた自分の決意を口にする

「アーチャーが戦ってただよ、俺一人で逃げるわけに行くかよ」

「そうですか、なら」

御坂妹が何かを言い終える前に当麻は射線から外れるように身をかがめて御坂妹の下腹辺りにタツクルした

御坂妹は突然の行動にモロにタツクルを食らってしまったが右手に持った銃を落とさずに体制を整えようとする

当麻は御坂妹が銃を構え直す前に身体をかがめたまま御坂妹の足をとって転ばせると、そのまま上に乗り御坂妹の右手を押さえつけた

「これで終わりだ、諦める御坂妹」

「そうですね。と御坂は諦めの混じったため息と共に降参します」

銃を向けるほど止めたかった割にあっさりと降参する御坂妹を訝しみながらも先を急ぐために立ち上がった

「じゃあ俺は行くぞ」

そう言うと当麻は屋上に続く階段に歩き出した

「この聖杯戦争の先には絶望しかありませんと御坂はこれからの未来を暗示します」

「例えそうでも、俺は俺にできることをするだけだ」

「では最後にと御坂は前置きを置いて説明します」

「何だよ」

「チエイサーは今私の令呪で催眠状態にあります、したがってあなたの右手で彼女に触れられれば」

「正気に戻るってことか」

「はいと御坂は多少拗ねた返答します」

それを聞いた当麻は決意を新たに屋上へ向かった。

「あなたがこの聖杯戦争の真実を知ってしまった時、どういった選択をするのでしょうかと御坂は確実に来るであろう未来に憂慮します」

2月11日？ 幻想殺し

屋上にたどり着いた当麻が見たものは、星空をバックにアーチャーの桜色の魔力弾が宙を舞い、それら全てを避け時に金色の魔力刃で撃ち落としながらアーチャーを追いかけるチエイサー、その光景は当麻が一瞬見とれてしまうほどに綺麗であつた。

しかし、綺麗な見た目とは裏腹にミッドチルダ式魔法を極めたと言つても過言ではない二人の戦いは熾烈を極めていた

アーチャーが強大な威力の砲撃魔法を放てばチエイサーはそれを高速で回避しアーチャーの後ろに回り込み電撃を纏つた魔力弾を撃ち込むが、アーチャーの強固なシールドが直撃を許さない、そうした攻防の中アーチャーとチエイサーの視界の端に屋上の扉を開けた当麻が写つた

「マスター！？」

アーチャーが驚きの声を上げ当麻に近づく

「何しに来たんですか？」

アーチャーはいつになく強い言葉で当麻を問い詰める

「何しに来たつて、お前が一人で飛び出すから、追つてきたんだろが」

「そんなこと――」

「危ない」

チェイサーがアーチャーの後ろから撃ち込んだ魔力弾を見た当麻はアーチャーの体を左腕で払い除けて右手を突き出して金色の魔力弾をかき消す

「フェイトちゃん！」

素早く体制を立て直したアーチャーがチェイサーに向けて魔力弾を放つが、苦し紛れで放たれた魔力弾はチェイサーによって一つ残らず回避される

「くっ」

回避したチェイサーを追いかけなるべく飛行魔法を発動させようとするアーチャーの右手を当麻の左手に掴まれる

「放してよ、マスター」

「いや、放さない」

「放してよ……私が……フェイトちゃんを倒す」

「何やってんだよ。アイツお前の知り合いなんだろ」

「親友だよ……だから……だから、私が倒さない」と

「……………」

「フェイトちゃんが……………あんなのフェイトちゃんじゃない……だか

「私がフェイトちゃんを倒す」

アーチャーが当麻に訴えるが、当麻は左手を放そうとはしなかった
「なんでだよ…なんでお前はいつも一人でなんとかしようとするんだよ！」

「……………」

アーチャーは何も答えずに当麻を見つめ続ける

「誰かに助けを求めろよ！変わっちまった親友を見るのが辛いなら弱音を吐けよ！」

「でも……私……」

「お前は自分のマスター信頼してるよ、たまには全部俺に任せてみるよ」

「で、でもマスター一人じゃサーヴァントには勝てるわけが……」

「なら」

当麻はアーチャーの右手の放し、アーチャーの前に出る

「人間がサーヴァントに勝てないっていう幻想を」

そして当麻は新たな決意と共に月夜に浮かぶチェイサーを真っ直ぐ見据え右手を突き出す

「まずはその幻想をぶち殺す」

「無駄話は終わりましたか？

ソニックムーヴ」

チエイサーは一瞬で当麻の後ろに回り込みハーケンフォームに変形させたバルディッシュの刃で当麻の首を刈り取るべく振り下ろされる、当麻は前に倒れ込むようにしてチエイサーの鎌から逃れるが、体制が崩れてしまう

チエイサーはその隙を逃すべくもなく素早く多数の魔力弾を生成し容赦なく撃ち出す、当麻はそのまま屋上の床を転がりながら回避し当たりそうな魔力弾だけを右手で弾く

「マスター」

アーチャーの悲痛な声が響き当麻を援護をするためにレイジングハートに魔力をチャージするが、それを遮るように当麻の声が響く

「来んな」

最後の魔力弾を右手でかき消し素早く立ち上がりながら左手でアーチャーを制する

「お前はそこで見てろ、アイツは俺が片づける」

「で…でも」

「安心しろ、俺は必ず勝つだから……お前はそこでただ見てればいいんだよ」

「ソニックムーヴ」

チエイサーは当麻の目に写らないほどのスピードで当麻の背後に回り込み、バルディシュを横薙ぎに振るう、間一髪のタイミングでチエイサーの強襲を正面にジャンプしてかわすが当麻の続いて放たれたチエイサーの蹴りが当麻の脇腹に突き刺さる

「先ほどの動きは見事でした、一発も当たらないとは流石に驚きました。

しかし、近距離戦でしかも魔法を私のバックアップに回した場合、つまり格闘戦においてあなたの右手は無力なのです」

よろめく当麻に次々とチエイサーの拳や脚が打ち込まれる、もちろんチエイサーの細い身体から放たれる攻撃は軽く当麻自身が防御を固めている限り致命傷を受けることはなさそうだった、しかしだからと言ってこれだけ何度も攻撃を受ければ防御していても身体中が腫れ上がり足下がフラつき始めていた。

当麻の足がフラついているのに気がついたチエイサーは一気に勝負を決めるべく右腕を今までよりも大きく振りかぶって渾身の右ストレートを放った

（…ここだ）

大振りになったチェイサーの攻撃に合わせて、ボロボロの身体に残った僅かな力を総動員させる。

当麻は顔面に迫るチェイサーの拳を頭を僅かに左に動かし回避する。頬を僅かに掠めただけにとどめたチェイサーの右ストレートに対してクロスカウンター気味にチェイサーの顔面を掛けて右手を突き出した

（勝った）

だが、当麻の右手がチェイサーに到達する前にチェイサーの左足が当麻の足を刈り取られた。

当麻は一瞬の浮遊感の後背中から床に落ちた、当麻は自分の今状況すらも解らず背中中の痛みに悶えた

（な、なにが）

落ちた際に頭もぶつけたのか頭がボツとして考えがまとまらない当麻をよそに無傷のチェイサーは床でうずくまる当麻を思いつきり右足で蹴り上げる

「ゲホッ」

蹴り上げられた当麻にチェイサーの容赦ない一撃が襲いかかる

「サンダーレイジー」

即興で編まれたチェイサーの砲撃魔法が当麻を跳ね飛ばす、ピンポン球のように吹き飛ばされた当麻は屋上に設置された落下防止用のフェンスに激突し床に墜落した

「マスター」

当麻はアーチャーの悲鳴のような声によって飛びかけていた意識を取り戻す

（やべえ、意識が飛びかけた）

チエイサーの砲撃魔法に付加された電撃により立とうとする足が痺れてしまい、立つのがやつとな当麻だったが目だけは真っ直ぐにチエイサーを見据えていた

（速い、予備動作もなしに目で追えないような高速で移動しやがる、でも………負けるわけにはいけないんだよ）

チエイサーは今度こそ当麻にトドメをさすためにバルディッシュをザンバーフォームに変形させる。

「ソニックムーヴ」

そして高速移動を開始し当麻の視界から消える

（カウンター自体は間違っていないんだ、問題はタイミング、攻めてくるのは……）

当麻は素早く身体を反転させ背後から振り下ろされるバルディッシュの大剣状態の魔力刃を破砕する

「なっ！」

「ワンパターンなんだよ」

この戦いで初めてチエイサーが表情を変える、そして、そのまま滑り込むように当麻の右手がチエイサーの顔にせまる、チエイサーも咄嗟にシールドを展開するが、当麻の右手が触れた瞬間にまるで薄氷のように簡単に砕け散る。

当麻の右手を遮る物がなくなる、そしてチエイサーの顔面をとらえた、それは殴るといふよりも触ると言った方が正しい一撃だった、それでも幻想殺しは当麻の右手はチエイサーを令呪から解き放ったチエイサーの目に今まで感じられなかった生気が宿るのを確認した当麻は崩れ落ちるように床に倒れ込み意識を手放した

第26話 サークヴァントに命じる

当麻とチェイサーの決着がついたところ、大通りでは巨大な鬼械神デモンベインとランサー、涼月、ライダー、イヴそしてハヤテの5人が格闘していた。

そしてそこから少し離れた場所ではバーサーカーと智代の2人そしてセイバーと明日菜の2人は二対二の闘いに身を投じていた。

「ちっ、どんだけ堅てえんだよ、このデカブツ」

涼月は吐き捨てるように愚痴りながらデモンベインの足首に当たる部分に拳を突き立てるが、拳に内蔵された超振動型雷撃器が甲高い音を奏でるだけでヒビやヘコミができる様子はなかった

続いて遠距離からランスロットのスーパーヴァリスが撃ち込まれる、ダメージにはならないが牽制にはなったようでランサーとハヤテが涼月が先ほど攻撃した場所に攻撃を集中させるしかし

「だから、無駄だと言っておろう」

デモンベインが僅かに足を動かすだけで涼月の身体が弾かれた様に吹き飛ばされる

「まったく、アナタは無鉄砲にもほどがあります」

吹き飛ばされた涼月を天使のような翼を生やしたイヴが空中でキャッチして、ゆっくりと地面に下ろす

「悪いな、チビスケ、助かった」

「……………」

イヴは涼月の物言いに多少苛立ちを覚えながらも目の前の脅威に目を向ける、今もなおライダーとランサーそしてハヤテの3人を同時に相手にしながらも遅れをとっていなかった

「ちっ、このままギリ貧だな、一発デカいのをぶち込まねーと埒があかねー」

イヴは相変わらず口の悪い涼月に辟易しながらもその言葉に一理あると感じた

「（伊達に小隊長をやってるわけではありませんか）聴こえていますねライダー」

「イエス・マイロード」

ライダーは空中でランスロットを踊らせながら外部スピーカーでイヴの声を拾い耳を澄ませる

「敵の一部に攻撃を集中させて装甲を破りなさい」

イヴの左手に刻まれた令呪が輝きライダーに絶対命令となり更なる力を与える

「イエス・マイロード」

「させるか！食らえ」

いつきによつて操られるデモンベインはその巨体とは裏腹に柔軟な体重移動により見事な崩拳が放たれる、その威力は踏み込みの震脚だけでも易々とアスファルト舗装された道路を踏み砕きクレーターを作り出し、その副産物に過ぎない衝撃波だけで地上にいたランサー達を吹き飛ばした。

ランスロットの全長よりも大きなデモンベインの拳は尋常ならざるスピードで迫るが、ライダーのスキル、ギアスの呪いにより限界を超えた集中力は令呪の力により更なる高みに登り詰めた集中力は既にデモンベインの動きが比喩表現ではなく止まって見えた、ギリギリまで引きつけた拳を紙一重で回避すると伸びきった右腕をさかのぼり、最も装甲が薄いであろう肩の関節部に突進する。

ランスロットの両手にMVSを持ち切っ先を揃えるように構える、最大まで加速したランスロットはMVSを関節部に差し込む、金属の削る甲高い音と激しい火花が飛び散るが、装甲に阻まれなかなか刺さらない

「うおおおおお！」

ライダーの裂帛の声と共にランスロットの出力を更に上げる、それにより徐々に刃先がめり込むが、やがてそれも止まってしまう

「まだだ！」

ライダーはMVSを手放すとMVSの柄目掛けて拳を突き出し無理やりMVSをめり込ませる、そして続いて回し蹴りを叩き込み更に深くMVSをめり込ませる、しかし次の瞬間には二本のMVSを左手で引き抜いてしまう、そして二本のMVSによつてできた僅かな切り口に右手に持っていたスパーヴァリスの銃口を押し込む

「いくら装甲が厚くてもこの距離なら、砕ける！」

最大出力のフルバーストモードで放たれたスーパーヴァリスは派手な爆発を引き起こした、爆発と共に安全圏まで退避したライダーは爆煙が晴れるた後のデモンベインの左腕を見て愕然とした。

MVSでヒビを作り内部から爆破したにもかかわらず、中ほどまで届く穴が空いたものの何の問題もなく左腕を動かしていた

初めてデモンベインに傷らしい傷をつけることに成功したものの左腕を落とすまでには至らず更に僅かずつではあるものの自動的な修復が行われていた

「そ、そんな」

目を見開き立ち尽くすイヴ、しかしハヤテはデモンベインの圧倒的な防御力を見ても不敵な笑みを浮かべる

「いえ、十分です。キャスター！」

ハヤテの叫びに呼応し令呪が起動する。三千院邸で待機しいつでも爆煙を放てるよう準備していたキャスターに令呪によって本来ならば不可能な虚無の魔法による超長距離からのピンポイント攻撃を可能とする。勿論狙うべき場所は

「正面からは無理でも内部からならばどうですか？」

デモンベインの左肩に真つ白な光が収束しやがて強大無比な爆発となった、全てを包み込み破壊する虚無の魔法をしかも内部から撃ち込まれとあつては流石のデモンベインでさえも耐えきれなかった。

眩い白い閃光がおさまると同時に建物が倒壊したかのような重く大

きな音が辺りに響きわたる。

涼月達が目をあけると砕けたデモンベインの巨大な左腕と今まで圧倒的な力を見せつけていたデモンベインが膝をつく姿だった

「オッシャー！デカいのはもうグロッキーだぜ、良くやったな、チビスケに青いの」

「チビッ…まあこちらの方が数の上では有利……」

イヴは目を見開いて、喋っている最中に見えたものを凝視する。

「う、ウソ」

倒したハズのデモンベインは鏡が砕けるようにヒビが入り次の瞬間には砕け散る

「上です。伏せてください！」

ハヤテが声を張り上げると反射的に涼月達は上を向くと飛行ユニット、シャントクを展開した無傷のデモンベインが浮かんでいた、そしてその両手に握られた二丁魔銃、クトウグア、イタクアからそれぞれ莫大なエネルギーを伴った炎と風の魔弾が吐き出される

激しい爆発の後に残った物は絨毯爆撃を受けた後のような荒れ果てた惨状だった、えぐり取られた道路は所々あまりの高熱に耐えきれず融解してしまっていた、そんな中であつても涼月とイヴは自分のサーヴァントに守られて生きていた

「大丈夫でございまするか？御館様！」

「ああ、なんとかな、チビスケ達は？」

「はっ、イヴ殿はライダー殿が守っていたようございまする、ハヤテ殿は近くには見えませぬ」

「そうか」

涼月はゆっくりと立ち上がり上空のデモンベインを見上げる。デモンベインはこちらにトドメをさすべく銃口を向ける。

しかし次の瞬間、桜色と金色の二筋の閃光がデモンベインの持つクトウグアとイタクアの銃口に飛び込み内部から爆発を引き起こした。そして涼月達を庇うように白と黒の影が宙に舞う

「おっせーよ、バーカ」

第???話 L e a t h a l W e a p o n (前書き)

生存報告いたします。更新が遅れて申し訳ありません。頑張ってくださいと完結に向けて頑張っていると思います

第????話 L e a t h a l W e a p o n

ランサー達がデモンベインと戦っている間も最優のサーヴァント、セイバーと名実共に最強のサーヴァント、バーサーカーの壮絶な戦いは続いていた。

リミット状態のセイバーの神速の域に達した剣戟はドラゴンインストール状態のバーサーカーの拳や封炎剣と打ち合わされ轟音を響かせていた。

(……守勢に回った瞬間に確実にあのラッシュ力と破壊力でもっていかれる、なら対策は一つ)

(ちっ、地力自体はこっちの方が勝ってるはずなのに攻めきれねえそれどころか一瞬でも油断すればこっちがやられちまうぜ、こうなったらやることは一つだ)

両者の一段と強い一撃が激突し反動で弾き飛ばされ距離をとらされる

((攻め続ける))

次の瞬間には両者共に駆け出し開いた距離を潰し両者共に攻撃を再開する、大剣を用いリーチの長いセイバーがバーサーカーよりも早く横に薙ぐように大剣を振る、バーサーカーは振られた大剣を身をかがめて回避するとそのままの体制でセイバーの懐に潜り込み灼熱の炎を纏った右拳を突き出す、セイバーは攻撃を防ぐようなことはせずにサイドステップでかわし、そのまま体を一回転させながら大剣を振り回す、バーサーカーも慌てずに体制を整え封炎剣で迎え打つ、再び両者の武器がぶつかり合うが今回は回転力が加わったセイ

バーの大剣が勢いで勝った、それを悟ったバーサーカーは自分から衝撃を逃がす方向に飛ぶセイバーの大剣の勢いに乗りそれなりの距離を稼いだバーサーカーの目に映ったのは地面と平行に大剣を構え突き出しエメラルドグリーンの光を纏いながら突進するセイバーの姿だった

「かかって来やがれ！ガンフレイム」

バーサーカーは真っ直ぐ突進して来るセイバーに対し封炎剣を地面に突き刺し灼熱の炎を噴き上がらせる。

それを見てもなおセイバーはただひたすらに真っ直ぐバーサーカーに突進する、セイバーの大剣はバーサーカーの炎を切り裂きながら進むが、セイバーの全身を覆い尽くすほどの炎全てを切り裂くことは出来ず並みの人間ならば触れただけで炭化してしまいそうな炎の中を文字通りその身を焦がしながら突き進む、そんな一瞬の攻防の後見えたのは真っ正面から自分の技を破られ目を見開いたバーサーカーの姿だった。腕をクロスしこの戦いが始まってから初めて完全に防御に回ったバーサーカーにセイバーの大剣が突き出される、バーサーカーのガードの上から命中したにもかかわらず、セイバーの攻撃はバーサーカーを後ろに跳ね飛ばした。

跳ね飛ばされたバーサーカーは道路脇の街路樹やガードレールにぶつかりそれらを砕きながら飛び続けビルの壁に激突しバーサーカーの体がめり込んだ時点でやっとな止まった

（クソが、あの野郎ガンフレイムを真っ正面から破りやがった、しかもガードしたってのにこのザマかよ）

手を休めることなくバーサーカーに迫るセイバーに対し先ほどのダメージを感じさせないほどの力強さ自身がめり込んだビルから這い出しバーサーカーもまたセイバーに向かって駆け出す。

激突した二人は以前にもまして激しい攻防を始める、お互いにダメージを負った二人は完璧に攻撃を防ぐのを止め致命傷になりそうな攻撃のみを防ぎ、それ以外の攻撃を薄皮一枚で避けながら攻撃し続ける。二人共僅かずつではあるものの傷を作り合いダメージを深めていった。

二人の永遠のようでありながらも一瞬だったようにも感じられる格闘は両者が数mの距離を空け睨み合ったことで一時中断した、中断したからと言って対して何かが変わるわけではなかった、両者にとつてこの程度の距離など何の障害にもなりはしなかったし、体中に出来た傷口から僅かずつ体力を奪っていくなか集中力を切らすことなく睨み合うことは戦うことと同義だった

しかし、両者の頭上で今まで感じたことのない圧倒的な魔力が発生し均衡は一気に崩れた、つまり両者共に自分のマスターを守るため停戦し駆け出したのだった

「ふむ、サーヴァントが七騎全てのサーヴァントが揃ったようじゃの、行くぞ、いつき」

「ああ、行くぞアサシン」

二人の意志に呼応するように空中で制止しているデモンベインに先のバーサーカーをも超える圧倒的な魔力が発生する。その魔力は同じサーヴァントにさえ戦慄を抱かせるに十分な量だった

いつきにより封印されていたデモンベイン最強の術式にして最大の武器、数多の機戒神を破壊した正しく必殺・必滅の威力を持つ一撃レムリア・インパクトが起動する。

「やっべえな、あそこまであからさまな魔力を見せつけられると流石にまいちまうぜ」

涼月にしては珍しく完全にお手上げといった感じでいつものようにタバコをふかし始める

「何を言いまする、御館様！御命令さえいただければこの身にかえでも彼の者落としてご覧に入れましようぞ」

隣で熱く語るランサーを尻目に涼月はゆっくりとタバコを吸いながらアーチャーにも声をかける

「アーチャーとそれにチエイサーっただけ、お前ら二人と家のランサーの三人でアレ防げそうか？」

顎をしゃくりあげ膨大な魔力を放つデモンベインを指す

「正直、三人で防御に全魔力を集中させて防げるかどうかってレベルだね、にやははは」

「私もアーチャーと同じアレをどうこうするっていうのは多分無理」

乾いた笑い声をもらすアーチャーそしてそれと同意見のチエイサーに涼月もまた乾いた笑いをもらす

「ハハハ、だよなっ、んじゃ全力で防御に入りますか」

「承知仕った」

「私もそれに同意」

「同じく」

4人が防御に専念するべく身を寄せ合わせようとした時、アーチャーの隣を一人の少年が通り過ぎた

「マスター？」

上条当麻の身体はチェイサーとの闘いですでにボロボロだった、焦げた穴の空いたシャツからはチェイサーの魔法により火傷が覗かしている。

それでも当麻は上空にいるデモンベインを見据え、彼の唯一の武器である右手を持ち上げる

「マスター！無理だよ、逃げて」

「バカ野郎、んな身体で何しにきたんだよ」

当麻はアーチャーや涼月の忠告をきくことなく右手を上空にかざし左手で右腕を掴み支える

一見魔法や異能に対して無敵に見える当麻の右手、幻想殺し（イマジンプレイカー）には実は限界が存在する、例えば魔導書の原典を使用した超高威力かつ複雑な術式の場合、幻想殺しの処理速度を超え打ち消すことはできない

無論、当麻自身もこのことを熟知しておりそういった攻撃に対しては弾くまた掴むなどの手段を用いて回避する、しかし今回の場合回避などという選択は存在しない、何故ならばレムリア・インパクトは多少の着弾点が多少ズレたとして余裕でこちら一帯を文字通り焦土と化することができるからだ

当麻は全てをしりながらもデモンベインに立ち向かう、当麻は真っ直ぐ上を見ていた瞳をアーチャーに向ける

「俺を信じるアーチャー！俺もお前がアイツを倒せるって信じる、だからお前も俺を信じる」

それだけ言うと当麻はまた上に向き直る、そしてその言葉を受けたアーチャーは静かに今まで準備していた防御用の術式を解除しデモンベイン用の攻撃術式を準備し始めた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2804i/>

Fate ~ Legend night ~

2011年6月4日07時29分発行